

ISSN 1341-6952

# 東北大学埋蔵文化財調査年報**24**

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10）の調査  
青葉山新キャンパス試掘調査

東北大学埋蔵文化財調査室  
**2010**

年報24 正誤表

頁	誤	正
図目次	図22 青葉山新キャンパス試掘調査区配置図(第3段階A区域)	図22 青葉山新キャンパス試掘調査区配置図(第3段階A地区)
図目次	図23 青葉山新キャンパス試掘調査区配置図(第3段階B区域)	図23 青葉山新キャンパス試掘調査区配置図(第3段階B地区)
図目次	図24 青葉山新キャンパス試掘調査区配置図(第3段階C区域)	図24 青葉山新キャンパス試掘調査区配置図(第3段階C地区)

# 東北大学埋蔵文化財調査年報24

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10）の調査  
青葉山新キャンパス試掘調査

東北大学埋蔵文化財調査室  
2010

## 序

東北大学構内には、仙台城跡二の丸地区をはじめとして、多くの埋蔵文化財包蔵地が知られている。

本書は、平成18年度に東北大学構内で実施した、施設整備に伴う埋蔵文化財調査や、それに関わる整理作業、研究活動などの事業をとりまとめたものである。平成18年度は、従来から実施している業務に加えて、これまでにない新たな事業に取り組むこととなった。

一つは、青葉山新キャンパス予定地における試掘調査である。81万平方メートルという、広大な事業対象地における遺跡の有無を確認する調査であり、効率的な調査の遂行が必要とされる事業であった。試掘調査の結果、これまで確実なデータに欠けていた青葉山C遺跡において、旧石器時代の石器が確認されるという成果があった。

もう一つは、仙台市地下鉄東西線補償建物に関わる調査である。仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区における大規模な調査で、翌年度にまで続く事業となった。地下鉄工事の工程との関係で、限られた期間で調査を遂行する必要がある、これまでにない大規模な調査体制を組むことが必要となった。こちらについては、仙台市からの補償費を財源とした事業であり、調査報告書も別個に刊行されることとなる。

いずれも当調査室にとっては未経験のことであったが、幸いなことに、大学内外の関係機関の御協力を得て、滞りなく事業を進めることができた。ここに厚くお礼申し上げるとともに、本書で報告されるデータが各方面で活用されることを望むものです。

東北大学埋蔵文化財調査室

室長 阿 子 島 香

## 例 言

1. 本年報は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査室が2006年度に行った遺跡調査、ならびに研究成果をまとめたものである。

2. 報告される遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下のとおりである。

仙台北城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10）

本 調 査 2006年10月2日～11月10日 藤沢敦・高木暢亮（現帝京大学文学部・2008年度まで東北大学埋蔵文化財調査室）

青葉山新キャンパス試掘調査

試掘調査 2006年5月9日～9月7日 藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮

3. 調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査室が行った。

4. 本年報の編集は、阿子島香の指導のもとに、藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮（2008年度まで）・菅野智則（2009年度から）が担当した。

5. 本文は、藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮が執筆したほか、宮城県教育庁文化財保護課の村上裕次氏に、青葉山C遺跡出土石器について、実測図作成・トレースおよび本文執筆について御協力を賜った。執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章1・5、第Ⅲ章1・2・5：藤沢敦

第Ⅱ章2・3、第Ⅲ章3：高木暢亮・藤沢敦

第Ⅱ章4：柴田恵子

第Ⅲ章4：村上裕次

英文要旨については、柴田恵子が作成し、阿子島香が校訂した。

6. 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申しあげる（敬称略）。

仙台市教育委員会、東北大学考古学研究室、東北大学キャンパス計画室

杉山丞（東北大学キャンパス計画室）、柳田俊雄（東北大学総合学術博物館）、鹿又喜隆（東北大学考古学研究室）、村上裕次（宮城県教育庁文化財保護課）

5. 出土遺物・調査記録は、東北大学埋蔵文化財調査室で保管・管理している。

## 凡 例

1. 方位は真北に統一してある。

2. 図1と図2は、それぞれ国土地理院作成の、2万5千分の1地形図「仙台北西部」と「仙台西南部」、1万分の1地形図「青葉山」を使用した。

3. 川内地区の仙台北城跡二の丸地区、および二の丸北方の武家屋敷地区にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台北城跡地形図」（縮尺500分の1）を使用した。

4. 国土座標値を用いる場合には、日本測地系と世界測地系の別を、それぞれ記入した。

5. 引用・参考文献は、巻末にまとめた。また本文中で、『東北大学埋蔵文化財調査年報』を引用する場合は、年報1という形で略記した。

## 東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会 (2006年度)

委員長	室 長 (文学研究科 教授)	阿子島 香
委 員	施設整備・運用委員会川内キャンパス整備委員会委員 (経済学研究科 教授)	佐 藤 秀 夫
	施設整備・運用委員会青葉山キャンパス整備委員会委員 (生命科学研究科 教授)	河 田 雅 圭
	施設整備・運用委員会星陵キャンパス整備委員会委員 (加齢医学研究所 教授)	近 藤 丘
	施設整備・運用委員会片平キャンパス整備委員会委員 (研究教育基盤技術センター教授)	青 木 晴 善
	施設整備・運用委員会雨宮キャンパス整備委員会委員 (農学研究科 教授)	山 口 高 弘
	文学研究科 教 授	須 藤 隆
	文学研究科 教 授	今 泉 隆 雄
	文学研究科 教 授	大 藤 修
	理学研究科 教 授	藤 巻 宏 和
	工学研究科 教 授	飯 淵 康 一
	総合学術博物館 教 授	柳 田 俊 雄
	東北アジア研究センター 教 授	平 川 新
	施 設 部 長	長 沢 護
	施 設 部 長 (7月から)	山 下 治
幹 事	施 設 部 企画課長	川 田 裕

## 東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会 (2006年度)

委員長	室 長 (文学研究科 教授)	阿子島 香
委 員	文学研究科 教 授	須 藤 隆
	文学研究科 教 授	今 泉 隆 雄
	文学研究科 教 授	大 藤 修
	理学研究科 教 授	藤 巻 宏 和
	工学研究科 教 授	飯 淵 康 一
	総合学術博物館 教 授	柳 田 俊 雄
	東北アジア研究センター 教 授	平 川 新
	埋蔵文化財調査室 文化財調査員 (特任助教授)	藤 沢 敦
	埋蔵文化財調査室 文化財調査員 (専門職員)	柴 田 恵 子
	埋蔵文化財調査室 文化財調査員 (専門職員)	高 木 暢 亮
	学生・支援部長	佐 藤 稔
	施 設 部 企画課長	川 田 裕

# 目 次

序

例言

凡例

東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会

東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会

目次

図目次

表目次

図版目次

第Ⅰ章 2006年度（平成18年度）事業の概要	1
1. はじめに	1
2. 運営専門委員会・調査部会	4
3. 埋蔵文化財調査の概要	5
(1) 川内北地区の調査	5
(2) 川内南地区の調査	10
(3) 青葉北地区の調査	10
(4) 青葉東地区の調査	14
(5) 青葉山新キャンパス予定地での調査	14
4. 遺物整理作業	15
5. 保存処理事業	15
6. 資料保管状況	16
7. 研究活動	16
(1) 受託研究・共同研究等	16
(2) 学会発表等	18
(3) 資料調査	19
(4) 科学研究費採択状況	19
8. 教育普及活動	19
(1) 非常勤講師	19
(2) 授業など教育活動への協力	19
(3) 保管資料の貸出	19
(4) 外部からの派遣依頼等	20
(5) 広報活動	20
第Ⅱ章 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10）の調査	21
1. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の 立地と歴史	21
2. 調査経緯	22
(1) 2005年度までの調査	22
(2) 調査地点の位置	22
(3) 調査の方法と経過	23
3. 検出遺構	23
4. 出土遺物	27
(1) 陶磁器・土師質土器	27
(2) 瓦	27
5. まとめ	29
第Ⅲ章 青葉山新キャンパス地区試掘調査	31
1. 青葉山地区の地形と遺跡	31
2. 調査経緯	33
(1) 調査にいたる経緯	33
(2) 調査経過	34
3. 試掘調査結果	35
(1) 予備調査	35
(2) 第1段階	35
(3) 第2段階	39
(4) 第3段階	42
① A地区	43
② B地区	43
③ C地区	43

④青葉山C遺跡地区	47
4. 出土遺物	49
引用・参考文献	
英文要旨	

写真図版

5. まとめ	51
--------	----

## 図 目 次

図1 東北大学と周辺の遺跡	2	図23 青葉山新キャンパス	
図2 仙台城と二の丸の位置	3	試掘調査区配置図(第3段階B区域)	46
図3 川内北地区調査地点	6	図24 青葉山新キャンパス	
図4 川内南地区調査地点	7	試掘調査区配置図(第3段階C区域)	46
図5 武家屋敷地区第11地点調査状況	8	図25 青葉山新キャンパス試掘調査区	
図6 青葉山地区調査地点	11	配置図(第3段階青葉山C遺跡地区)	47
図7 青葉山B遺跡試掘調査地点	12	図26 青葉山新キャンパス	
図8 青葉山B遺跡試掘調査状況	13	試掘3-61区平面図・断面図	48
図9 収蔵遺物量の推移	17	図27 青葉山新キャンパス	
図10 武家屋敷地区第10地点調査区の位置	22	試掘3-61区出土石器	50
図11 武家屋敷地区第10地点		図28 青葉山新キャンパス	
1区検出遺構平面図・断面図	24	試掘調査区位置図(1)	52
図12 武家屋敷地区第10地点		図29 青葉山新キャンパス	
2区検出遺構平面図・断面図	25	試掘調査区位置図(2)	53
図13 武家屋敷地区第10地点出土瓦(1)	28	図30 青葉山新キャンパス	
図14 武家屋敷地区第10地点出土瓦(2)・磁器	29	試掘調査区位置図(3)	54
図15 青葉山段丘の段丘面区分	32	図31 青葉山新キャンパス	
図16 青葉山段丘各面とテフラの関係	32	試掘調査区位置図(4)	55
図17 青葉山Ⅲ面の基本層序模式図	32	図32 青葉山新キャンパス	
図18 青葉山新キャンパス		試掘調査区位置図(5)	56
試掘調査区配置図(予備調査)	36	図33 青葉山新キャンパス	
図19 青葉山新キャンパス		試掘調査区位置図(6)	57
試掘調査区配置図(第1段階)	38	図34 青葉山新キャンパス	
図20 青葉山新キャンパス		試掘調査区位置図(7)	58
試掘調査区配置図(第2段階)	41	図35 青葉山新キャンパス	
図21 青葉山新キャンパス		試掘調査区位置図(8)	59
試掘調査区配置図(第3段階)	44		
図22 青葉山新キャンパス			
試掘調査区配置図(第3段階A区域)	45		

## 表 目 次

表 1	2006年度調査概要表……………	5	表 7	武家屋敷地区第10地点出土棧瓦観察表……………	30
表 2	年度ごとの収蔵遺物箱数の推移……………	17	表 8	武家屋敷地区第10地点出土棟瓦観察表……………	30
表 3	武家屋敷地区第10地点出土 陶磁器・土器集計表……………	30	表 9	青葉山新キャンパス試掘3-61区 出土石器属性表……………	50
表 4	武家屋敷地区第10地点出土瓦集計表……………	30	表10	青葉山新キャンパス試掘3-61区 出土石器石材表……………	50
表 5	武家屋敷地区第10地点出土磁器観察表……………	30			
表 6	武家屋敷地区第10地点出土平瓦観察表……………	30			

## 図 版 目 次

図版 1	武家屋敷地区第10地点検出遺構 (1)……………	67	図版 5	青葉山新キャンパス試掘調査状況……………	71
図版 2	武家屋敷地区第10地点検出遺構 (2)……………	68	図版 6	青葉山新キャンパス 試掘調査状況・出土遺物……………	72
図版 3	武家屋敷地区第10地点出土遺物 (1)……………	69			
図版 4	武家屋敷地区第10地点出土遺物 (2)……………	70			

# 第 I 章 2006年度（平成18年度）事業の概要

## 1. はじめに

東北大学には、仙台市内の各キャンパスに加えて、多くの研究施設がある。これらの各地区構内には、多くの埋蔵文化財が存在している（図1）。特に川内地区は、ほぼ全域が近世の仙台城跡の二の丸地区と武家屋敷地区にあたる（図2）。東北大学構内での施設整備等に伴う埋蔵文化財調査については、1983年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が組織されて以降、その実務機関である埋蔵文化財調査室が、調査の任にあたってきた。1994年度には、埋蔵文化財調査委員会を改組し、学内共同利用施設としての埋蔵文化財調査研究センターが設置され、調査委員会の事業を引き継いだ。

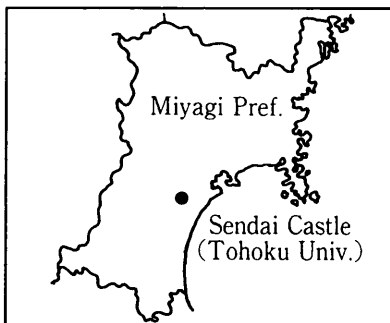
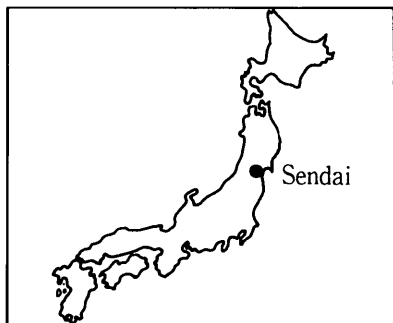
埋蔵文化財調査研究センターでは、2004年度の国立大学法人化を控え、将来の組織体制についての検討を2002年度に関係機関と協議しつつ行い、東北大学総合学術博物館と統合しその一部門とする方針を策定し、当時の東北大学制度検討委員会の承認を得た。しかしこの総合学術博物館との統合案は、埋蔵文化財調査研究センター職員の定員枠など、様々な問題点があり、先送りとなったままであった。

埋蔵文化財調査研究センターの調査研究員は、センター発足以来、助手3名が流用定員によって措置されていた。法人化を控え、2002年度から全学枠定員制度が開始され、センター助手3名も全学枠定員で措置されることとなった。この全学枠定員の財源は、法人化後は中央枠予算によるものとされたが、暫定的な性格の強いものであった。そのため2005年度に、全学枠定員検討ワーキング・グループが作られ、従来の全学枠定員のあり方を抜本的に見直し、新たに中央枠予算で措置すべき中央枠教員の定義と運用ルール、全学枠定員から中央枠教員への移行措置等について検討が進められた。同時に、担当理事によって、学内共同教育研究施設等の在り方の検討が進められた。

これらの組織・定員の見直しが進められた結果、2006年度当初より、学内共同教育研究施設等に区分されていた埋蔵文化財調査研究センターは、特定事業組織として区分され埋蔵文化財調査室へと改組されることとなった。同時に全学枠定員の見直しに伴い、助手3名は全て一般職員に移行し、その内1名が特任助教授（2007年度から特任准教授）、2名が専門職員との位置づけとなった。また、規程による宛て職名は「文化財調査員」となった。改組に伴う規程改正については、前年度末の3月27日開催の運営委員会において審議を行い、4月26日開催の東北大学役員会において規程改正が審議・承認され、4月1日に遡って適用されることとなった。

今回の組織改編は、主に調査員の身分にかかわるもので、その点では東北大学における埋蔵文化財調査組織発足以来の大きな変化であった。ただ、東北大学構内における埋蔵文化財調査の実務を遂行していく上では、大きな変化は無く、埋蔵文化財調査研究センターの事業の一切を引き継ぎ、従来と同様の進め方で業務を行っていくこととなった。

2006年度は、それまでに無い新たな業務に対処することが必要となった。一つは、青葉山新キャンパス予定地における、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査である。もう一つは、仙台市地下鉄東西線の建設が川内北キャンパスの一部を通る計画で開始され、機能補償に伴う事業が本年度から始まったことである。地下鉄東西線機能補償に係わる事業では、取り壊される武道場や食堂の代替えの建物建設に伴い、大規模な発掘調査を2006年9月から開始することとなった。これら地下鉄東西線機能補償に係わる調査は、仙台市からの補償費を財源として実施したもので、別に調査報告書を刊行する予定である。そのため本年報では、2006年度に実施した事業について、地下鉄東西線機能補償に係わる事業は概略のみを紹介し、それ以外の施設整備事業・営繕事業などに伴う埋蔵文化財調査、および青葉山新キャンパス予定地の試掘調査結果、その他の調査室の活動についてとりまとめて、報告するものである。



- 1 : Ruin of Sendai Castle
- 2 : Kawauchi steles
- 3 : Aobayama B Site
- 4 : Aobayama E Site
- 5 : Aobayama C Site
- 6 : Aobayama A Site
- 7 : Aobayama D Site
- 8 : Ashinokuchi Site



- 1 : 仙台城跡 2 : 川内古碑群 3 : 青葉山遺跡B地点 4 : 青葉山遺跡E地点 5 : 青葉山遺跡C地点 6 : 青葉山遺跡A地点
- 7 : 青葉山遺跡D地点 8 : 芦ノ口遺跡 9 : 片平仙台大神宮の板碑 10 : 郷六太日如来の碑 11 : 葛岡城跡 12 : 郷六城跡
- 13 : 郷六建武碑 14 : 沼田遺跡 15 : 郷六御殿跡 16 : 郷六遺跡 17 : 松ヶ岡遺跡 18 : 向山高裏遺跡 19 : 萩ヶ丘遺跡
- 20 : 茂ヶ崎城跡 21 : ニツ沢横穴墓群 22 : 萩ヶ岡B遺跡 23 : 八木山緑町遺跡 24 : ニツ沢遺跡 25 : 青山二丁目遺跡
- 26 : 青山二丁目B遺跡 27 : 杉土手 (鹿除土手) 28 : 砂押屋敷遺跡 29 : 砂押古墳 30 : 富沢遺跡 31 : 泉崎浦遺跡
- 32 : 金洗沢古墳 33 : 土手内竈跡 34 : 土手内遺跡 35 : 土手内横穴墓群 36 : 三神峯遺跡 37 : 金山竈跡 38 : 三神峯古墳群
- 39 : 富沢竈跡 40 : 裏町東遺跡 41 : 裏町古墳 42 : 原東遺跡 43 : 原遺跡 44 : 八幡遺跡 45 : 後田遺跡 46 : 町遺跡
- 47 : 神瀧山遺跡 48 : 御堂平遺跡 49 : 上野山遺跡 50 : 北前遺跡 51 : 佐保山東遺跡

図1 東北大学と周辺の遺跡  
Fig.1 Archaeological sites and Tohoku University

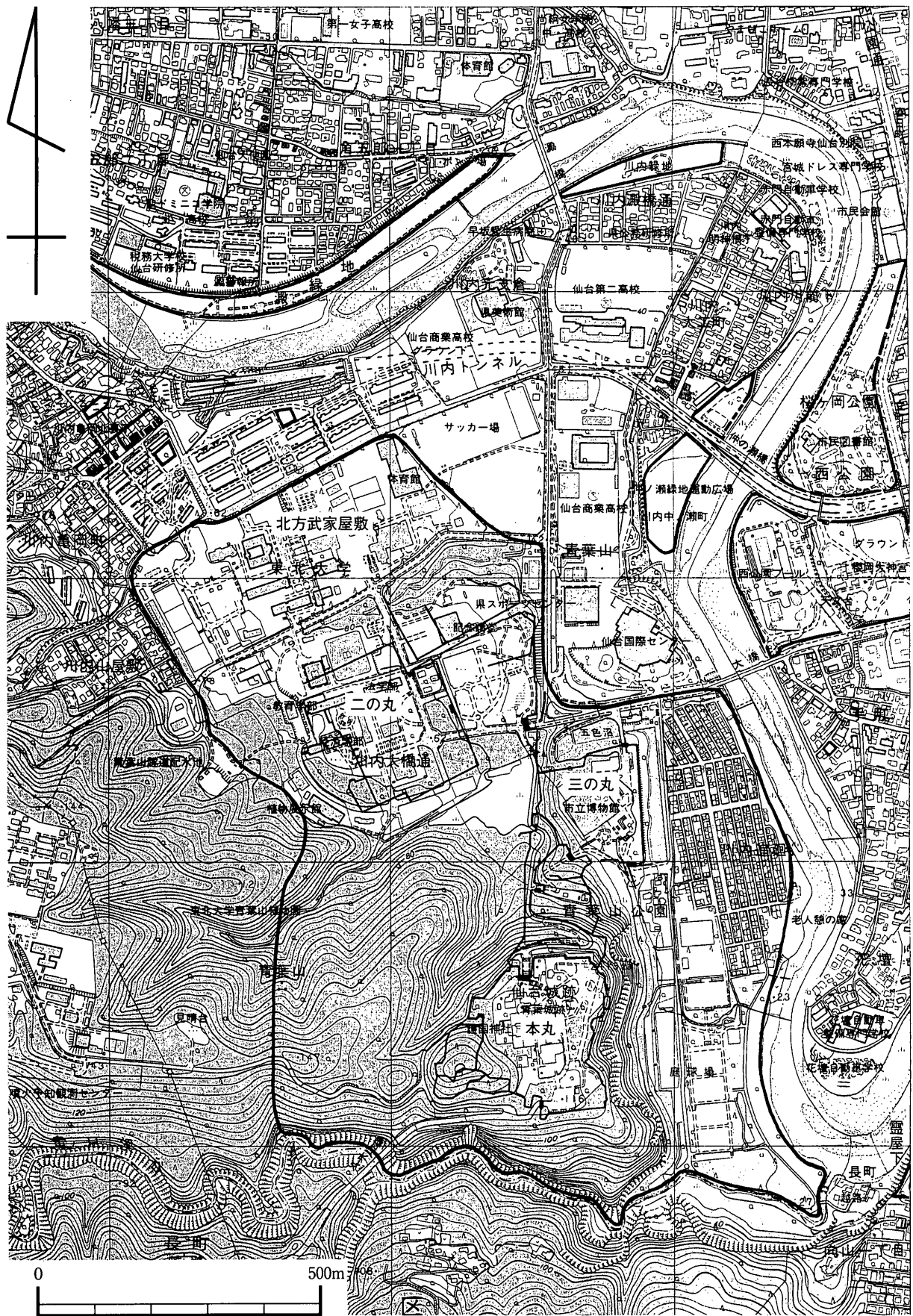


図2 仙台城と二の丸の位置  
Fig.2 Distribution of Sendai Castle

## 2. 運営委員会・調査部会

東北大学埋蔵文化財調査室では、運営に関する重要事項を審議する運営委員会と、運営委員会の下に埋蔵文化財調査に関する専門的事項を審議する調査部会が設置されており、委員会・部会の審議をもとに運営が進められている。これらの運営委員会・調査部会の委員の構成や役割は、埋蔵文化財調査研究センターにおける運営専門委員会・調査部会を引き継いだ形となっており、大きな変更はない。通常は、運営委員会は年度当初に一回開催し、そこで年間の事業予定・予算などの基本的事項を審議している。調査に関わる具体的かつ専門的な事項は、必要に応じて調査部会を開催して審議することとしている。

運営委員会および調査部会の開催月日と議事内容は、以下の通りである。

### 埋蔵文化財調査室運営委員会

- 6月29日 審議事項 (1) 室長について  
(2) 平成18年度埋蔵文化財調査計画について  
(3) 平成18年度調査室運営費について  
(4) 平成18年度の整理作業計画について  
(5) その他
- 報告事項 (1) 組織改編に伴う規定等の変更について  
(2) 平成17年度埋蔵文化財調査結果について  
(3) 平成17年度センター運営経費決算について  
(4) 平成17年度の整理作業について  
(5) その他
- 2月15日 審議事項 (1) 埋蔵文化財調査室職員等について  
(2) その他

### 埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会

- 9月25日 審議事項 (1) 地下鉄東西線補償建物（仮称川内武道館）新営に伴う調査計画  
(2) 川内北キャンパス共通実験棟改修に伴う調査計画  
(3) その他
- 報告事項 (1) 青葉山新キャンパス予定地試掘調査報告  
(2) その他
- 12月21日 審議事項 (1) 地下鉄東西線補償建物（仮称川内武道館）新営に伴う調査について  
(2) その他

2006年度（平成18年度）は、運営委員会は2回開催した。6月に開催した運営委員会は、例年開催している年度当初の委員会である。2月の運営委員会は、仙台市からの補償費を財源として、文化財調査員などの職員を、翌2007年度から任期付きで新たに採用することとなったため、それについて審議するために開催した。

調査部会は2回開催した。2006年度は、地下鉄東西線補償建物新営に伴う調査と、川内北キャンパス共通実験棟改修に伴う調査を、10月より実施することとなった。これらについては、6月に運営委員会を開催した時点では、調査面積や具体的な調査方法などの詳細が未確定であったため、大まかな計画での審議に留まっていた。そのため、調査開始に先立つ9月に調査部会を開催し、調査方法などの詳細について、審議したものである。

地下鉄東西線補償建物に伴う調査は、翌年度以降に継続する予定であった。12月までの調査成果を一旦報告し、今後の調査の進め方について審議するために、12月にも調査部会を開催した。12月の調査部会は、地下鉄東西線補償建物に伴う発掘調査現地において開催し、部会議事に先立ち委員による調査状況の視察を行った。

### 3. 埋蔵文化財調査の概要

2006年度は、本調査2件、試掘調査2件、立会調査16件を実施した（表1）。立会調査は、仙台市教育委員会と合同で実施している。

2006年度は、通常の施設整備や営繕工事に伴う調査以外に、地下鉄東西線機能補償関係と青葉山新キャンパス関係の調査も実施している。本調査の1件、立会調査の2件が、地下鉄東西線機能補償関係の事業である。試掘調査の1件が、青葉山新キャンパス予定地の調査である。

#### (1) 川内北地区の調査

川内北地区では、本調査2件、立会調査7件を実施した（図3）。

本調査の1件は、教養教育のための共通実験棟改修工事に伴う、仙台北城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10）の調査である。工事の大半は既存建物の改修であるが、一部で増築されることとなった。この増築部分については、遺構の残存する深さまで掘削されることとなるため、記録保存のための本調査を実施することとした。調査は2006年10月2日から11月10日までの期間で実施した。この武家屋敷地区第10地点の調査については、本年報の第Ⅱ章において報告する。

表1 2006年度調査概要表  
Tab.1 Excavations on the campus in the fiscal yeay 2006

調査の種類	地 区	調 査 地 点 (略号)	原 因	備考	調査期間	面積㎡	時期
本調査	川内北	仙台北城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点 (BK10)	共通実験棟改修工事		10/2～11/10	124.5	近世
	川内北	仙台北城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点 (BK11)	武道館新築工事	補償	10/2～3/31 翌年度継続	1.391	近世
試掘調査	青葉山新	青葉山C遺跡 (AOC) ほか 青葉山新キャンパス予定地	青葉山新キャンパス計画		5/9～9/7	932	旧石器
	青葉山北	理・薬厚生会館北側松林 (2006-1)	理・薬松林環境整備工事		1/15～26	42.1	-
立会調査	川内南	入試課ほか (2006-2)	入試課構内舗装その他工事		6/20	-	-
	川内南	付属図書館南側 (2006-3)	屋外ガス管改修工事		6/25、8/1	-	-
	青葉山東	工学研究科東食堂 (2006-4)	工学研究科東食堂新営工事		7/13・14	-	-
	川内北	プール北西側 (2006-5)	課外活動施設新営その他工事		7/18、8/21・ 29、2/21	-	-
	川内北	厚生会館西側 (2006-6)	インフォメーションボード設置工事		7/24	-	-
	川内北	ハンドボールコート (2006-7)	ハンドボールコート改修工事	補償	8/30、9/6	-	-
	川内南	旧半導体研究所 (2006-8)	旧半導体研究所改修機械設備工事		11/6・10	-	-
	川内北	マルチメディア教育研究棟北側他 (2006-9)	支障樹木伐採・移植	補償	11/24・30	-	-
	青葉山東	未来科学技術共同研究センター東側 (2006-10)	ガス管支障迂回工事		11/29	-	-
	川内南	記念講堂北側 (2006-11)	屋外ガス漏れ復旧工事		12/4	-	-
	川内北	共通実験棟周辺 (2006-12)	共通実験棟改修工事		1/9～12・16、 3/8	-	-
	青葉山北	サイクロトロンRIセンター南側 (2006-13)	分子イメージング棟新営工事		1/10、22～24	-	-
	青葉山東	量子エネルギー工学北側 (2006-14)	植物園ゲート新営工事		1/25	-	-
	川内北	学生相談所東側 (2006-15)	学生相談所増築その他工事		2/5・7	-	-
	川内北	川内北地区講義棟東側 (2006-16)	給水管改修工事		3/1	-	-
	青葉山北	理学部管理棟 (2006-17)	理学部管理棟耐震改修工事		3/1	-	-

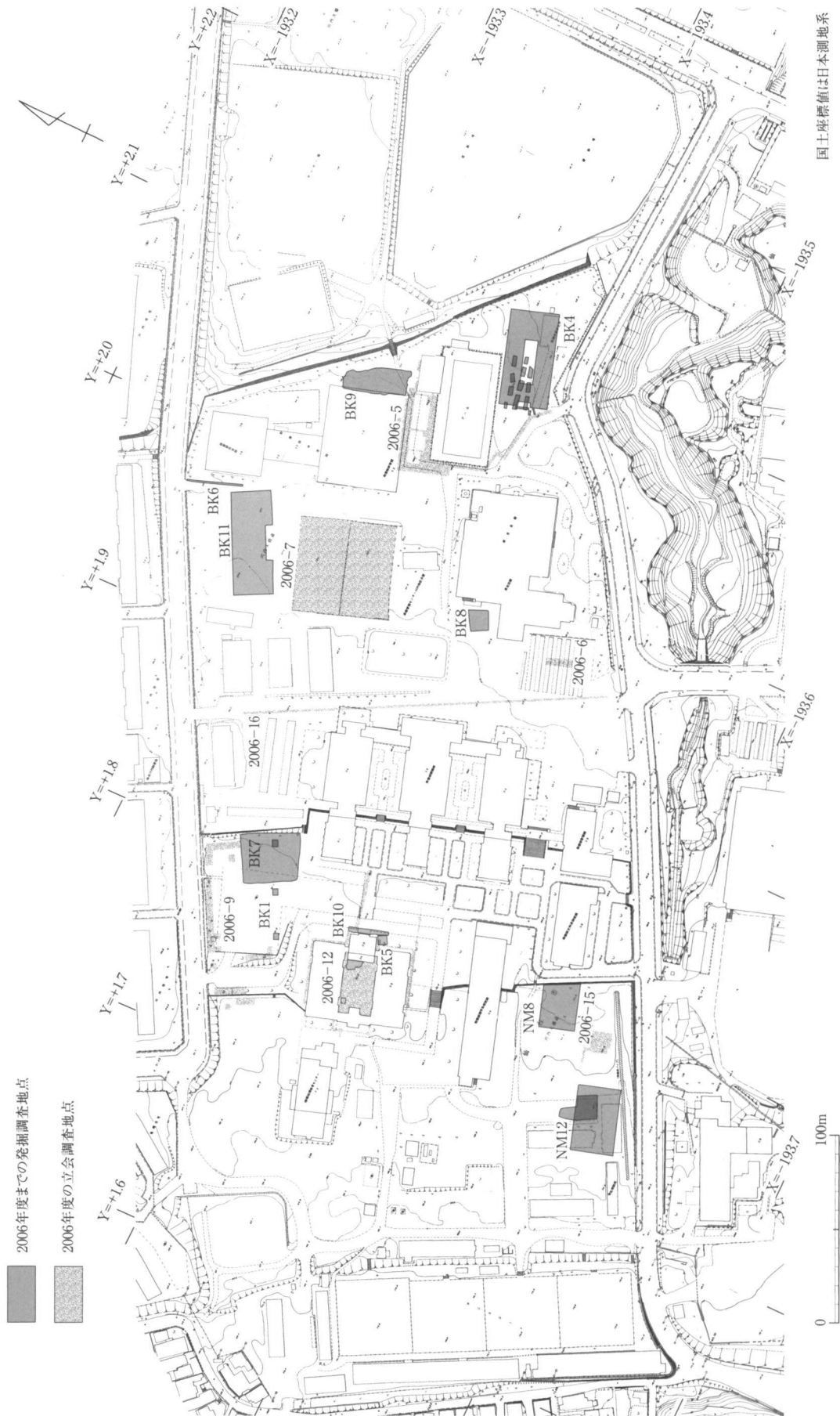


図3 川内北区調査地点  
Fig.3 Location of excavations at Kawauchi-Kita campus (NM i.e. Secondary Citadel, BK i.e. *samurai* residence)

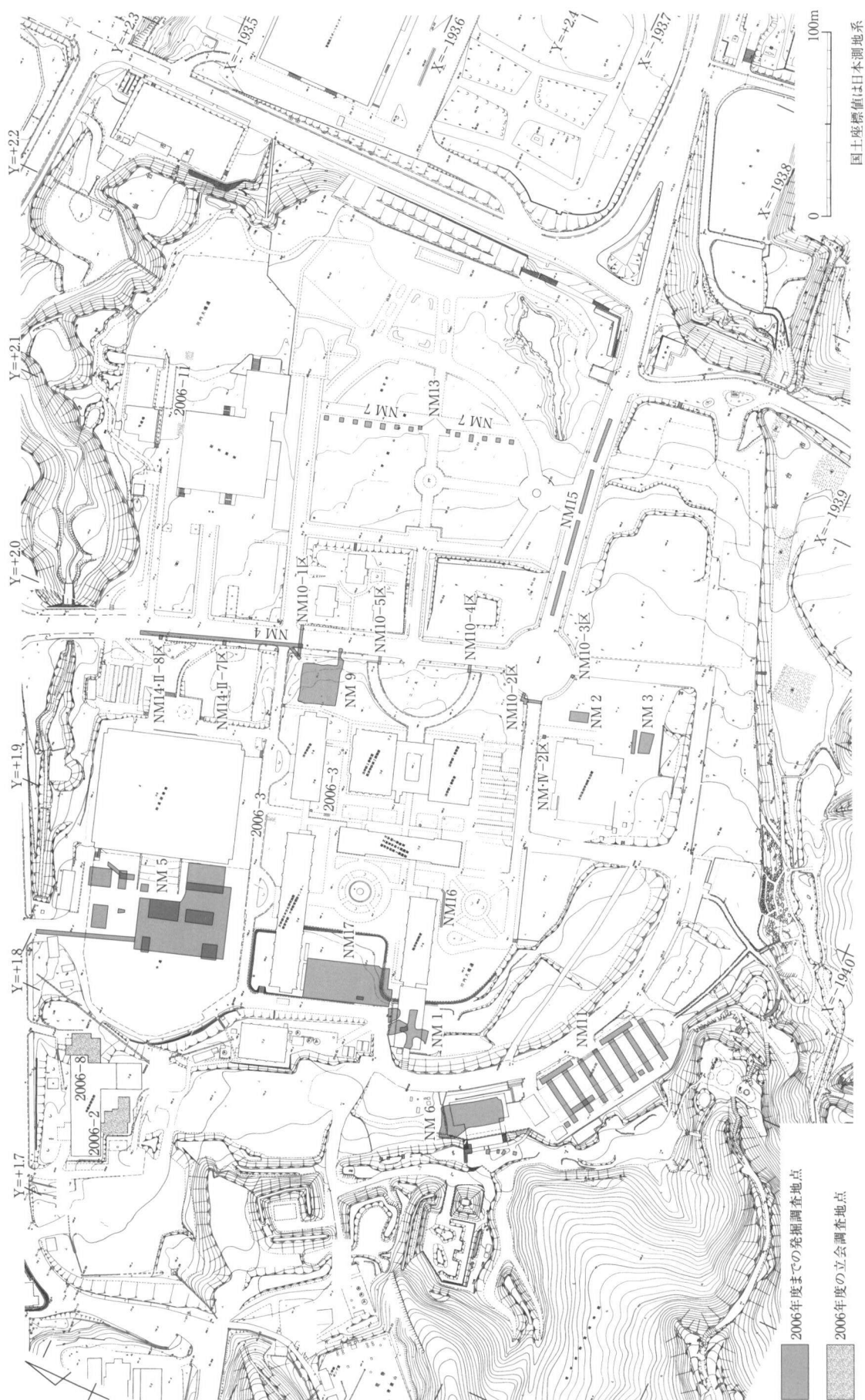


図4 川内南区調査地点  
Fig.4 Location of excavations at Kawauchi-Minami campus (NM i.e. Secondary Citadel)

本調査のもう1件は、地下鉄東西線建設によって取り壊される武道場や第二食堂などの機能補償のために建設されることとなったサブ・アリーナ棟の新営に伴う、仙台北城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（BK11）の調査である。体育館と第二食堂の間の、多目的広場として利用されていた場所に建設されることとなった。

補償建物の詳細な設計が完了しておらず、規模や位置がおおよそ決定していた状態であったが、仙台市の地下鉄工事スケジュールとの関係もあり、早急に調査に着手する必要がある。そのため、まず600㎡分について、先行して調査を開始することとした。共通実験棟改修工事に伴う武家屋敷地区第10地点の調査と併行して、2006年10月2日から重機による掘削を開始し、10月10日から作業員を投入した精査に入った。その後、建物計画の詳細が確定したのに伴い、12月1日から416㎡について追加の重機掘削を行い、調査範囲を拡大した。

1・2月は、厳冬期に入るため、少人数の人員で、遺構の精査を小規模ながら実施した。また、調査区東側に確保していた通路を移動する目処がたったため、2月14日から仮囲いの位置を移動し、375㎡について更に追加の重機掘削を行った。これによって、合計の調査面積1,401㎡の内、重機の進入が難しく手掘りで掘削することとなった10㎡分を除く1,391㎡について、2006年度に調査に着手したこととなった（図5）。3月からは作業員を増員し、本格的な調査を再開した。調査期間は、当初は7月末までの予定で、翌2007年度に継続して作業を進めることとなった。2007年度は、補償関係の調査担当者として、補償費を財源として調査員1名・准職員1名を増員し、調査を実施した。当初予定より若干の期間延長を行い、9月10日で調査の一切を終了した。

地下鉄東西線機能補償関係の調査は、整理作業や報告書刊行を含めて、仙台市からの補償費を財源として実施したものである。そのため、地下鉄東西線機能補償関係の調査成果をとりまとめた報告書を、別途刊行する予定である。この武家屋敷地区第11地点の調査についても、2007年度に実施した他の補償関係事業も含めて、そちらに掲載する予定である。



図5 武家屋敷地区第11地点調査状況  
Fig.5 View of BK11 (BK11 i.e. Location 11 of samurai residence)

立会調査の7件の概要は、次のとおりである。

・プール北西側課外活動施設新営その他工事に伴う調査（2006－5）

プール北側の東よりのところにプール更衣室があるが、その西側に、課外活動施設を新営するのに伴う調査である。課外活動施設の建物本体は、軽量鉄骨造の平屋のため、基礎は布基礎で、基礎掘削の深さも深いところでも50cm程度であった。工事予定区域では、近代以降の盛土が比較的厚いことが予想され、給排水・ガス・電気などの配管関係、周辺の舗装などの掘削も含めて、いずれも近代以降の盛土の範囲内に収まる可能性が高いと考えられたため立会調査とした。ほとんどは、近代以降の盛土の範囲内に収まったが、一部では盛土の直下の地山層まで掘削に至った場所がある。地山層に至った場所でも、遺構は発見されず、すでに削平されていると考えられる。江戸時代の陶磁器が若干出土したが、いずれも近代以降の盛土内からのものであった。

・厚生会館西側インフォメーションボード設置工事に伴う調査（2006－6）

大学創立100周年記念事業関係のインフォメーションボードを、厚生会館西側に設置するための工事である。掘削範囲が小規模であるため、立会調査とした。近代以降の盛土部分の掘削にとどまり、遺構・遺物は発見されなかった。

・ハンドボールコート改修工事に伴う調査（2006－7）

地下鉄東西線の補償建物が、体育館西側の多目的広場として利用されていた場所に建設されることとなったのに伴い、体育関係の施設の使用方法が見直されることとなった。その一環として、厚生会館北側にあるハンドボールコートが、地下鉄東西線補償関係の事業として改修されることとなった。工事内容は、舗装の改修、既存側溝や排水管の改修で、いずれも掘削深度が浅いため、立会調査とした。工事は、表層の掘削にとどまり、遺構・遺物は発見されなかった。

・マルチメディア教育研究棟北側ほか支障樹木伐採・移植に伴う調査（2006－9）

川内北地区の敷地の北端には、樹木が並木状に植えられていた。地下鉄東西線は、川内北地区の北側に沿って建設されるため、これらの樹木を除去することが必要となり、大半は伐採されることとなった。しかし、オオモミジ2本については、移植することとなったため立会調査を実施した。移植のために樹木の周囲を円形に、深さ約100cmの溝状に掘ったところ、一部で溝状の遺構が確認された。そのため、それ以上深く掘削することは中止し、この深さで進められる範囲で、移植工事を続けることとした。

・共通実験棟改修に伴う調査（2006－12）

共通実験棟改修については、建物本体に係わる建築関係の工事では、上記のように増築部分で本調査を実施した（BK10）。各種設備関係、外構関係の工事については、立会調査で対処することとした。掘削が深くなる配管については、可能な限り既存管の掘り方を利用して工事を進めた。ほとんどは、明治以降の盛土の範囲内であったが、一部で江戸時代の整地層の可能性のある地層が存在した。そのため、工事を中止して精査したが、遺構・遺物は発見されず、時期などは確定できなかった。それ以外でも、遺構・遺物の発見はなかった。

・学生相談所増築その他工事に伴う調査（2006－15）

川内地区を南北に分ける道路から、すぐ北側に入ったところに保健管理センターがあり、建設に先立ち二の丸第12地点の調査を実施している（NM12、年報11）。この調査では、二の丸北側の堀の、北側の岸が検出されている。この保健管理センターの東側に学生相談所があり、今回の工事は、その増築工事である。明治時代以降の盛土が3m程度と厚いことが判明している区域である上、建設される建物も平屋の軽量鉄骨造のため、遺構への影響は考えられないことから立会調査とした。掘削は、全て盛土の範囲内であった。

・講義棟東側給水管改修工事に伴う調査（2006－16）

北地区の講義棟東側に南北に伸びる給水管の改修工事に伴う調査である。既存管と同じ位置で改修する工事のため、立会調査とした。既存管によってすでに掘削されている範囲内であるため、特に問題はなかった。

## (2) 川内南地区の調査

川内南地区では、立会調査4件を実施した(図4)。

- ・旧半導体研究所入試課構内舗装その他工事に伴う調査(2006-2)

川内南地区の北西側には、かつて半導体研究所があり、財団法人半導体研究振興会が建物を所有していた。同財団の事業の見直しによって、この研究所での事業は廃止されることとなり、建物が東北大学に寄付された。東北大学では、教育・学生支援部入試課および入試センターなどがこの建物を利用している。今回の工事は、建物南側を舗装するためのもので、掘削が浅いため立会調査とした。表層の掘削にとどまり、遺構・遺物の発見はなかった。

- ・附属図書館南側屋外ガス管改修工事に伴う調査(2006-3)

附属図書館南側でガス漏れが発生したのに伴う緊急の工事である。既設ガス管の改修であることから、立会調査とした。既設管で既に掘削された部分の掘削にとどまり、遺構・遺物は発見されなかった。

- ・旧半導体研究所改修機械設備工事に伴う調査(2006-8)

教育・学生支援部入試課および入試センターなどが使用している旧半導体研究所の建物について、利用していない空き部屋を文学研究科考古学研究室が使用することとなった。そのために必要な改修工事の一環として、建物東側の污水管を改修することに伴う調査である。既存建物の建設時に掘削されている可能性が高いため、立会調査とした。掘削は、既存建物建設によって既に掘削された範囲内にとどまり、遺構・遺物は検出されなかった。

- ・記念講堂北側屋外ガス漏れ復旧工事に伴う調査(2006-11)

川内南地区の東側には記念講堂があるが、その北側でガス漏れが発生したのに伴う緊急の工事である。既設ガス管の改修であることから、立会調査とした。既設管で既に掘削された部分の掘削にとどまり、遺構・遺物は発見されなかった。

## (3) 青葉山北地区の調査

理学研究科・薬学研究科などが所在する青葉山北地区では、試掘調査1件、立会調査2件を実施した(図6)。

試掘調査を実施したのは、理・薬厚生会館北側松林の環境整備工事に伴う調査(2006-1)である。

厚生会館の北側には、松林があるが、下草が繁茂した藪となり、利用されていなかった。この松林は、周囲が削平されているため、一段高い区域となっており、青葉山北地区では残り少ない、大きな改変が加えられていない場所である。この松林から南側の一帯が、青葉山B遺跡とされている。青葉山B遺跡では、松林の南側で、2回の調査が行われている(AOB1・AOB2、年報2)。これらの調査の際に発見された旧石器については、ねつ造された危険性が排除できず、歴史資料としての価値は否定される検証結果となっている(東北大埋文センター2003)。一方これらの調査では、縄文土器・弥生土器・土師器などが出土しているため、ねつ造発覚後の見直しで、縄文時代早期・縄文時代中期・弥生時代・古代の散布地として遺跡登録されている。松林の東側では、2002年度に応用薬学総合研究棟新営に伴い試掘調査を実施しているが、遺構・遺物は発見されていない(年報20)。厚生施設の南側でも2004年度に試掘調査が行われているが、ここでは大学造成時に大規模な盛土がなされていることが判っている(年報22)。

今回の工事は、松林を散策できるようにするための環境整備工事である。園路の整備、芝張り、外灯・柵設置、植栽などの工事である。松林が周囲より一段高いため、入る部分に階段を設置する必要がある。この階段部分については、大きく削平されることとなった。園路の大部分と芝張りについては、表層を除去する程度の、ごく浅い掘削にとどまり、外灯や柵の設置、植栽についても、工事による掘削範囲は狭いものであった。そのため、階段によって大きく削平される3ヶ所について試掘調査を実施し、遺跡の状況を確認し、その結果を踏まえ他の工事部分の対処方策を検討することとした。





図7 青葉山B遺跡試掘調査地点  
Fig.7 Location of trial trenches at Aobayama site Loc.B

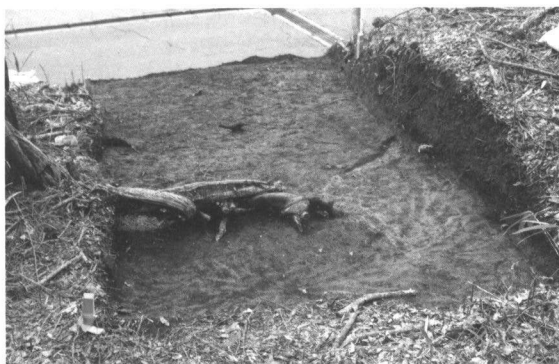
調査は2007年1月15日から26日の期間で実施した。松林南西角の調査区を1区、南東角の調査区を2区、北東側の調査区を3区とした(図7)。3区は、2002年度の応用薬学総合研究棟新営に伴う試掘調査の1区に隣接し、一部が重なっている。手掘りで表土を除去した上で、精査を行った(図8)。

1区では、表土の下に漸移層が残っていたが、遺構は検出されず遺物も出土しなかった。2区では、削平された上で、新しい盛土がなされており、大学造成時に若干の改変がなされたものと考えられる。そのため、ローム層の上部から漸移層にかけての部分は残されておらず、遺構・遺物は検出されなかった。3区では、表土を除去するとローム層が露出し、漸移層は残されていなかった。遺構・遺物は検出されていない。また3区の北西側は、攪乱によって破壊されていた。1区では1.5m×1.5m、2区では、1.5m×1.0mの深掘り部分を設けて、ローム層の掘り下げを実施したが、遺物の出土はなかった。この試掘調査結果を踏まえ、階段以外の部分については、立会調査で対処することとした。立会調査を行った区域においても、遺構・遺物の発見はなかった。

青葉山北地区で立会調査を実施した2件の概要は、次のとおりである。

・サイクロトロンRIセンター南側分子イメージング棟新営工事に伴う調査(2006-13)

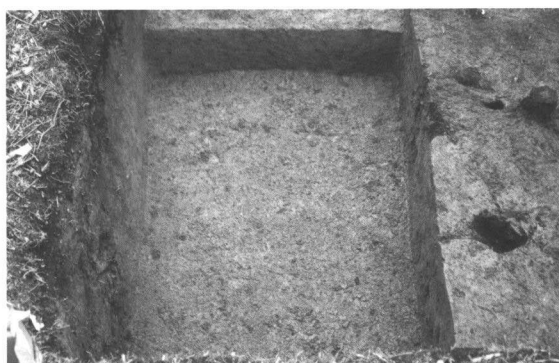
工事対象区域の南側には、青葉山E遺跡第5次調査(AOE5、年報14)と第8次調査(AOE8、年報20)の調査区が隣接している。第5次調査区は、RIセンターやその南側の道路より、一段高くもとの地形が残されていた場所である。そのため、道路などより高いレベルで、縄文時代の遺物包含層が検出されている。第8次調査では、既に大規模に削平されており、縄文時代の遺物包含層は残されていなかった。これらの調査所見から、今回の建設工事が行われる区域では、後期旧石器時代以降の地層は削平されている可能性が高いと考えられたため、立会調査で対処することとした。工事による掘削範囲の大部分は、RIセンター建設時に動かされたと推定される新しい盛土の範囲内に留まった。一部ローム層が残存している区域があったが、縄文時代の遺物包含層は残されていなかった。ローム層中からも、遺物は検出されなかった。



1区全景(北から)



2区全景(西から)



2区深掘り状況(西から)



3区全景(西から)

図8 青葉山B遺跡試掘調査状況  
Fig.8 Views of trial trenches at Aobayama site Loc.B

- ・理学部管理棟耐震改修工事に伴う調査（2006-17）

理学部管理棟は、青葉山北地区の入り口に近いところにあり、青葉山E遺跡の範囲内に含まれる。既存建物の外側に補強材を取り付ける工事のため、建物周辺の掘削に留まるため立会調査とした。既存建物の基礎によって既に掘削された部分がほとんどであった。ごく一部で、ローム層にかかる部分もあったが、遺構・遺物は発見されなかった。

#### （4）青葉山東地区の調査

工学研究科などが所在する青葉山東地区では、立会調査3件を実施した（図6）。青葉山東地区では周知の遺跡は知られておらず、青葉山北地区の周知の遺跡の範囲からも離れるが、ローム層が良好に残されている区域もあるため、学内での独自の措置として、立会調査を実施しているものである。

- ・工学研究科東食堂新営工事に伴う調査（2006-4）

青葉山東地区のなかでも東よりの場所で、東食堂や店舗を新築する工事に伴う調査である。工事による掘削は、全て大学による盛土の範囲内であり、特に問題はなかった。

- ・未来科学技術共同研究センター東側ガス管支障迂回工事に伴う調査（2006-10）

青葉山東地区でも、南西側の旧ゴルフ場に隣接する場所である。ガス管埋設に伴うもので、ローム層が保存されている可能性のある地域であるため、立会調査を行った。工事による掘削は、盛土の範囲内にとどまった。

- ・量子エネルギー工学北側植物園ゲート新営工事に伴う調査（2006-14）

川内地区西側の工学部との間の丘陵は、天然記念物青葉山となっており、東北大学植物園が置かれている。この植物園へ、工学部側からも入れるようにゲートを設ける工事に伴う調査である。大学造成時の盛土の下位でローム層が確認されたが、遺構・遺物は検出されなかった。

#### （5）青葉山新キャンパス予定地での調査

青葉山新キャンパス予定地では、試掘調査1件を実施した。

東北大学では、青葉山キャンパスの南側に所在する、旧県有地において、新キャンパスを造成し、片平地区・雨宮地区などの施設を移転する計画を進めている。新キャンパス予定地の面積は約81haで、青葉山ゴルフ場として使用されていた場所である。2005年（平成17年）4月のゴルフ場移転を受け、2007年度（平成19年度）からの事業着手を目指して、準備が進められることとなった。

新キャンパス予定地の西端には、青葉山C遺跡が存在する他、北側の東北大学青葉山北キャンパスには、青葉山B遺跡・青葉山E遺跡が存在する。また予定地の南側には、青葉山A遺跡・青葉山D遺跡が存在する（図1）。周辺にこのような遺跡が存在するため、新キャンパス予定地内における遺跡の有無や、その概要を確認する目的で、試掘調査を実施することとなった。

新キャンパス予定地は、ゴルフ場造成によって本来の地形が大きく改変されていることが予想された。そのため、既に削平された範囲を確認し、本来の地形が残されている可能性のある範囲を次第に限定していくため、複数段階に分けて調査を実施することとした。

仙台市教育委員会と協議の上、掘削などの作業は東北大学埋蔵文化財調査室が実施し、調査内容を仙台市教育委員会と合同で確認する形で行うこととなった。全体の概要を把握する予備調査を5月9日に開始した。その後、第1段階から第3段階に分けて調査を行い、9月7日に全ての調査を終了した。

この試掘調査については、本年報の第Ⅲ章において報告する。

#### 4. 遺物整理作業

2006年度は、『東北大学埋蔵文化財調査年報19第3分冊』と『東北大学埋蔵文化財調査年報21』の2冊を刊行した。

『東北大学埋蔵文化財調査年報19第3分冊』は、2001年度（平成13年度）に実施した、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（マルチメディア総合研究棟新営に伴う調査）の出土遺物の内、木簡と墨書ある木製品を掲載した。二の丸北方武家屋敷地区第7地点の出土遺物が膨大なため、年報19は5分冊に分けて刊行することとしている。前年度の2005年度には、武家屋敷地区第7地点の検出遺構までを掲載した第1分冊を刊行している。出土遺物については整理作業が終了したものから、順次刊行することとした。2006年度は、木簡・墨書ある木製品について作業が終了したため、これらを掲載した第3分冊を刊行した。

『東北大学埋蔵文化財調査年報21』は、2003年度（平成15年度）に実施した調査の成果をとりまとめたものである。掲載した調査報告は、次の2件である。

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点の調査（BK9・川内ホール新営に伴う調査）

芦ノ口遺跡第6次調査（TM6・屋外排水管布設に伴う調査）

整理作業としては、上記報告書に掲載した調査について、3件の作業を併行して行った。

- ・仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7）

2001年度に調査を行った、マルチメディア総合研究棟新営に伴うの出土遺物の整理作業である。江戸時代の各時期の、多種多様な遺物が大量に出土しており、2002年度より整理作業を継続して行っている。当年度は、木簡と墨書ある木製品の実測図トレースや写真撮影などの作業を実施した。木簡と墨書ある木製品については、調査年報19第3分冊にとりまとめて掲載した。

- ・仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点の調査（BK9）

2003年度に調査を実施した、音楽・舞踏系課外活動施設である川内ホール新営に伴う調査の整理作業である。検出遺構、出土遺物の量がさほど多くないため、2006年度の単年度で整理作業を実施することとした。遺構図面の整理・トレース、出土遺物の実測図作成・トレース・写真撮影などの作業を行った。その成果については、調査年報21にとりまとめて掲載した。

- ・芦ノ口遺跡第6次調査（TM6）

2003年度に調査を実施した、富沢地区の屋外排水管布設に伴う調査の整理作業である。検出遺構、出土遺物の量が少ないため、2006年度の単年度で整理作業を実施した。遺構図面の整理・トレース、出土遺物の実測図作成・トレース・写真撮影などの作業を行った。その成果については、調査年報21にとりまとめて掲載した。

#### 5. 保存処理事業

東北大学埋蔵文化財調査室では、仙台城跡の出土遺物を中心に、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理を必要とする遺物を多数保管している。この内、木製品と金属製品については、当調査室で保存処理を進めている。木製品については、1997年度以降、糖アルコール法によって処理している（年報16）。

2006年度は、前年度から開始した、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（2001年度調査・BK7）の出土木製品の処理を継続して実施した。武家屋敷地区第7地点から出土した木製品は、木簡を含め膨大な数量にのぼるため、4～5ヶ年間が必要となる見込みである。2006年度は、前年度に引き続き、箸などを中心に処理を行った。金属製品では、2000年度に調査を実施した仙台城跡二の丸第17地点出土の銅製品の処理を、前年度に引き続いて行った。

## 6. 資料保管状況

東北大学埋蔵文化財調査室では、ほとんどの遺物は容量30.3リットルのコンテナ（ポリプロピレン製・サンボックス#32）に収納している。このコンテナに入らない大型のものについては、さらに大きなコンテナや、適宜木箱を作成して収納している。全体の遺物総量を把握するために、容器の大小にかかわらず、箱の数で数量を管理している。ただし、木製品や金属製品など保存処理を行う必要のあるものは、別に保管しているため、これには含まれていない。東北大学埋蔵文化財調査委員会が発足した1983年度からの、遺物総量の推移を箱数で比較したのが、表2と図9である。

2006年度末時点で、当調査室で保管している遺物総量は2,858箱で、前年度と比較すると2箱の増加となっている。2006年度の調査によって新たに増加した箱数は、3箱である。青葉山新キャンパス試掘で実施した青葉山C遺跡の調査で出土したものが1箱、仙台北城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10）の調査によるものが2箱である。仙台北城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（BK11）については、年度をまたいで継続して調査を実施していた関係上、2006年度と2007年度を合わせて集計することとしたため、2006年度分を分けてカウントはしていない。

2006年度は、調査年報19第3分冊と調査年報21を刊行した。

調査年報19第3分冊では、仙台北城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7）の出土遺物の内、木簡と墨書ある木製品を掲載し、これらについては整理作業が終了したこととなる。これらの遺物は、水漬け状態のまま、他の多数の木製品と一緒に取り上げている。木簡や墨書ある木製品は、これらから抜き出す形で作業を進めており、他の木製品の整理が終了した翌年度に、未整理箱数は減少することとなる。そのため武家屋敷地区第7地点については、整理作業が終わって減少した箱数は、2006年度はカウントしていない。木簡・墨書ある木製品は、ほとんどが保存処理を行う必要があり、整理作業の終了後に順次処理にまわし、別扱いとした。保存処理を行った遺物は別に保管しているため、ここの箱数の集計には入らないこととなる。ただし、取り上げ時に乾燥させてしまっていた木簡や墨書ある木製品を収納した1箱だけは、整理終了分として新たにカウントした。

調査年報21では、仙台北城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点（BK9）と芦ノ口遺跡第6次調査（TM6）の調査成果を報告した。武家屋敷地区第9地点の出土遺物は、整理前は7箱であったが、整理後の詰め直しで5箱となった。芦ノ口遺跡第6次調査の出土遺物は、整理前は1箱で、整理後も同じく1箱である。

これらの整理作業によって、未整理の箱数が8箱減少した。新たに調査で増加したものが3箱なので、未整理のものは5箱の減少となっている。一方、整理済の箱数は、合計7箱増加した。全体では2箱の増加で、2,858箱となる。この内、2,391箱が整理・報告済みで、未整理は467箱となる。整理・報告済みのものの比率は83.7%である。

## 7. 研究活動

### (1) 受託研究・共同研究等

2006年度は、下記の受託研究1件を実施した。

受託者：岩手県山田町長 沼崎喜一（担当：教育委員会社会教育課文化係）

研究課題：房の沢古墳群出土品保存処理についての研究

研究目的：山田町房の沢古墳群から出土した鉄製品（鉄製刀・刀子18点）を恒久的に保存するため、有効な保存処理方法（脱塩処理および樹脂含浸による強化と修復）の研究を行う。

研究経費：2,205,000円

岩手県山田町の房の沢古墳群は、8世紀を中心に築造された末期古墳で、豊富な鉄製品が出土している。1996・1997年度に発掘調査され、出土鉄製品は、1997年度に保存処理が施されていた。しかし、脱塩処理が不充

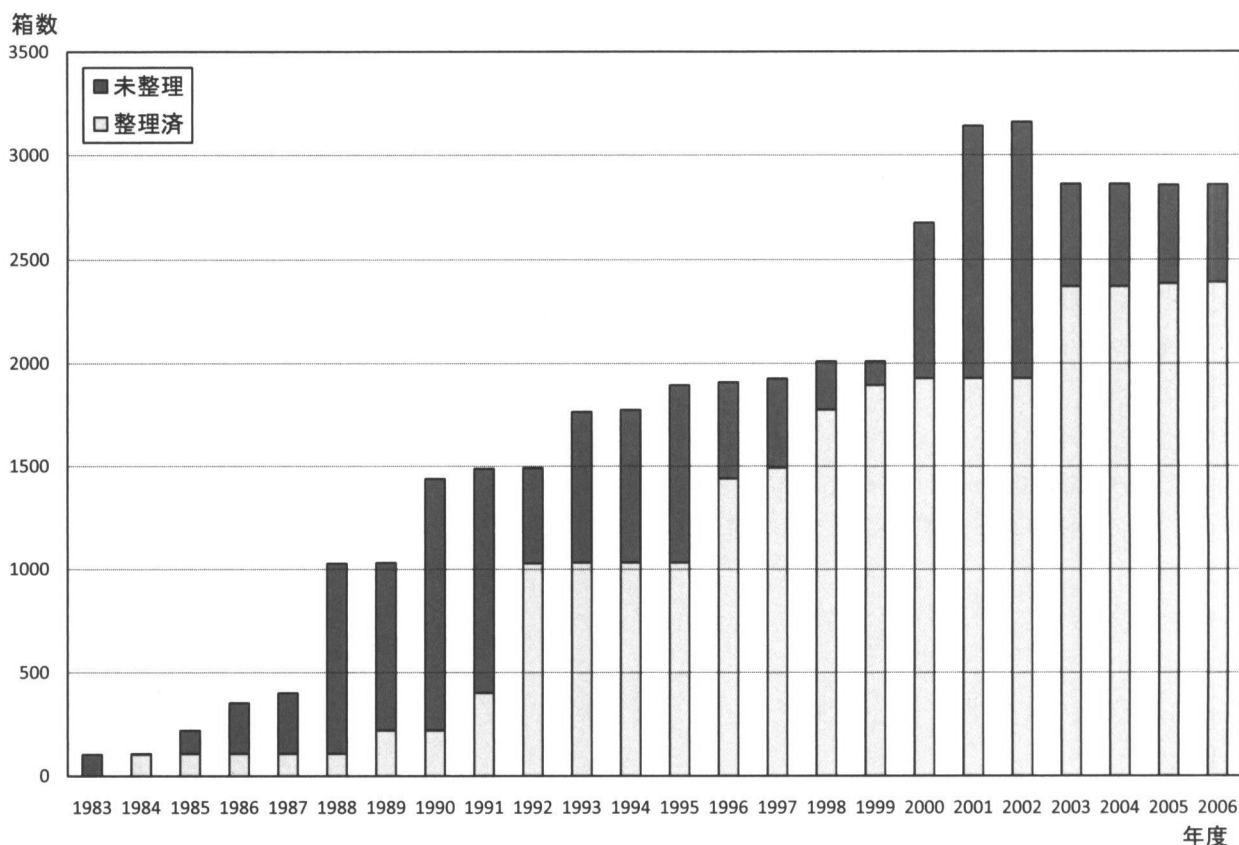


図9 収蔵遺物量の推移

Fig.9 Graph showing transition of amount of artifact in storage (showed by number of case)

表2 年度ごとの収蔵遺物箱数の推移

Tab.2 Transition of number of cases counted every fiscal year to store artifact

年 度	未整理箱数	整理済箱数	合計箱数	備 考
1983	104	0	104	
1984	4	104	108	年報1 (1983年度調査分) 刊行
1985	113	108	221	年報2 (1984年度調査分) 刊行
1986	245	108	353	
1987	293	108	401	
1988	920	108	1,028	
1989	811	221	1,032	年報3 (1985年度調査分) 刊行
1990	1,218	221	1,439	
1991	1,086	401	1,487	年報4・5 (1986・87年度調査分) 刊行
1992	463	1,028	1,491	年報6 (1988年度調査分) 刊行
1993	732	1,032	1,764	年報7 (1989年度調査分) 刊行
1994	742	1,032	1,774	
1995	861	1,032	1,893	
1996	469	1,439	1,908	年報8 (1990年度調査分) 刊行
1997	435	1,491	1,926	年報9・10 (1991・92年度調査分) 刊行
1998	236	1,774	2,010	年報11・12 (1993・94年度調査分) 刊行
1999	117	1,893	2,010	年報13 (1995年度調査分) 刊行
2000	751	1,926	2,677	年報14・15・16 (1996・97・98年度調査分) 刊行
2001	1,216	1,926	3,142	年報17 (1999年度調査分) 刊行
2002	1,234	1,926	3,160	
2003	491	2,370	2,861	二の丸第17地点整理後詰め直し等で箱数減少
2004	491	2,370	2,861	年報18 (2000年度調査分) 刊行
2005	472	2,384	2,856	年報19・20 (2001・02年度調査分) 刊行
2006	467	2,391	2,858	年報19・3・21 (2001・03年度調査分) 刊行

分であったため、その後の経過観察によって進行性の腐食生成物が確認され、再処理が必要な状態となっていた。これらの鉄製品には、木質・繊維・漆など有機質が多数付着して遺存しており、通常の方法では再処理が困難であった。そのため、東北芸術工科大学の松井敏也講師（2004年から筑波大学大学院講師）・手代木美穂氏と協力しつつ、同古墳群出土鉄製品の内の5点の鉄刀について、再処理方法を検討し再処理を実践することを、東北大学埋蔵文化財調査研究センターが受託研究として担当することとなった。この受託研究は2003年度と2004年度の2ヶ年にわたって実施し、松井氏らによって開発された純水を利用した脱塩方法（松井敏也ほか2005）を採用することで、再処理を行うことができた。

房の沢古墳群からは、様々な種類の鉄製品が多数出土している。2ヶ年で再処理を実施したのは鉄刀5点のみであり、全体から見ればごく一部である。そのため山田町教育委員会では、国庫補助金を得て、残る房の沢古墳群出土鉄製品の再処理を、2005年度から2009年度にかけての5ヶ年で実施する計画を立てた。この再処理の実施を、当調査室が山田町からの受託研究として行うこととなった。本年度は新たな5ヶ年計画の2年目として、鉄製の刀と刀子18点を対象資料とし、以下の手順で再処理を行った。

#### ①事前調査

- ・処理に先立って、資料の状態を調査し、必要な記録を作成する。

#### ②クリーニング

- ・前回処理の際に除去が不十分なまま残された錆、および新たに生成した錆を、除去する。

#### ③脱脂処理

- ・前回処理で含浸されている樹脂を除去するため、有機溶剤（アセトン）で洗浄する。

#### ④脱塩処理

- ・純水を用いて、資料中に残存している塩類を除去する。
- ・脱塩処理は、純水に資料を一定期間浸漬し静置したあと水を替える方法と、純水を滴下し同時に排水する流水法の2段階で行い、定期的に導電率を計測し評価しつつ進める。

#### ⑤脱水処理

- ・樹脂含浸に先立って、資料の水分を除去するよう、充分な乾燥を行う。

#### ⑥樹脂含浸

- ・資料全体を強化するため、アクリル系樹脂を減圧含浸する。

#### ⑦接合・修復・補色

- ・本体から分離した破片などを接合する。
- ・錆で大きく損なわれた部分など、強化が必要な部分は、エポキシ系樹脂を充填して修復する。
- ・エポキシ系樹脂を充填した部分は、違和感がないような形で補色する。

#### ⑧報告書作成

- ・①～⑦の作業過程、及び結果をとりまとめた報告書を作成する。

### (2) 学会発表等

調査室の業務にかかわる、学会での研究発表等としては、次の発表を行った。

- ・平成18年度宮城県遺跡調査成果発表会 2006年12月10日 於：東北歴史博物館

「仙台市 青葉山C遺跡」 発表者：高木暢亮

また、宮城県考古学会からの依頼を受けて、同会の会誌『宮城考古学』第9号（2007年5月発行）の「2006年度宮城県内主要発掘紹介」に、「青葉山C遺跡」として、同遺跡の調査概要を寄稿して紹介した。

### (3) 資料調査等

センター業務に関わる資料調査等としては、以下の1件で、担当する文化財調査員が出張した。最新のデジタル情報処理技術を用いた、遺跡調査における記録方法についての情報を収集するのが目的である。

2007年1月20日 考古学 Solution in 東京

主催：考古学技術研究会 於：東京国際フォーラム 藤沢敦・高木暢亮

### (4) 科学研究費採択状況

2006年度において、当調査室の文化財調査員で、科学研究費等の交付を受けたものは次のとおりである。

藤沢 敦 第35回（平成18年度）三菱財団人文科学研究助成（代表）「北縁における国造と古墳」

## 8. 教育普及活動

### (1) 非常勤講師

2006年度に、当調査室の文化財調査員で、非常勤講師を担当したものは次のとおりである。

・藤沢 敦 東北大学大学院文学研究科・文学部 考古学特論・各論（後期）「日本古代の集落論と共同体論」

2006年度に改組される以前の埋蔵文化財調査研究センターの時点では、調査研究員は文学研究科助手との身分で、センターの業務を担当するという形であった。埋蔵文化財調査室への改組により、文化財調査員は一般職員となり、文学研究科との関係は解消することとなったが、専門的業務を行っている学内の人材を教育研究に活用するという観点から、学内の関連する教育活動に協力することとなった。そのため2006年度より、埋蔵文化財調査室の特任助教授となった藤沢が、大学院文学研究科・文学部の授業を担当することとなった。

### (2) 授業など教育活動への協力

学内外での授業などの教育活動への協力としては、以下のものを行った。

・東北大学大学院文学研究科・文学部 考古学研究実習Ⅱ・考古学実習 発掘調査実習

2006年11月1日 於：仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点調査現場

授業担当教官：阿子島香（文学研究科教授）・柳田俊雄（総合学術博物館教授）

調査室担当者：藤沢敦・高木暢亮

・宮城県仙台第二高等学校 日本史授業発掘調査見学

2007年3月14・15日 於：仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点調査現場

授業担当教官：小村田達也（宮城県仙台第二高等学校教諭）

調査室担当者：藤沢敦・高木暢亮

### (3) 保管資料の貸出

調査室保管の資料の貸出依頼等としては、次のとおりであった。

・貸出先：仙台市富沢遺跡保存館 第38回企画展「百花繚乱－土の中からのメッセージ10－」

貸出資料：仙台城跡二の丸第9地点出土南蛮人人形1点

展示期間：2006年4月21日～6月18日

貸出期間：2006年4月11日～6月下旬日

・貸出先：財団法人瀬戸市文化振興財団 平成18年度企画展「江戸時代のやきもの－生産と流通－」

貸出資料：仙台城跡二の丸地区・北方武家屋敷地区出土陶磁器52点、仙台城跡遺構写真2点

展示場所：瀬戸市美術館

展示期間：2006年12月2日～2007年2月4日

貸出期間：2006年9月28日～2007年2月16日

・貸出先：仙台市教育委員会 「仙台城跡GIS」への写真掲載

貸出資料：仙台城跡二の丸地区写真38点

#### (4) 外部からの派遣依頼等

当調査室の業務に関わって、あるいは文化財調査員の専門領域に関わる事項で、外部から派遣等の依頼があったのは、次のとおりであった。

担当者：藤沢敦

- |                 |   |
|-----------------|---|
| 2006年4月22日      | 2006年史学研究会例会（テーマ「国境」） 於：京都大学文学部新館<br>研究発表「考古学的文化の変異と国家・民族の境界－倭と蝦夷と律令国家－」              |
| 2006年7月6日       | 平成18年度第1回大安場古墳整備指導委員会 福島県郡山市役所分庁舎   |
| 2006年8月26日      | 東アジアの古代文化を考える会講演会講師 「本州島東部から見たヤマト政権」<br>於：東京都豊島区生活産業プラザ                               |
| 2006年9月2～4日     | 国立歴史民俗博物館共同研究『古代における生産と権力とイデオロギー』研究会<br>研究発表「墳墓から見た本州島北部と北海道」 於：千歳市・江別市・札幌市           |
| 2006年11月10日     | 第15回仙台城跡調査指導委員会 於：仙台市役所本庁舎  |
| 2006年11月19日     | 八戸市博物館 企画講演会講師 於：青森県八戸市博物館<br>「東北北部の末期古墳について－丹後平古墳群の出土品から」                            |
| 2006年11月24日     | 仙台市教育委員会文化財課研修会講師<br>「仙台平野の古墳時代－小規模墳の調査成果の意義－」 於：仙台市役所本庁舎                             |
| 2007年2月20～3月21日 | 仙台市市民文化事業団主催 地底の森ミュージアム開館10周年記念特別企画<br>『埴輪の美と現代の芸術』監修 於：仙台市地底の森ミュージアム                 |
| 2007年3月4日       | 仙台市市民文化事業団主催 『埴輪の美と現代の芸術』関連企画オープン講座講師<br>「埴輪の話」 於：仙台市富沢市民センター                         |
| 2007年3月16日      | 平成18年度第2回大安場古墳整備指導委員会 於：福島県郡山市福祉センター  |
| 2007年3月22日      | 富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査に関する助言指導<br>「大野田古墳群9A区発掘調査出土遺物に関する助言指導」<br>於：仙台市教育委員会富沢駅周辺発掘調査事務所 |
| 2007年3月23日      | 第16回仙台城跡調査指導委員会 於：仙台市役所上杉分庁舎  |

#### (5) 広報活動

2006年度は、特に広報活動は行わなかった。

## 第Ⅱ章 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10）の調査

### 1. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史

東北大学の川内地区は、沢とその脇を東西に走る道路によって、川内南地区と北地区に分かれている。川内南地区は仙台城二の丸が置かれた場所であり、北地区は家臣の屋敷が存在した区域に相当する。

仙台城は、仙台藩初代藩主の伊達政宗によって、慶長5年（1600年）12月24日の縄張始めを嚆矢として、本丸の築造が始められる。この段階では、二の丸は造られておらず、後に二の丸が造られる場所には、政宗の四男である伊達宗泰の屋敷があったと伝えられる。元和6年（1620年）には、伝伊達宗泰屋敷の北側に、政宗の長女五郎八姫の居館である「西屋敷」が造られる。政宗死去後二代藩主となった伊達忠宗によって、寛永15年（1638年）に二の丸が造られると、仙台藩の政治・儀式のほとんどは二の丸へ移される。二の丸は、元禄年間の改造によって、もとの「西屋敷」の敷地を取り込んで拡張され、幕末まで仙台城の中核として機能していく。

仙台城下は、仙台城本丸の造営に伴って造られていく。慶長6年（1601年）の正月11日に、仙台城の普請始めが行われ、同じ日に「御城下地形ノ絵図ヲ以テ諸士等ノ屋敷割仰付ラル」との記録が残されている（『貞山公治家記録巻之二十一』）。この時以降、城下の建設が進められていったものと考えられる。

正保2年（1645年）の『奥州仙台城絵図』においては、仙台城の周辺には「侍屋敷」が広がっていたことが判り、おそらく本丸の造営が開始された頃から、屋敷が造られていったものと思われる。正保絵図は幕府提出用の絵図のため、細かな屋敷割は記されず、屋敷を使っていた人名は判らない。それ以降の藩政用絵図には、屋敷割が記され、人名が書き込まれたものが多くある。川内地区においては、大手門の周囲などに最も上級の家臣の屋敷が置かれ、それ以外の区域にも比較的上級の家臣の屋敷が多い。東北大学の川内北地区も、比較的上級の家臣の屋敷が置かれていた。

明治維新による新政府の成立と幕藩体制の崩壊により、仙台城とその周辺も大きく変化する。明治2年（1869年）の版籍奉還により二の丸には勤政庁が置かれ、明治4年（1871年）の廃藩置県後は、仙台城が明治政府の管轄下に移り、二の丸には東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれる。本丸の建物は明治の早い時期に取り壊されるが、二の丸の建物は鎮台本営として引き続き利用された。しかし明治15年（1882年）の火災で、二の丸建物のほとんどが焼失してしまう。そして明治19年（1886年）には仙台鎮台から陸軍第二師団に改称され、明治21年（1888年）には正式に師団常備軍制度が施行され、敗戦まで続くこととなる。二の丸跡には、第二師団の司令部が置かれた。

川内地区の仙台城周辺の武家屋敷も、明治に入ると取り壊され、その多くは後の第二師団の用地となっていく。東北大学川内北地区には第二師団の歩兵隊や輜重隊などが置かれていた。

川内北地区周辺の道路の配置は、絵図を見る限りでは、江戸時代を通じて変化が無い。しかし、明治時代に、この区域の道路は大きく改変される。現在の道路配置は、この時に改変されたものであり、江戸時代の道路とは大きく変わっている。明治時代の地図の検討からは、明治15年（1882年）から明治26年（1893年）の間に、川内北地区周辺の道路は、現在見る形に変わっていったものと考えられる。おそらく、明治21年（1888年）の陸軍第二師団の設置に前後して、この区域の整備が進められていったものと考えられる。

なお、この地区での武家屋敷の変遷や、明治以降の変化については、二の丸北方武家屋敷地区第7地点の調査成果をとりまとめた、年報19の第1分冊において詳しく検討しているので、そちらも参照されたい。

戦後は、川内地区一帯が米軍の駐留地となる。昭和32年（1957年）に米軍から返還された後、川内北地区には東北大学教養部が、川内南地区には文系4学部や図書館などが置かれ、現在に至っている。

## 2. 調査経緯

### (1) 2005年度までの調査

東北大学川内北地区は、仙台城二の丸に隣接する武家屋敷が存在した場所で、仙台城と密接に関連する区域のため、周知の遺跡である仙台城跡に含まれている。当調査室では、二の丸北方武家屋敷地区と呼称している。

二の丸北方武家屋敷地区では、2005年度までに第1から第9地点までの調査を実施してきた（図3）。第1地点は試掘調査のみであったが、一部重なる区域で第7地点の調査を実施している（年報19）。第2地点と第3地点は、立会調査で終了したため欠番としている。したがって、実質的には、第4地点から第9地点までの6地点を調査していることとなる。この内、第5地点（年報7）、第6地点（年報14）、第8地点（年報20）は、小規模な調査であった。第9地点（年報21）も、調査面積はさほど大きくない。面積の大きな調査は、第4地点（年報13）と第7地点（年報19）の2ヶ所で、多数の遺構と膨大な数の遺物が出土している。検出遺構の中には江戸時代初頭に遡るものが確認され、仙台城築城と同時に武家屋敷として整備されたことが判明している。また明治時代になり屋敷が取り払われた後、陸軍が使うまでの間、畑として利用された時期があることが判っている。

### (2) 調査地点の位置

川内北地区では教養教育が行われており、そのための講義棟が並んでいる。講義棟の西側には、教養教育に使用されている共通実験棟がある。今回の調査は、共通実験棟の改修に伴い、一部で増築が行われる部分の調査である。増築は、実験棟の入り口部分と、中庭の東よりの部分で行われることとなった。入り口部分を1区、中庭部分を2区とした（図10）。共通実験棟の周囲では、エレベーターの設置に伴い、入り口の南側で1989年度に調査を実施した、二の丸北方武家屋敷地区第5地点（BK5、年報7）の調査区がある。第5地点では、東西方向に伸びる溝跡などが検出されている。今回の調査の1区が、第5地点調査区と接する位置にある。

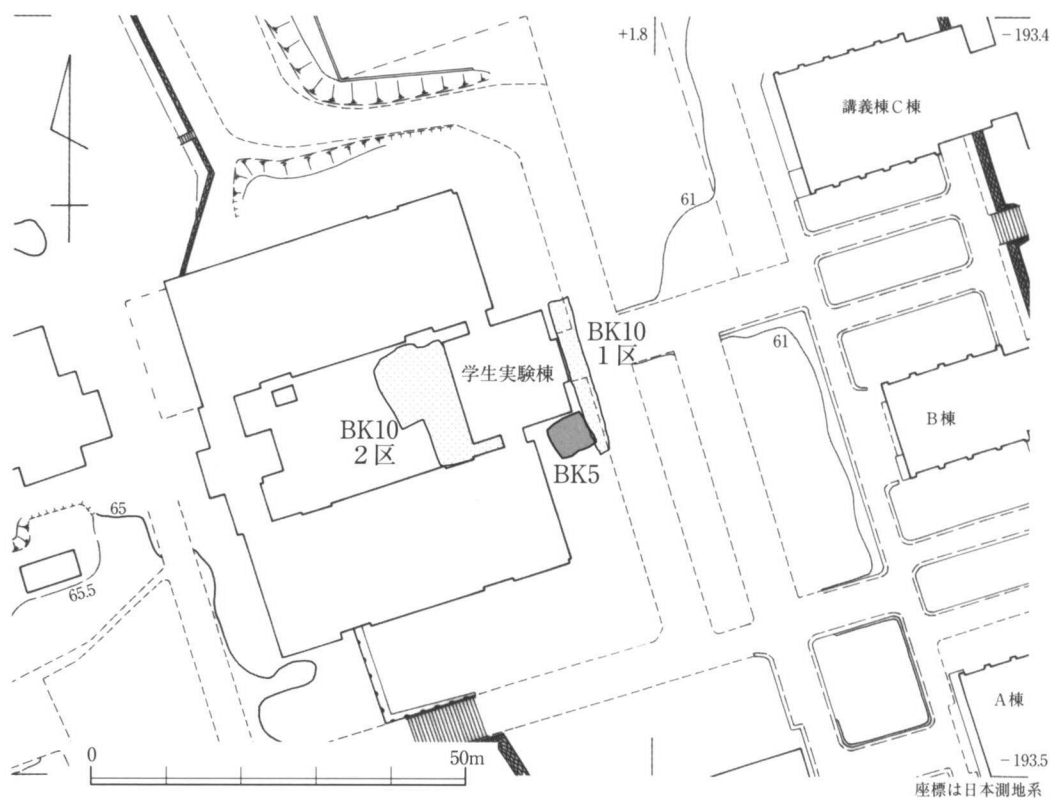


図10 武家屋敷地区第10地点調査区の位置  
Fig.10 Location of BK10 (BK10 i.e. Location 10 of *samurai* residence)

### (3) 調査の方法と経過

2006年度に、共通実験棟の入り口部分と中庭部分に建物を増築する改修工事が行われることとなったが、第5地点の調査結果から、予定の工事掘削の深度が遺構面に達することが予想された。そのため、増築部分については、工事に先立って記録保存のための発掘調査を実施することとなった。増築部分以外の各種設備関係や外構関係の工事については、第I章で述べたように、立会調査で対処することとした。立会調査部分では、遺構・遺物の発見はなかった。

調査は2006年10月2日から11月10日の期間で実施した。1区では遺構面直上の盛土を50～80cm重機で掘削した後、手掘りで遺構の精査を行った。2区では盛土を40～50cm重機で掘削したところ、地山面が露出し石垣が確認された。2区では石垣以外には遺構の検出はなく、石垣の調査を手掘りで行った。

川内地区では、1991年度と1992年度の2ヶ年にわたって、測量用の基準点を設置し、調査地点を国土座標上に位置づけて記録してきた。その後、北地区では工事等の際に破損したり滅失する事例が相次ぎ、今回の調査区でも、近くの基準点が滅失してしまっていた。また、改修工事と併行した調査のため、工事用の仮囲いでさえぎられ、測量基準点の視準が難しい状況にあった。そのため、基準点の国土座標値の測量が行えず、既存実験棟の位置を記録することで、地形図上に位置づけることとした。

平面図・断面図は縮尺20分の1で作成し、記録写真は35mmのカラーリバーサルとモノクロを使用した。

## 3. 検出遺構

### (1) 1区の遺構(図11、図版1・2)

1区では、近代以降の盛土を除去すると、すぐに地山面が露出した。全体に攪乱が多く、保存状態は良くない。調査区西壁側は、既存実験棟建設の際に掘削されている。調査区中央には、排水管による攪乱が南北方向に伸びている。これを横切る形でも、配管埋設による攪乱が各所に認められた。また、南北に並ぶように礎石が確認されたが、掘り方に煉瓦が含まれていることから、明治以降の第二師団にかかわる礎石と判断し、平面図では攪乱として表現した。

1区で検出された遺構は、溝2条、井戸1基、ピット1基である。武家屋敷地区第5地点(BK5)の調査で検出された1号溝が、今回の調査区に伸びてくるものと考えられるが、検出できていない。後述のように、一部が井戸の脇に残されていた可能性もあるが、調査時点では確認できていない。

#### 【1号溝】

調査区の北よりの部分で検出した。調査区にはほぼ直行し東西方向に延びる溝であると判断される。検出した部分で長さ190cmで、若干湾曲するが、溝の方向はN-68°-E程度である。上幅210cm、深さ80cmである。断面はV字状を呈するが、底面付近は、幅30～70cm程度が一段深くなっている。一段深くなっている部分は、流水の影響で形成された可能性も考えられるが、埋土にはラミナ状の堆積は見られなかった。

陶磁器が出土しているが、ごくわずかである。磁器の仏飯器を除くと、いずれも細片のため、詳しいことは判らない。ある程度特徴が判明するものは、磁器の仏飯器だけである(図14-CJ1)。これも文様部分がほとんど失われており、詳細な時期を検討することは難しいが、釉薬にややむらがある様子などから、おおむね18世紀頃のものと思われる。これまでの調査では、断面形状がV字状を呈する溝は、武家屋敷地区第4地点の調査の際に、江戸時代初頭の時期に確認されているだけであった(年報13)。この磁器の年代観が、溝の時期を示すとするならば、V字状の断面形状の溝は、18世紀頃まで存在したこととなる。

#### 【2号溝】

調査区南東隅で検出した。検出した部分での溝の向きは北西-南東方向であるが、一部の検出であり、全体の形状はよくわからない。検出した部分で長さ160cm、上幅110cm、下幅70～80cm、深さ20cmである。断面は逆台形

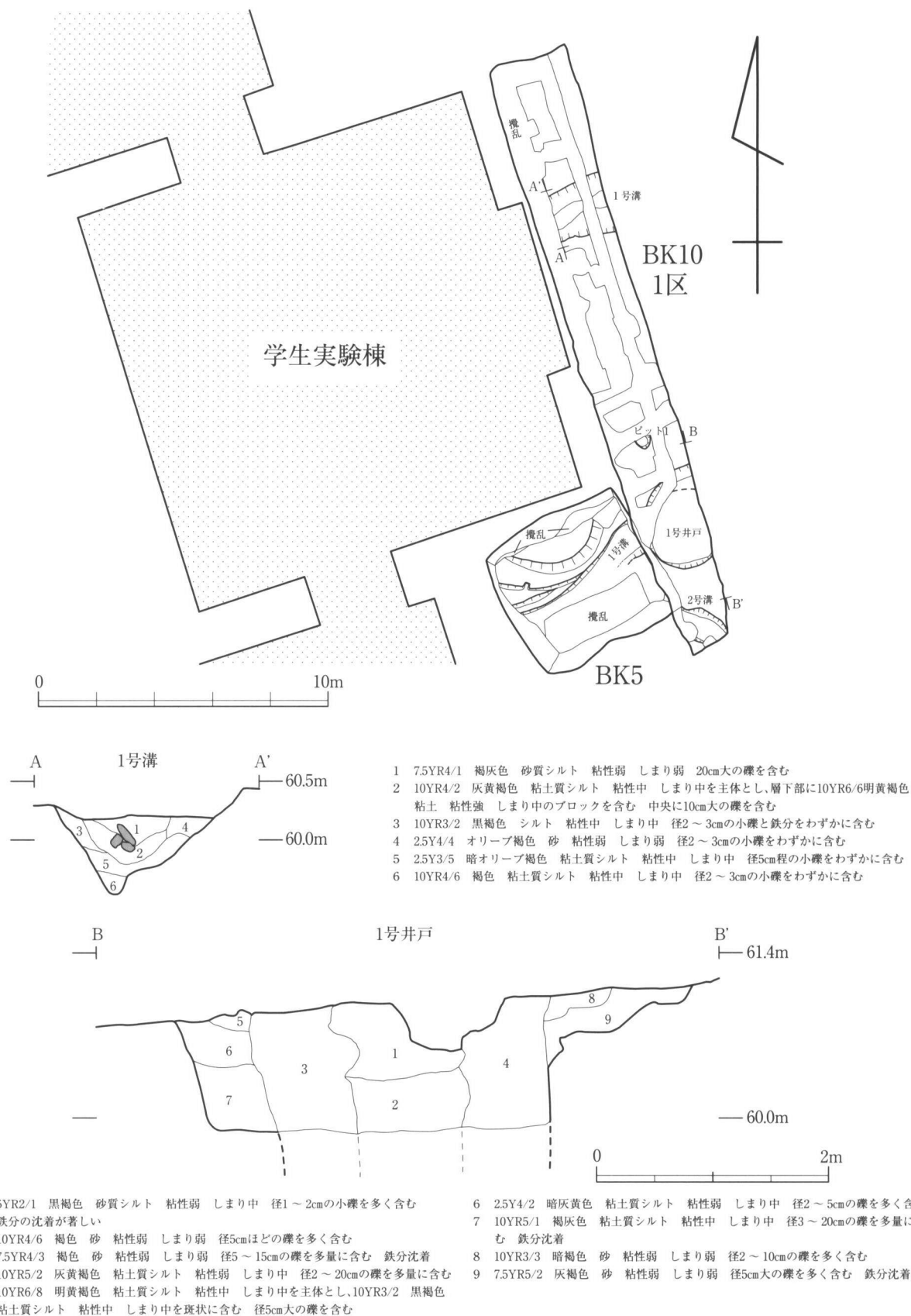


図11 武家屋敷地区第10地点1区検出遺構平面図・断面図  
Fig.11 Plans and cross sections of features at location 1 of BK10

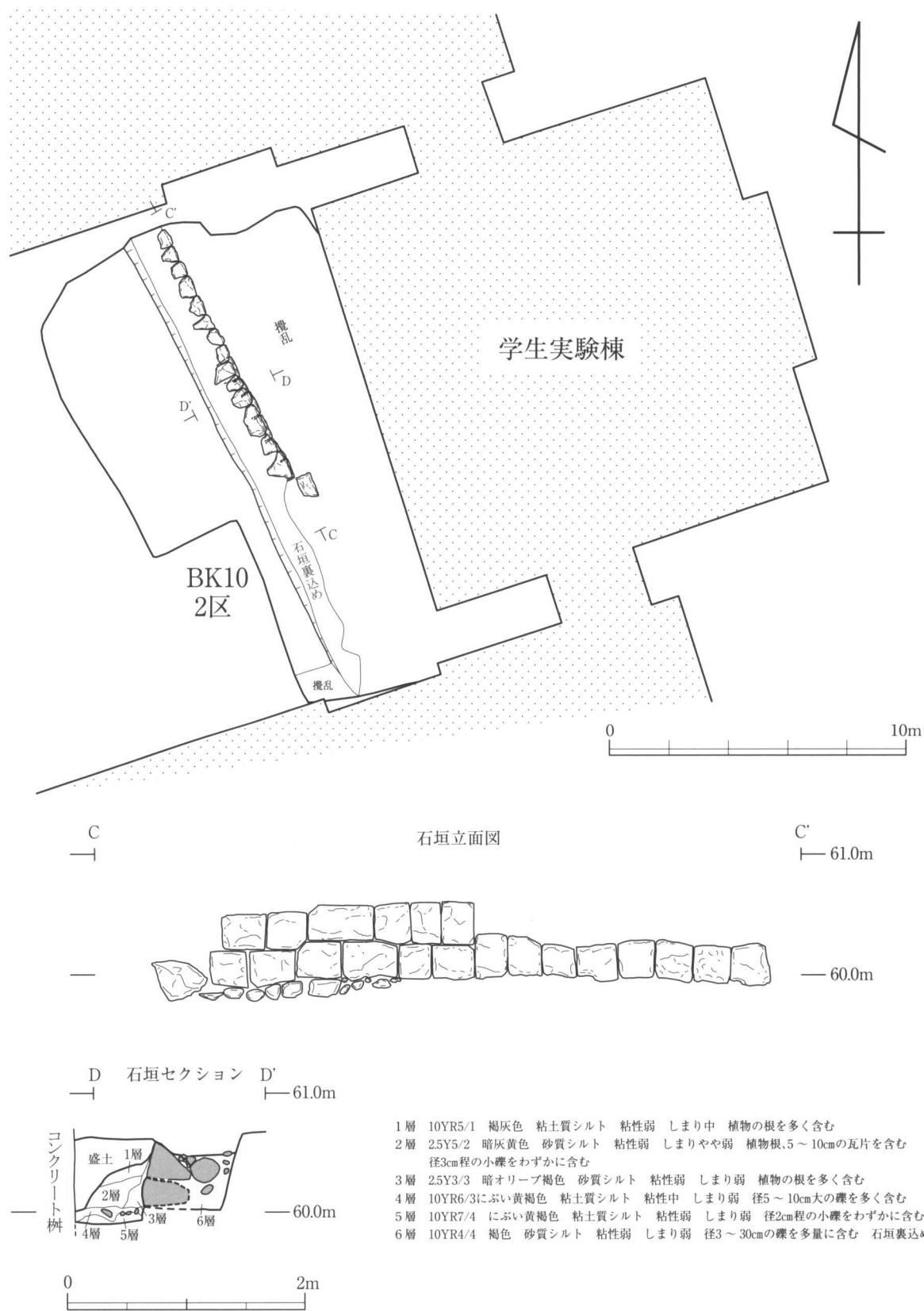


図12 武家屋敷地区第10地点2区検出遺構平面図・断面図  
Fig.12 Plans and cross section of features at location 2 of BK10

状を呈する。埋土は1層で、礫を多く含む。遺物は出土していないため、時期は不明である。

第5地点の調査区では、調査区の南東隅に、1号溝に切られる2号溝があったことが確認されている。ほとんどが攪乱で壊されていたため、調査区壁面の断面で確認したに留まり、詳しいことは判っていない。位置関係からは、今回の調査の2号溝と関係する可能性もあるが、第5地点の2号溝の方がはるかに深く、同一の溝と考えることは難しい。

#### 【1号井戸】

調査区南よりの部分で検出した。一部を攪乱で壊されているが、平面形は円形を呈すると思われる。埋土上部を第二師団の建物の礎石で壊されている。安全対策上、地表面から160cm程度の深さで掘り下げを止めた。

掘り下げを中止した深さの所で、北側は段が付いている。この段の埋土5～7層が堆積した部分は、別の遺構で、1号井戸と区別できなかった可能性もある。南側にも、外側に浅く落ち込んでいる部分がある。断面図の埋土8・9層が堆積している部分である。調査の際には、いずれも1号井戸の一部として考えていたが、南北両側とも1号井戸の埋土が切る形となっており、より古い遺構が存在した可能性がある。その場合、位置関係から第5地点の1号溝の延長部分に相当する可能性も考えられる。1号井戸の確認面での直径は340cmであるが、埋土5～6層の部分が別の遺構であったとすると、本来の直径は270cm程度であった可能性が考えられる。

調査した範囲では、井戸枠となるものは検出されていない。しかし、埋土の中央部分（埋土1・2層）が、周囲とは異なっている。この埋土2層の範囲は、調査終了面では、径170cm程のほぼ円形を呈している。未調査の深い所に井戸枠が存在し、埋め戻された後に、その内部が陥没した結果と考えられるであろう。このように考えて良いのであれば、井戸枠の大きさは、径170cm程度であったと思われる。

埋土から陶器1点、土師質土器の皿1点が出土しているが、詳細な特徴が判るものはない。瓦は、他の遺構よりも、やや多く出土しており、全体の形状がわかる瓦も比較的多い（図13-T1～4、図14-T5・6）。これらの中には、下面に筋目が付けられた棧瓦（図13-T4）が含まれている。筋目のつく棧瓦は、出現時期を限定することはできていないが、明治時代以降の層序から出土することから、明治時代に下る可能性が高い。そのためこの井戸が完全に埋められたのは、明治時代になってからの可能性が高いと考えられる。

#### 【ピット1】

調査区東側部分で検出した。全体の3分の1ほどを攪乱で壊されているが、平面形は楕円形を呈すると思われる。直径約60cm、深さ15cm、埋土は2層に分かれるが、柱痕跡は見つかっていない。

#### (2) 2区の遺構（図12、図版2）

調査区の西側では、表土と新しい盛土を除去すると、西半部では地山が露出した。地山層の東側では、石垣が検出された。石垣から東側は、新しい盛土で埋められていた。

#### 【石垣】

調査区のほぼ中央で検出した。確認できた範囲では北西－南東方向に延びている。石垣は30～60cmの四角錐形の間知石が積まれている。確認できたのは二段であるが、西側が削平されている可能性が高いことから、本来は段数が多かった可能性がある。一段目の南側の下部には根石と考えられる5～30cmの礫が見られる。裏込めは5～40cm程度の円礫が詰まった層であり、石垣背面から幅40～60cmの幅がある。石垣の前面には堆積土が見られる。石垣前面の堆積土の内、1～3層は暗い色調の表土に近い堆積土である。

遺物は、石垣前面の堆積土から瓦が出土しているだけである。平瓦1類に分類したものの中に、下面に筋目が付けられたものが1点含まれている。このような筋目は、棧瓦に見られるもので、先述のように明治時代に下る可能性が高いものである。そのため、明治時代まで石垣が存在した可能性が高いが、造られた時期が江戸時代に遡るのか否かについては、確定できない。

2007年度（平成19年度）に仙台市教育委員会によって実施された、地下鉄東西線の川内駅区域の調査では、南北方向に伸びる「大堀通」が検出されている。「大堀通」の東側側溝は、両側に間知石を積み上げた石組溝であった。位置関係から見て、この大堀通東側側溝の西岸の石積みが、今回2区で検出された石垣につながる可能性がある。正式報告がなされていない段階であるため、詳細な位置関係の検討は今後の課題としておきたい。

2区の石垣の上面の標高は60.6mで、本来はこれより高かったと考えられる。東側は、攪乱で破壊されているため、石積みが存在したのか否か不明で、本来の高さは判らない。一方、1区の遺構検出面の標高は、南側ほど高く、1号溝の付近では60.4mで、1号井戸の付近では61m前後である。石垣の本来の高さが不明なため確実でない部分が残るが、この石垣が「大堀通」の東側側溝であった場合、「大堀通」の路面の方が、東側の屋敷より標高が高い場所も存在したことになる。

#### 4. 出土遺物

出土遺物は、全体に少ない。1号溝埋土、1号井戸埋土、石垣前面埋土から、陶磁器、土師質土器、瓦が出土しているがごく少量である。いずれも細片で、特徴が判明する資料はほとんどない。図13・14には、ある程度特徴が判明する資料を提示している。

##### (1) 陶磁器・土師質土器（図14、表3・5、図版4）

陶磁器・土師質土器は、1号溝埋土から磁器3点、陶器1点、1号井戸埋土から陶器1点、土師質土器の皿1点と、ごく少量の出土である。これら以外では、1層・攪乱から陶磁器がわずかに出土しているのみである。いずれも細片であり、特徴が判明するのは、図14-CJ1に示した、磁器の仏飯器のみである。

磁器の仏飯器は、1号溝埋土からの出土である。肥前産で、染付による文様の一部と圏線がみられる。破損しているため確実ではないが、染付や釉の様子から18世紀頃のものではないかと考えられる。その他の磁器も、いずれも肥前産とみられるが、文様や器形が判明するものはない。

陶器では、遺構出土のものでは、産地や年代の判明するものはない。1層・攪乱では、大堀相馬の碗や肥前の小中皿が出土しているが、いずれも細片で、年代は不明である。

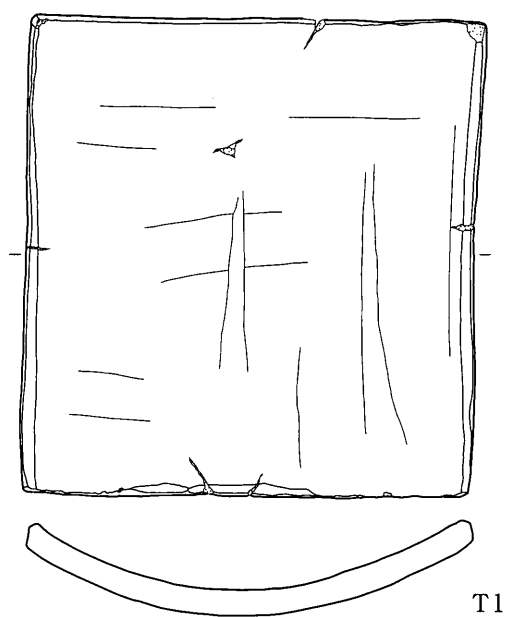
土師質土器の皿は、1号井戸埋土から1点が出土しており、底部のみが残存したものである。

##### (2) 瓦（図13・14、表4・6～8、図版3・4）

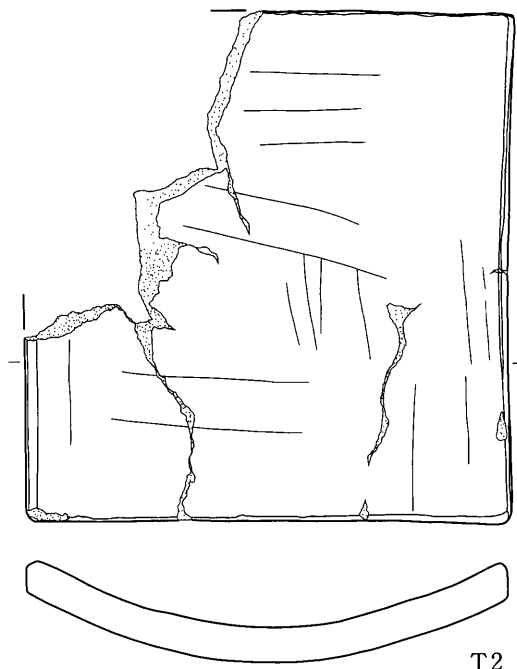
瓦の分類・集計・計測の基準は、年報6・7・8・9で示しており、年報18では、新たに設定した種類を含めて、改めて分類基準をまとめている。今回の資料も、基本的に年報18に示した分類・集計・計測に準じている。また、瓦は、破片では近世のものと近代のものが区別できないことがほとんどのため、一定の基準を設けて、現地において選別して、採集している。今回の調査では、1層・攪乱出土のものについては、現地で選別をおこなっている。選別の基準はこれまでと同じで、軒瓦、長さや幅が判明するもの、刻印や線刻などがある特殊なものである。その結果、1層・攪乱の瓦では基準を満たすものはなく、採集されたものはない。

1層・攪乱以外から出土した瓦では、選別は行っていない。瓦が出土したのは、1号溝埋土、1号井戸埋土、石垣前面埋土からである。1号井戸からは、他の遺構よりもやや多くの瓦が出土しており、残存状況がよく、全体の形状がわかる瓦も比較的多い（図13、図14-5・6）。図13-T1～T3は、平瓦で、T1とT2はほぼ類似した法量である。T3は、長さが短く、特殊な平瓦である。棧瓦（図13-T4、図14-T5）もほぼ類似した法量であるが、T4は、凸面に櫛目がみられる。図14-T6は、「マ」の刻印がみられる。

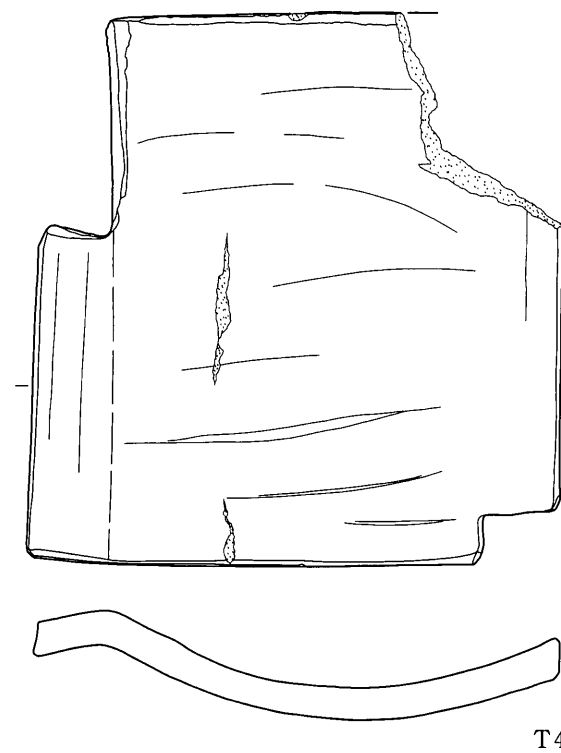
図14-T7は、石垣前面埋土から出土した棟瓦である。全長は判明しないものの、これまでの調査で出土している棟瓦と比べると、小型である。



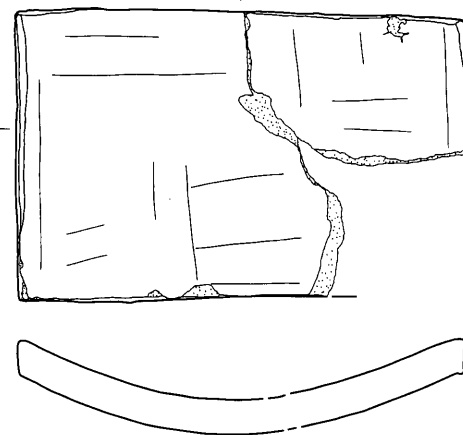
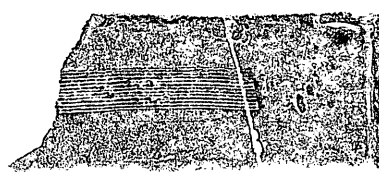
T1



T2



T4



T3

0 10cm

图13 武家屋敷地区第10地点出土瓦 (1)  
Fig.13 Tiles from BK10 (1)

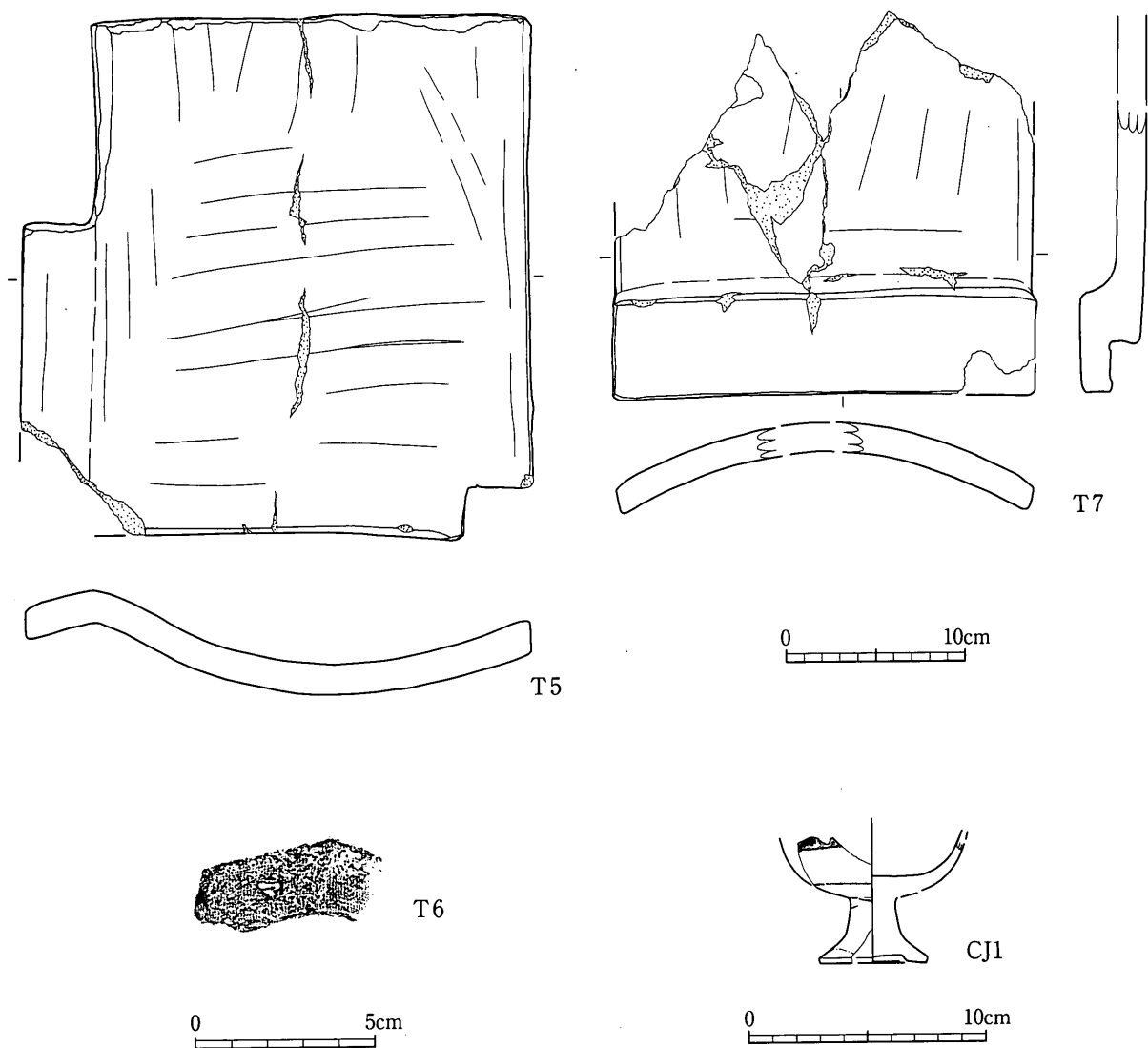


図14 武家屋敷地区第10地点出土瓦 (2)・磁器  
Fig.14 Tile and Porcelain from BK10

## 5. まとめ

今回の調査は、調査面積も小規模で、遺構面の保存状態も良くなく、出土遺物も僅少であった。それでも、井戸や溝、石垣などの遺構が検出された。2区の石垣の時期については、造られた時期は確定できていないが、「大堀通」の側溝となる可能性がある。今後の検討が必要であるが、各地点のデータをつなぎ合わせることで、武家屋敷地区の実態が、徐々に明らかになっていくものと考えられる。

表3 武家屋敷地区第10地点出土陶磁器・土器集計表  
Tab.3 Distribution of porcelains, glazed ceramics and unglazed ceramics at BK10

出土場所	磁 器							陶 器						土師質	合計
	中型 丸碗	小型 丸碗	碗不明	小中皿	その他	不明	小計	碗不明	小中皿	袋物 不明	その他	不明	小計	皿	
1区 1層・攪乱	1	1	3	1	小坏 1		7	1	1		硬質陶器 (鉢?) 1		3		10
1区 1号溝埋土			1		仏飯器 1	1	3			1			1		4
1区 1号井戸埋土												1	1	1	2
合計	1	1	4	1	2	1	10	1	1	1	1	1	5	1	16

表4 武家屋敷地区第10地点出土瓦集計表  
Tab.4 Distribution of roof tiles at BK10

( ) 内は重量g

出土場所	平瓦 1 類	平 瓦	丸瓦類	棧 瓦	その他	不 明	合 計
1区 1号溝埋土	2 (450)		1 (315)				3 (765)
1区 1号井戸埋土	16 (5400) 施釉 1 (300)	3 (4150)		7 (10485)	施釉隅切瓦1 (150)	6 (101)	34 (20586)
2区 石垣前面埋土	5 (1050)			2 (600)	棟瓦1 (1130)		8 (2780)
合 計	24 (7200)	3 (4150)	1 (315)	9 (11085)	2 (1280)	6 (101)	45 (24131)

表5 武家屋敷地区第10地点出土磁器観察表  
Tab.5 Notes on porcelains at BK10

登録 番号	出土場所	器種	口径 cm	底径 cm	器高 cm	文様等	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CJ1	1区 1号溝埋土	仏飯器	—	4.4	—	外面文様あり	普通	肥前	18c	見込み目跡あり	14	4

表6 武家屋敷地区第10地点出土平瓦観察表  
Tab.6 Notes on flat tiles at BK10

登録 番号	出土場所	頭幅 cm	尻幅 cm	長さ cm	頭谷深 cm	尻谷深 cm	厚さ cm	溝	釘穴	備考	図	図版
T1	1区 1号井戸埋土	23.1	23.5	24.5	2.8	3.6	1.4	—	—		13	3
T2	1区 1号井戸埋土	25.3	—	26.5	3.0	—	1.8	—	—		13	3
T3	1区 1号井戸埋土	23.7	—	15.0	2.9	—	1.8	—	—	特殊	13	3

表7 武家屋敷地区第10地点出土棧瓦観察表  
Tab.7 Notes on pan tiles at BK10

登録 番号	出土場所	全長 cm	全幅 cm	きき幅 cm	尻切り 込み長 cm	頭切り 込み幅 cm	刻印	釘穴	厚さ	左右	きき足 cm	図	図版
T4	1区1号井戸埋土	28.7	27.6	24.0	11.6	4.1	—	—	1.7	右	16.8	13	4
T5	1区1号井戸埋土	28.2	28.1	—	11.2	3.9	—	—	1.8	右	17.1	14	4
T6	1区1号井戸埋土	—	—	—	—	3.8	「マ」	—	2.0	右	—	14	3

表8 武家屋敷地区第10地点出土棟瓦観察表  
Tab.8 Notes on ridge cover tile at BK10

登録 番号	出土場所	全長 cm	全幅 cm	棧幅 cm	きき幅 cm	きき足 cm	高さ cm	厚さ cm	棧形状	溝	釘穴	図	図版
T7	2区石垣前面埋土	—	25.0	5.2	25.0	—	6.2	1.6	平	—	—	14	4

### 第Ⅲ章 青葉山新キャンパス地区試掘調査

#### 1. 青葉山地区の地形と遺跡

東北大学の青葉山北キャンパス（理・薬学研究科など）・東キャンパス（工学研究科など）や新キャンパス予定地は、青葉山丘陵に立地している。青葉山丘陵には、4面の高位段丘面が分布し（図15）、高位よりⅠ～Ⅳ面に分けられている。標高は、青葉山Ⅰ面で190～200m、青葉山Ⅳ面で90～120m程度で、南西から北東にかけて高度を減じている。青葉山北キャンパスと東キャンパスは青葉山Ⅱ面に、新キャンパス予定地は青葉山Ⅱ面とⅢ面に立地する。

仙台周辺における青葉山段丘などの高位段丘は、各面を覆う火山灰層の関係から、少なくともⅠ・Ⅱ面とⅢ・Ⅳ面は、形成時期の異なる段丘とされている（大月義徳1987・1994）。すなわち、より低位のⅢ・Ⅳ面には、坪沼第1～4軽石が見られず、愛島軽石層より上位の示標テフラのみが見られる（図16）。

これまでの青葉山北キャンパス・東キャンパスの立地する青葉山Ⅲ面での調査成果から、図17に示したような層序が確認されている。愛島軽石層より上位の層序については、青葉山段丘各面での違いはない。今回の調査対象区域には青葉山Ⅱ面も含まれるが、愛島軽石層より上位の層序については特に異なるところはなかった。

示標となるテフラで肉眼で確認できるものとしては、川崎スコリア層と愛島軽石層がある。川崎スコリア層（蔵王川崎スコリア、Za-Kw）は、約2.6～3.1万年前との年代測定がなされている（板垣ほか1981）。愛島軽石層（安達愛島軽石、Ac-Md）は、熱ルミネッセンス年代で6.4万年前（市川米太1986）、ESR年代で5.4～8.3万年前（佐藤高晴1986）、フィッシュン・トラック年代で8万年前（興水達司1986）などの理化学的年代測定値が出されている。安達愛島軽石は阿蘇4火山灰（Aso-4、約7～9万年前）の下位にあることから、さらに年代がさかのぼる可能性も指摘されている（古環境研究所2001）。

表土層・漸移層の下位には、黄褐色のローム層が発達するが、上半が軟質、下半が硬質のローム層である。硬質のローム層の下半は、「暗色帯」に相当する可能性が指摘されており（年報14）、青葉山E遺跡第5次調査の際の分析では、「暗色帯」の上位に始良Tn火山灰（AT、約2.2～2.5万年前）が確認されている。川崎スコリア層と愛島軽石層の間では、鳴子柳沢テフラ（Nr-Y、4.1～6.3万年前）も、分析によって確認されている（古環境研究所2001）。

青葉山丘陵では、これまでに5ヶ所の遺跡が知られている（図1）。青葉山A遺跡と青葉山D遺跡は、青葉山丘陵でもっとも高位に位置する青葉台に立地する。青葉山B遺跡と青葉山E遺跡は青葉山北キャンパス内に位置し、青葉山C遺跡が新キャンパス予定地内に立地する。

青葉山地区で遺跡が知られるようになったのは昭和初期で、当時東北帝国大学医学部の助手であった山内清男が、陸軍工兵隊の演習場であった青葉山地区の名前を、繊維土器の出土地としてあげている（山内清男1929）。しかし、資料提示はなされておらず、詳細は不明で、細かな場所も確定できない。

再び青葉山地区の遺跡が確認されるのは、1968年である。青葉山A遺跡において、ナイフ形石器などが採集され、青葉山丘陵に後期旧石器時代の遺跡が存在することが明らかとなった。その後、青葉山B遺跡などで旧石器時代遺跡が発見され、東北大学による調査が実施されるようになっていく（年報2・14）。しかし、ねつ造事件発覚後の検証作業によって、青葉山B遺跡と青葉山E遺跡で発掘調査された旧石器時代の石器は、いずれもねつ造された危険性が排除できず、歴史資料としての価値は認め難いことが明らかとなっている（東北大埋文センター2003）。以下では、これら以外の資料について、概観しておきたい。

青葉山A遺跡では、先述のように、ナイフ形石器などが採集されている。ただし、詳細な採集地点などは明らかとなっていない。1988年度には、無線中継所建設工事に伴い仙台市教育委員会によって調査が実施されているが、その際は遺構・遺物は発見されていない（佐藤ほか1990）。

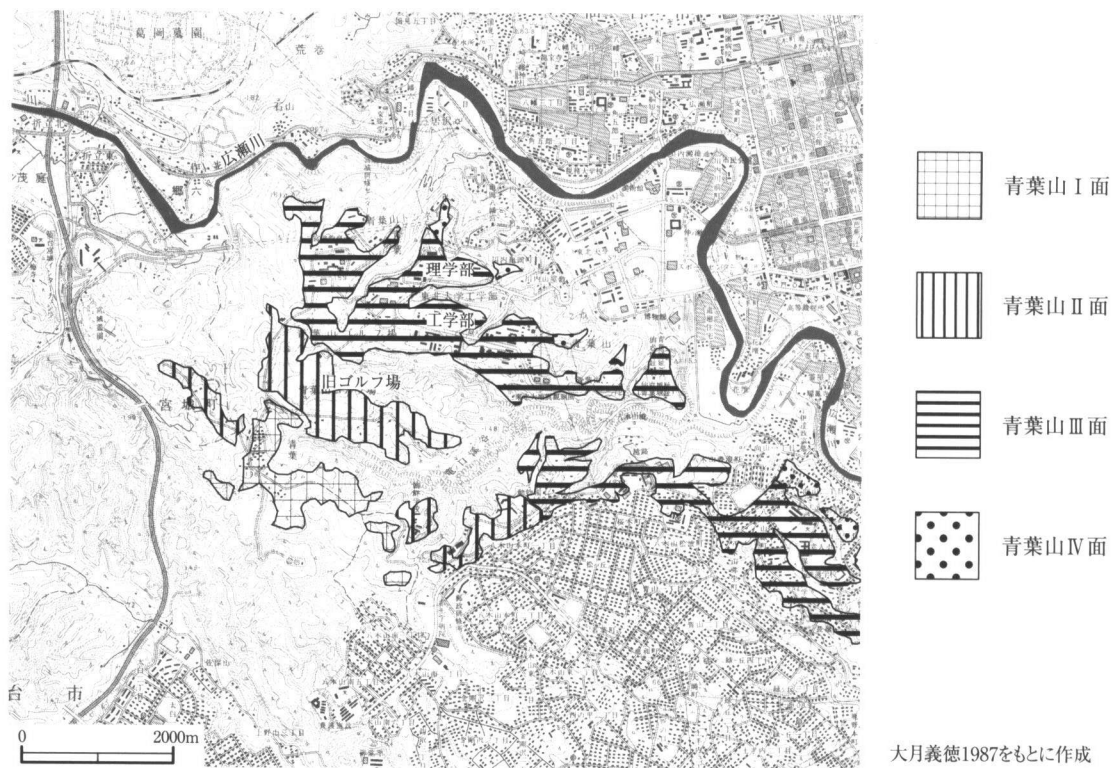


図15 青葉山段丘の段丘面区分  
Fig.15 Classification of Aobayama terraces

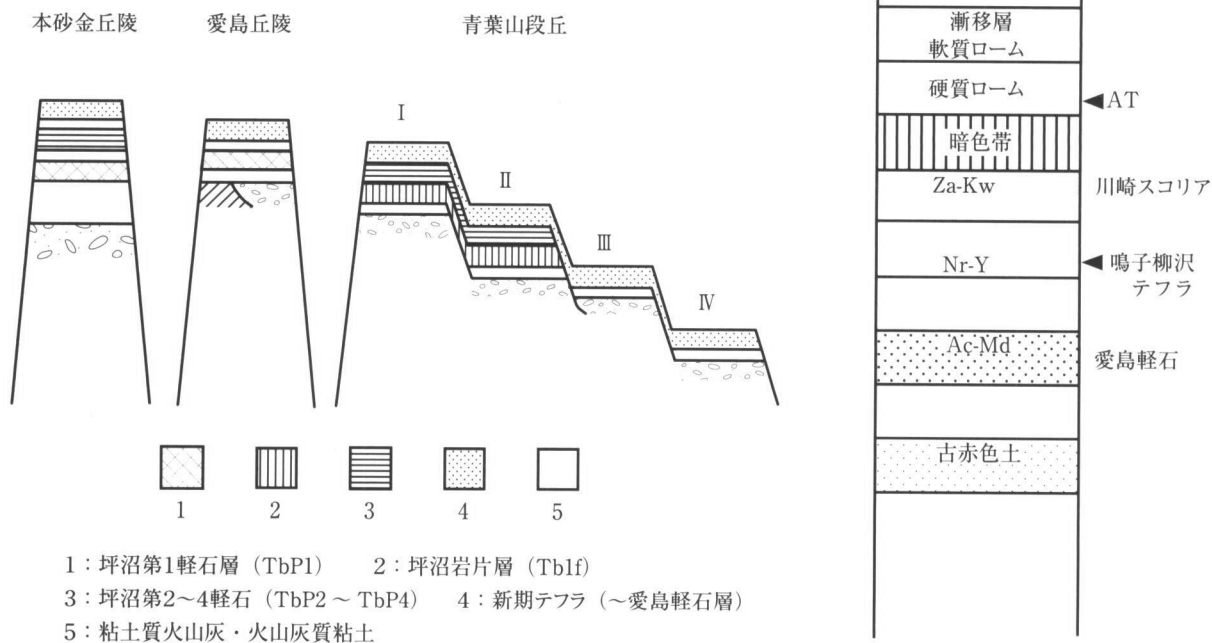


図16 青葉山段丘各面とテフラの関係 (大月義徳1987より)  
Fig.16 Relation of Aobayama terraces surfaces and tephra

図17 青葉山Ⅲ面の基本層序模式図  
Fig.17 Schematic profiles of Aobayama  
Ⅲ terrace

青葉山B遺跡では、旧石器時代の資料に問題があることから、それ以外の時代の遺跡として、現在遺跡登録されている。発掘調査では、少量ながら縄文時代前期・晩期の土器、弥生時代と考えられるアメリカ式石鏃、平安時代の土師器などが出土している。また、詳細な時期は不明であるが、袋状土坑が1基検出されており、縄文時代の可能性が考えられる（年報2）。

青葉山C遺跡では、かつての金属博物館前の市道を隔てた、東側の露頭の崩壊土から、局部磨製石斧や剥片が採集されている。本来の帰属層序は判明していないが、旧石器時代のものと考えられている。

青葉山D遺跡も、両面加工石器や剥片が採集されており、旧石器時代の遺跡として遺跡登録されている。

青葉山E遺跡では、これまでに8次の調査が行われており、縄文時代早期中葉・早期後葉・早期末葉・中期中葉・中期末葉・晩期中葉・晩期後葉、弥生時代、平安時代の遺構・遺物が検出されている（年報2・11・12・13・14・15・20）。特に、早期後葉の遺構・遺物がまとまって発見されている。第3次調査では、早期後葉の竪穴住居跡2棟などの遺構と、貝殻条痕文土器など多数の遺物が出土し、これを標識資料として新たな土器型式「青葉山E式」を提唱した（年報12）。また、4次・5次・6次調査では、縄文時代の陥し穴が発見されている（年報13・14・15）。なお、第1次調査では、旧石器時代にさかのぼる可能性のある陥し穴が報告されているが、人為的な遺構と断定できるか、さらなる検討が必要であろう（年報2）。

## 2. 調査経緯

### (1) 調査にいたる経緯

国立大学法人東北大学では、理学研究科・薬学研究科などが所在する青葉山北キャンパスと、工学研究科などが所在する青葉山東キャンパスの南側に所在する旧県有地において、新キャンパスを建設し、片平地区・雨宮地区などの施設を移転する計画を進めている。新キャンパス予定地の面積は約81万㎡で、青葉山ゴルフ場として使用されていた場所である。

東北大学は1994年度（平成6年度）に移転方針を正式に表明し、宮城県も東北大学の移転が公共性の高い県有地の利活用であるとし、その構想が推進されてきた。しかし、県有地を利用していたゴルフ場と宮城県との間で、県有地の明け渡しをめぐる問題となっていた。この問題が最終的に決着し、ゴルフ場は2005年（平成17年）4月に移転し、明け渡しが完了した。2006年（平成18年）7月には、宮城県からの取得契約が完了し、2007年度（平成19年度）からの工事着工を目指して、準備が進められることとなった。

新キャンパス予定地には、周知の遺跡として青葉山C遺跡が存在するため、事業の実施にあたっては、埋蔵文化財の有無を確認し対処していくことが必要となると考えられた。そのため埋蔵文化財調査室では、新キャンパス構想をめぐる動向に合わせて、対処方策の検討を続け、関係機関との意見交換などを進めてきた。

仙台市が定める開発指導要綱では、1万㎡以上の開発行為に対しては、教育委員会との協議を義務付けており（第12条）、今回の事業にはこの条項が適用される。大規模開発の場合、造成工事に着手してから遺跡が発見されると、様々な問題が引き起こされることとなるため、事前に遺跡の有無を確認しておくことが、この協議において求められることが通常である。開発指導要綱に定められた教育委員会との協議は、開発許可申請の提出後に始められるのが一般的である。しかし、本事業の場合、開発許可申請の提出まで待っていると、東北大学で予定している事業実施時期に間に合わなくなる。そのため、事前に仙台市教育委員会文化財課と打合せ、開発許可申請の提出に先行して、東北大学から協議を申し入れることとした。

平成17年12月19日付けで、仙台市教育長あてに、東北大学総長名で協議を申し入れた。この申し入れに対して、平成18年1月10日付けで、仙台市教育長から試掘調査の必要性などの指示がなされた。

これを受けて、新キャンパス予定地における遺跡の有無の確認と、遺跡が存在する場合にはその概要を確認することを目的として、試掘調査を実施することとなった。調査の具体的方法などについては、仙台市教育委員会

文化財課と協議を行い検討を進めた。今回の移転事業では、東北大学の事業計画スケジュールから、早急に試掘調査を実施する必要があった。仙台市の事業とするには、予算措置等の準備の関係上、東北大学の事業スケジュールに間に合わなくなる。そのため今回の試掘調査は、東北大学の事業として予算化し、東北大学埋蔵文化財調査室が具体的な作業を担当して行うこととなった。その上で、調査の要所において、仙台市教育庁文化財課の担当職員が現地を確認し、遺跡の有無などを確認することとなった。

これらの協議内容を踏まえ、平成18年4月18日付けで、仙台市教育長あてに、試掘調査実施計画と調査への協力依頼を提出した。それに対し、平成18年5月11日付けで、仙台市教育長から試掘調査実施計画と協力依頼への了承が通知され、調査を開始することとなった。

## (2) 調査経過

青葉山新キャンパス予定地は、ゴルフ場造成によって改変された場所も多く、現状から本来の地形などを推定することが困難であった。そのため、本格的な試掘調査に先立ち、調査対象地全体のおおよその状況を把握する目的で、予備調査を実施した。予備調査結果を、東北大学のキャンパス計画室が所有していたゴルフ場造成以前の航空写真と照らし合わせて検討した。これにより、本来の地形と、ゴルフ場造成による改変状況を、おおむね推定できるようになった。

このような予備的作業を踏まえ、遺跡の存在する可能性のある範囲を、徐々に限定していく方法で試掘調査を実施することとした。すなわち、沢状の地形であった区域、ゴルフ場造成で大きく削平されている区域など、遺跡の存在が見込めない区域を確定していくことで、本来の地形が残存している区域を徐々に限定していく方策を採用した。そのため、試掘調査は3段階に分けて実施することとした。

予備調査と3段階の試掘調査の、調査期間、調査区の数、調査面積は次のとおりである。

予備調査 : 2006年(平成18年)5月9日～5月17日

調査区45ヶ所、合計調査面積180㎡

試掘調査第1段階 : 2006年(平成18年)6月5日～6月19日

調査区60ヶ所、合計調査面積240㎡

試掘調査第2段階 : 2006年(平成18年)7月3日～7月27日

調査区62ヶ所、合計調査面積312㎡

試掘調査第3段階 : 2006年(平成18年)8月1日～9月7日

調査区55ヶ所、合計調査面積432㎡

予備調査から第3段階までの合計では、調査区は222ヶ所、調査面積は1,164㎡となる。

調査の実施が大きく4段階に分かれるため、以下の調査区の記載では、予備調査分を0-00区、第1段階調査分を1-00区、第2段階調査区を2-00区、第3段階調査分を3-00区という形で記載する。

調査にあたっては、調査員立会のもと、重機で掘削した。重機掘削にあたっては、できるだけ細かく掘削を行い、遺物の発見に努めた。掘削深度は、安全を考慮し、2m以内とした。示標テフラが確認された場合は、そこで掘削を終了している場合が多い。川崎スコリア層を目安としているが、削平されている区域では愛島軽石層を目標としている。また本来の地形が残存している部分では、重機による掘削は表土層を除去するだけにとどめ、必要に応じて平面精査を実施した。また、青葉山C遺跡の範囲内などでは、当初より手掘りで調査を実施した調査区もある。各段階とも、仙台市教育委員会文化財課の担当職員による確認を受けた上で、重機によって埋め戻した。

重機掘削後、作業員により平面や地層断面の清掃などを行い、地層断面の模式図を作成した。記録写真は、デジタルカメラを使用した。調査所見の記載と、模式図と写真を添付した、調査区ごとのカードを作成し保管用記録とした。遺物が出土した3-61区については、平面図と断面図を縮尺20分の1で作成した。3-61区では、カラー

リバーサルとモノクロの35mmフィルムカメラを使用し、デジタルカメラも併用した。調査区の位置は、東北大学が作成した新キャンパス予定地の500分の1地形図に、測量して記入した。予備調査から第3段階までの、全ての調査区の位置を記入した地形図は、図28～35に示した。図28～35の国土座標値は、世界測地系である。

### 3. 試掘調査結果

#### (1) 予備調査

先述のように、青葉山新キャンパス予定地は、ゴルフ場造成によって改変された場所も多く、現状から本来の地形などを推定することが難しいと考えられる。そのため、本格的な試掘調査に先立ち、調査対象地全体のおおよその状況を把握する目的で、予備調査を実施することとした。

対象地全体に、ほぼ均等になるように、45ヶ所調査区を設定した(図18)。調査区は、2×2mの大きさとし、重機で掘削した後、地層断面を削り出し、地層の堆積状況を把握した。

調査の結果、45ヶ所の調査区全てにおいて、明確な遺構・遺物は発見されなかった。全般に、ゴルフ場造成による削平や、沢の埋め立てがなされているところが多い。大きく削平されていることが確認された調査区は、0-2～7区、0-10～12区、0-16区、0-17区、0-19区、0-20区、0-22区、0-24～26区、0-28区、0-29区、0-31区、0-34区、0-39区、0-40区の23ヶ所であった。沢状部分や、大規模な盛土がなされていた調査区は、0-8区、0-9区、0-13区、0-14区、0-18区、0-21区、0-23区、0-27区、0-32区、0-33区、0-36区、0-37区、0-44区、0-45区の14ヶ所であった。このような調査結果を、1947年(昭和22年)撮影の航空写真に照らし合わせることで、ゴルフ場造成以前の沢の様子を、ある程度復元できるようになった。この復元をもとに、造成以前の地形を想定し、今後の試掘調査を進めていく目処が立った。

今回の調査区の内、0-1区、0-15区、0-30区、0-35区、0-38区、0-41区、0-42区、0-43区の8ヶ所では、削平は浅くに留まっていることが判明した。0-35区において、風倒木痕と思われるものが発見されており、ほとんど削平されていないことが判明した。これらの内、0-1区と0-35区は、南東向きの緩傾斜地であり、今後の調査にあたって注意が必要であると考えられた。0-30区は、クラブハウスなどが建てられている区域で、攪乱が多かったが、ごく一部で本来の地層が残されていた。0-38区では、ゴルフ場による削平はなされていなかったが、本来の地形は、北側に大きく傾斜する斜面であった。

0-7区、0-8区を設けた区域は、細い尾根状の部分を削平して造成したものと考えられ、本来の地形はほとんど残されていないと考えられる。また、0-9～14区、0-18～23区を設けた場所は、ゴルフ場造成以前の航空写真から、北側から深い沢が入っていた区域と判断される。尾根を削り、沢を横切るように埋めることで、コースが造成されたと考えられる。今回の予備調査の結果も、この認識を変えるようなデータはなく、上記の想定を裏付ける結果となっている。そのため、遺跡が存在する可能性は極めて低いものと考えられる。

以上の調査結果から、0-7区～14区と0-18区～23区を設けた区域については、今後の試掘調査の対象からは除外することとした。

#### (2) 第1段階

5月に実施した予備調査の結果を踏まえ、試掘調査の対象範囲のおおよそ半分の区域を対象として、遺跡の有無を確認することを目的として調査を実施した。クラブハウスなどが置かれていた区域から東側を、対象区域とした。ただし、北東側のゴルフ場入り口付近は、ゴルフ場時代の建物が多数置かれていた場所で、それらの撤去工事などとの関係から、第2段階で調査を行うこととした。また、ゴルフ場の南東隅の区域も、第1段階で調査することを予定していた。しかし、この区域のさらに東側の、新キャンパス予定地の外側で、オオタカの営巣が確認された。そのため、ヒナの巣立ちまで重機などによる騒音を避けることが必要となり、この区域は第2段階で

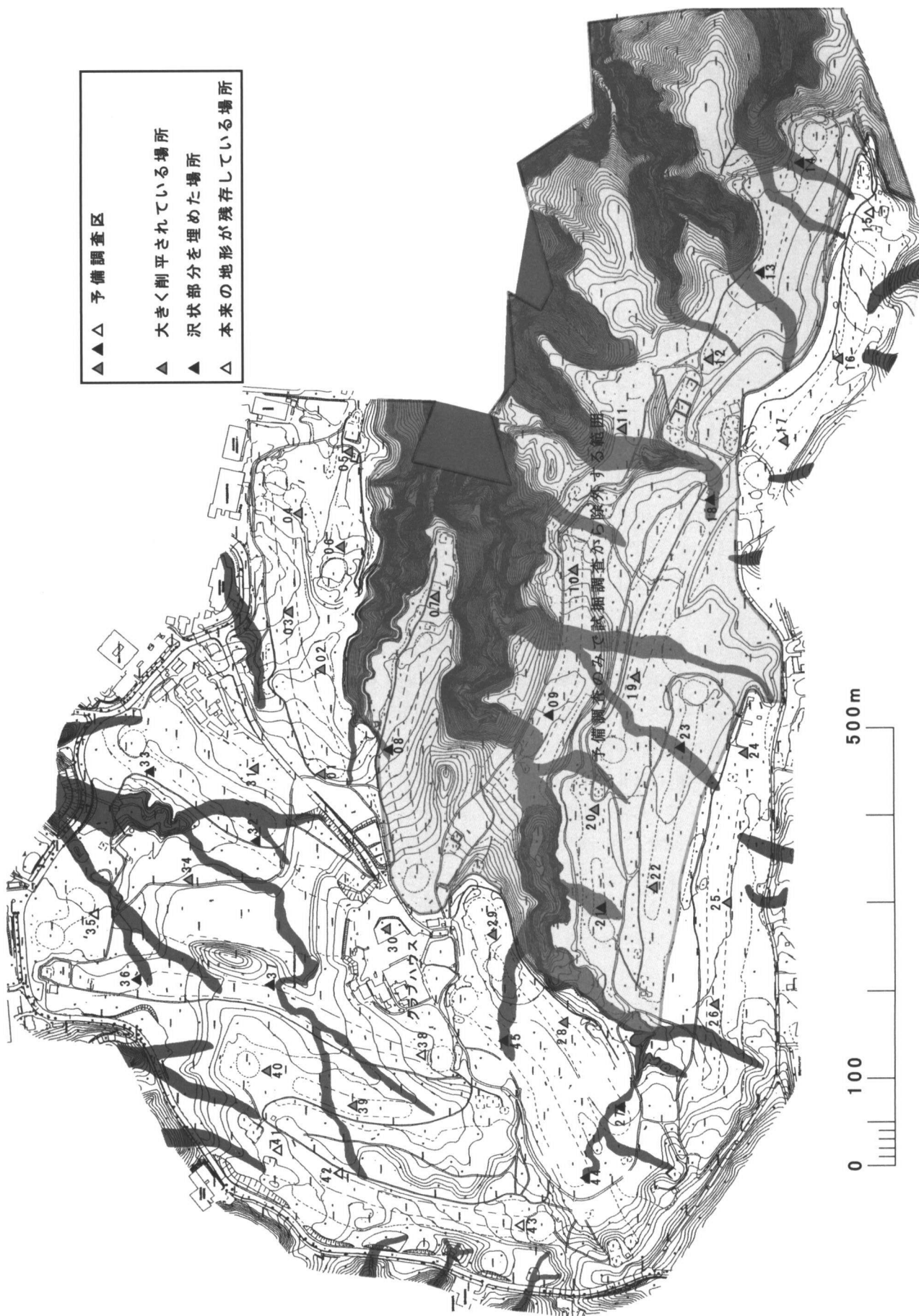


図18 青葉山新キャンパス試掘調査区配置図 (予備調査)

Fig.18 Location of the trial trenches at Aobayama new campus predetermined area (preparatory excavation)

調査することとした。

予備調査結果やゴルフ場造成以前の写真から推定される沢筋や、現地形から想定される削平範囲などを考慮して、60ヶ所の調査区を設定した（図19）。調査区は、2×2mの大きさとし、重機で掘削した後、地層断面を削り出し、地層の堆積状況を把握した。

場所によって様相が異なるため、6区域に区分して記載する。

#### 【1-01～12区】

新キャンパス予定地の、北東側の区域である。

1-06～08区の部分が尾根筋にあたり、この区域は削平されておらず、ローム層も良好に残されている。ただし、縄文時代以降の表土層の形成は悪く、遺構・遺物は発見されていない。

1-01区・1-05区・1-10区は、沢の部分か、沢に近い部分にあたり、本来の地形が残されていた。これら以外の区域は、予備調査の結果も含め、全て削平を受けており、本来の地形が残されていないことが明らかとなった。

尾根筋が残っている1-06～08区周辺は、第2段階でも調査を行いさらに検討することとした。それ以外の区域では、遺跡が存在し保存されている可能性は低いと考えられるため、これ以上の調査は実施しないこととした。

#### 【1-13～21区】

新キャンパス予定地の南端の区域である。

尾根筋にあたる1-13・1-14・1-16・1-17区では、削平は受けていない。本来の地層が残されており、ローム層の保存状態も良好である。遺構・遺物は発見されていない。同じ尾根筋で、若干標高が下る部分にあたる1-18・1-19区でも、削平はされていない。標高が低い分、自然の開析作用で削られており、上部のローム層は残されていない。1-18区で落ち込みが発見されているが、木根による攪乱の可能性もあり、確定できていない。これらの尾根筋にあたる区域では、さらに検討が必要であるため、第2段階でも調査を続けることとした。

尾根筋の南側のフェアウェイ部分は、現地形の観察と予備調査結果から、削平を受けていることは明らかであり、この区域では遺跡が発見される可能性はない。

フェアウェイ南側の1-15区は、沢に近い、低湿な部分と考えられ、遺跡が存在する可能性は低い。

同じくフェアウェイ南側の1-20区では、盛土下に本来の地形が残されており、南側に緩やかに下っていく斜面である。旧表土層の直下に、青葉山E遺跡の縄文時代の遺物包含層に良く似た地層が存在する。遺構・遺物は発見されていないが、さらに検討が必要であるため、第2段階でも調査を行うこととした。

#### 【1-22～39区】

クラブハウスの南側にあたる区域である。

1-36区において、遺構の可能性があり、黒褐色土の落ち込みが確認された。内部の埋土を掘り下げているので、人為的な遺構なのか確定できていないし、遺物も発見されていない。第2段階で、1-36区のまわりを拡張する形で調査を行い、人為的な遺構であるか否かを確定させることとした。合わせて、1-36区周辺の削平をまぬがれている範囲を、より限定していくために、調査区を設けることとした。

これ以外の調査区は、削平を受けているか、あるいは沢に近い低湿部分を埋めた場所であった。1-23区と1-26区では、ゴルフ場造成による削平は少ないと考えられるものの、沢に近く、自然の開析作用でローム層はほとんど残されていなかった。そのため、1-36区周辺以外では、遺跡が存在し保存されている可能性は低いものと考えられることから、これ以上の調査は実施しないこととした。

#### 【1-40～41区】

クラブハウスが置かれていた、最も標高の高い場所である。アスファルト舗装の部分が多く、調査区を設定できる場所は限られていた。クラブハウス前の植え込み部分に、予備調査の0-30区の付近で、2ヶ所を調査した。

予備調査の0-30区では、攪乱からはずれたわずかの範囲で、本来の地層が残されているだけであった。1-40

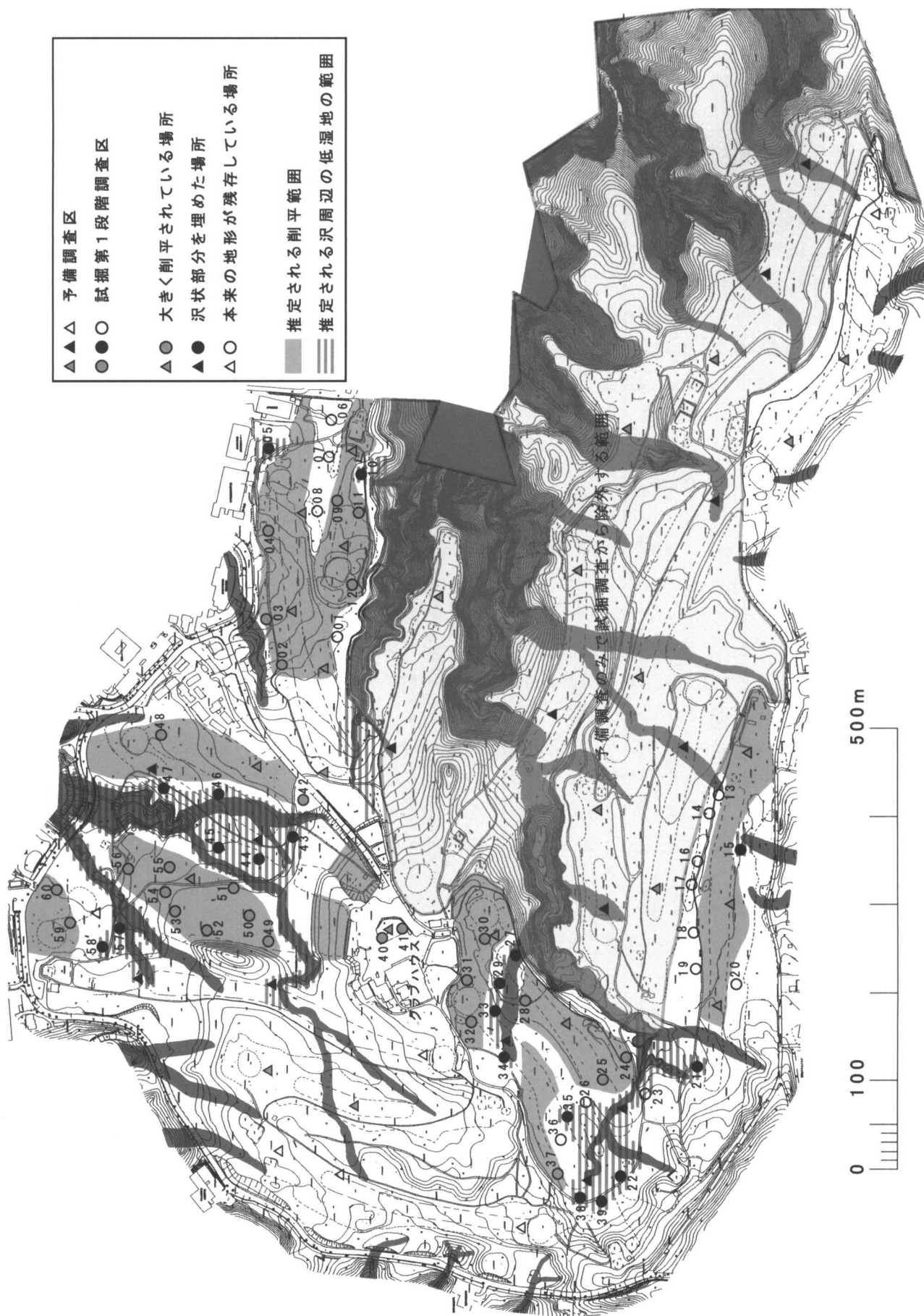


図19 青葉山新キャンパス試掘調査区配置図 (第1段階)  
Fig.19 Location of the trial trenches at Aobayama new campus predetermined area (the 1st step)

区と1-41区では、ほとんど全てが攪乱され、本来の地層は残っていなかった。このように3ヶ所とも、ゴルフ場造成時には削平されていないものの、それ以外の攪乱が激しく、本来の地層はほとんど残っていない。調査した場所以外も、クラブハウスや附属施設などが多数建てられており、地層が良好に残されている可能性は低いと考えられる。そのため、遺跡が存在し保存されている可能性は低いものと考えられる。

以上の点から、当区域では、これ以上の調査は実施しないこととした。

#### 【1-42～56区】

クラブハウスの北側の区域である。

沢筋に近い所は、低湿な状態で、遺跡が存在する可能性は低い。1-42区では、ローム層が比較的残されていたが、それ以外は、ほとんどが削平されていた。沢と尾根との間の傾斜が、比較的急な区域であったと考えられ、高い所は削平され、低い沢筋の部分のみが盛土下に残存しているものと考えられる。このため、遺跡が存在し保存されている可能性は低いものと考えられる。

以上の点から、当区域では、これ以上の調査は実施しないこととした。

#### 【1-57～60区】

新キャンパス予定地の北端の区域である。予備調査の0-35区では、かつての表土層が保存されており、風倒木痕が発見されている。

1-57区と1-58区は沢状の部分で、1-59区と1-60区は削平されていた。0-35区の北東側は、削平を受けていることが明らかとなった。第2段階において、本来の地形が残存している範囲をより限定するため、さらに調査区を設定することとした。

### (3) 第2段階

5月に実施した予備調査の結果を踏まえ、試掘第1段階の調査範囲以外の区域、および第1段階において更なる検討が必要であった区域を対象として、遺跡の有無を確認することを目的として調査を実施した。

予備調査および試掘第1段階の調査結果や、ゴルフ場造成以前の写真から推定される沢筋、現地形から想定される削平範囲などを考慮して、62ヶ所の調査区を設定した(図20)。調査区は、58ヶ所は2×2mの大きさとし、重機で掘削した後、地層断面を削り出し、地層の堆積状況を把握した。残る4ヶ所については2×10mの大きさとし、表土と薄い盛土を重機で除去した上で、平面精査を実施し、地層の違いがどのように広がるかを把握した。

場所によって様相が異なるため、10区域に分けて記載する。

#### 【2-01～12区】

新キャンパス予定地の南東端の区域である。当初は第1段階で調査する予定であったが、東側の予定地外でオオタカの営巣が確認されたため、調査を後回しにしていた区域である。オオタカの巣立ちが確認されたため、第2段階で調査を行った。

2-02区から2-11区にかけては、いずれも削平されていた。東西両端の調査区(2-01区、2-12区)では、盛土の下に本来の地層が残されていたが、ゴルフ場南側の低い区域へ下っていく場所を埋めたものと考えられる。以上の点から、当区域では遺跡が存在し保存されている可能性は低いものと考えられるため、これ以上の調査は実施しないこととした。

#### 【2-13～14区】

予定地南端に近い区域で、試掘調査第1段階の結果、尾根筋にあたる当区域は削平されておらず、標高の高い東側ではローム層も良好に残されていることが明らかとなっていた。縄文時代以降の表土層の形成は悪く、確実な遺構・遺物は発見されていない。ただし、1-18区で落ち込みが発見されているが、木根による攪乱の可能性もあり、性格が確定できなかった。そのため、この区域における遺構・遺物の有無を確認するため、さらに2ヶ

所の調査区を設定した。いずれにおいても遺構・遺物は発見されず、遺跡が存在し保存されている可能性は低いと考えられる。このため、これ以上の調査は実施しないこととした。

#### 【2-15～18区】

予定地南端の区域で、試掘調査第1段階の1-20区で、盛土下に本来の地形が残されており、旧表土層の直下に暗褐色土の地層が存在することが明らかとなっていた。遺跡で発見される遺物包含層に類似する土層のため、その様相を明らかにする目的で、周囲に4ヶ所の調査区を設定した。2-15・16・17区では、削平を受けていることが明らかとなった。2-18区では本来の地形が残されており、改変は受けていなかった。これらの調査区での本来の地表面の高さを考慮すると、暗褐色土層が確認された1-20区へ向けて、比較的急に下っていくことが明らかとなった。そのため1-20区は、沢へ向かう場所であり、安定した緩斜面は存在しないことが明らかとなった。そのため当区域では、遺跡が存在し保存されている可能性は低いと考えられる。したがって、これ以上の調査は実施しないこととした。

#### 【2-19～24区】

クラブハウスの南東側の区域で、試掘調査第1段階の1-36区において、遺構の可能性があり、黒褐色土の落ち込みが確認された。そのため、黒褐色土の広がり性格を確認する目的で、周囲に2×10mの調査区を4ヶ所(2-20～23区)設けた。2-20区と2-21区で、黒褐色土の範囲が確定され、ごく浅い沢状の落ち込みである可能性が高くなった。ただし、落ち込みを埋めている黒褐色土層は固く締まっており、古い時代のものであると考えられる。2-22区と2-23区では、黒褐色土の上に、自然に再堆積したローム層が存在することが明らかとなった。そのため、この区域では、本来の地形が残されていることが判明した。

再堆積したローム層の上面で平面精査を行ったため、黒褐色土の広がりについては、確定できていない。2-23区北東隅の一部掘り下げたところ、この場所では黒褐色土は見られず、青灰色の地層となっており、東側では低湿な場所へと変化していた可能性がある。

また、周囲の様相を明らかにする目的で、さらに2ヶ所の調査区(2-19・24区)を設定した。いずれも削平を受けており、本来の地形が残存している範囲は、ここまでは広がらない。

沢状の落ち込み以外には、遺構は発見されておらず、遺物も出土していないが、落ち込みとその周囲では、本来の地形が残されていることが明らかとなった。そのため、周囲をさらに調査して、遺構・遺物の有無を確定させていく必要がある。ただし、沢状の落ち込みの範囲は、東側と南側で確定できていないので、第3段階では東側と南側を中心に調査区を設定する。

#### 【2-25～31区】

ゴルフ場入り口からクラブハウスに向かう道路の、南側の区域である。

2-31区では、本来の地表面が残されており、遺構の可能性も考えられる落ち込みが検出された。ただし、遺物は発見されておらず、埋土に締まりが少ない点から新しい時代の攪乱である可能性もある。周囲をさらに調査して、遺構・遺物の有無を確定させていく必要があるため、第3段階で確認することとした。

これ以外の調査区では、削平を受けているか、あるいは沢状部分を埋めていることが明らかとなった。ただし、予備調査の0-01区では、若干の削平を受けていたが、ある程度本来の地層が残されていた。この0-01区周辺では、削平されている区域と、沢が埋められた区域の間に、あまり広い範囲ではないが、本来の地形が残存している可能性のある区域が残っている。2-31区周辺と合わせて、本来の地表が残されている可能性が考えられる区域において、さらに検討するため、第3段階で調査を行うこととした。

#### 【2-32～35区】

ゴルフ場入り口からクラブハウスに向かう道路の、北側の区域である。ゴルフ場関係の建物が、多数建てられていた区域である。

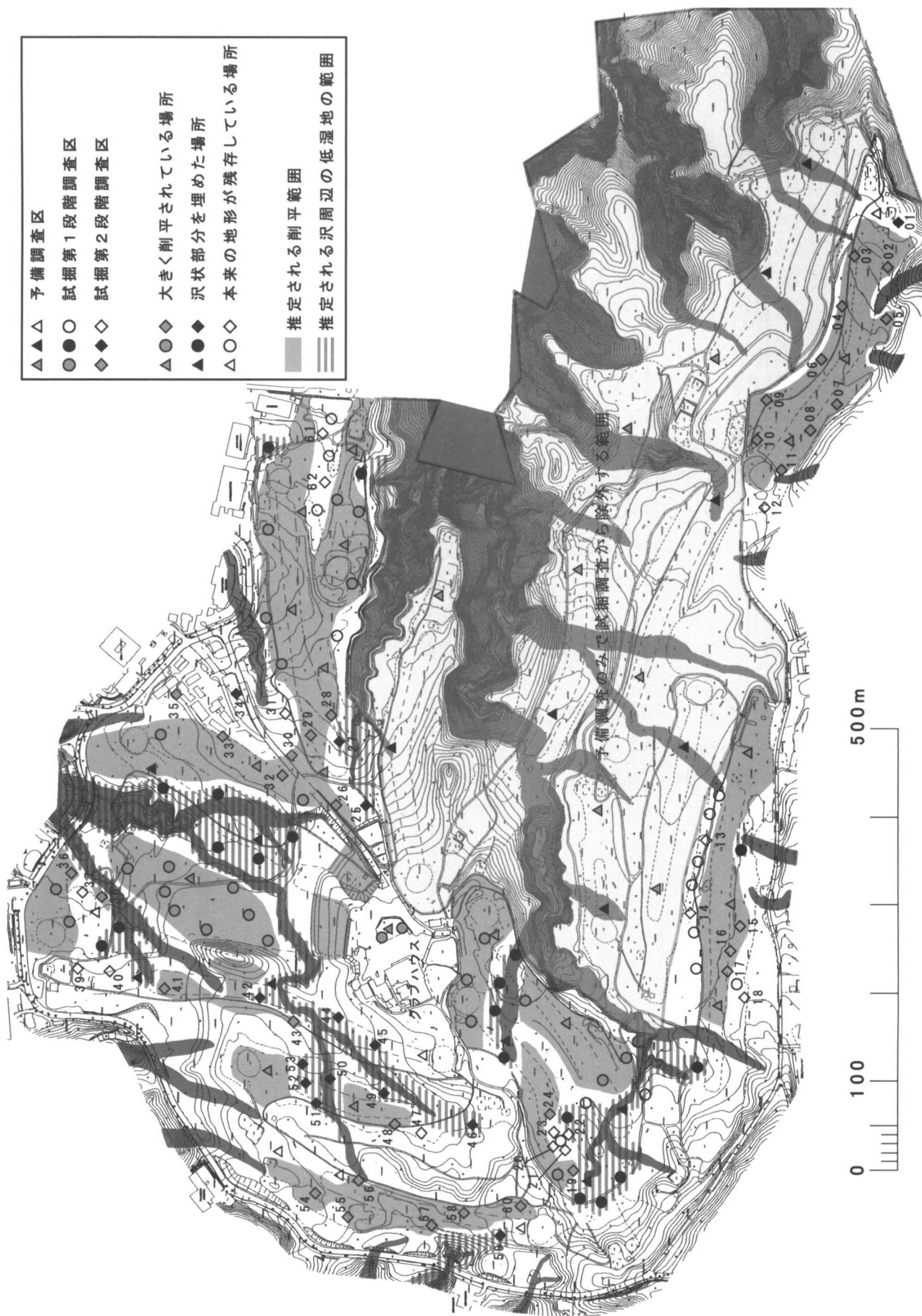


図20 青葉山新キャンパス試験調査区配置図 (第2段階)

Fig.20 Location of the trial trenches at Aobayama new campus predetermined area (the 2nd step)

2-34区では、厚い盛土の下に本来の地表面が残されていたが、南東側の沢へ下っていくことが明らかとなった。それ以外の区域では、削平されているか攪乱されており、本来の地層は残されていなかった。以上の点から、遺跡が存在し保存されている可能性は低いものと考えられるため、当区域では、これ以上の調査は実施しないこととした。

#### 【2-36～40区】

予備調査の0-35区では、かつての表土層が保存されており、風倒木痕が発見されている。試掘第1段階では、1-57区と1-58区は沢状の部分で、1-59区と1-60区は削平されていた。そのため、0-35区の北側は削平を受けていることが明らかとなったが、本来の地形が残存している範囲をより限定するため、調査区を設定した。2-36・38区では、削平され本来の地形は残っていない。2-37区では、かつての表土層が保存されており、本来の地形が残存していることが明らかとなった。0-35区から2-37区にかけての範囲では、さらに検討を加え、遺構・遺物の有無を確定させていく必要がある。

また、2-39・40区でも、本来の地形が残存していることが明らかとなった。2-40区では、風倒木痕も確認された。東側の0-35区・2-37区周辺に向けて下っていく地形で、部分的に本来の地形が残存しているものと考えられる。そのため、さらに検討する必要があると判断し、第3段階で調査を実施することとした。

#### 【2-41～53区】

クラブハウスの西側にあたる区域である。

沢筋に近い所は低湿な状態で、遺跡が存在する可能性は低い。それ以外は、ほとんどが削平されていた。沢と尾根との間の傾斜が、比較的急な区域であったと考えられ、高い所は削平され、低い沢筋の部分のみが盛土下に残存しているものと考えられる。このため、遺跡が存在し保存されている可能性は低いものと考えられる。

以上の点から、当区域では、これ以上の調査は実施しないこととした。

#### 【2-54～60区】

予定地西端の、青葉山C遺跡に隣接する区域である。

フェアウェイ部分は、全て削平されていることが明らかとなった。本来の地形が残存しているのは、フェアウェイ西側の、高い部分が残されている区域だけである。周知の遺跡として登載されている青葉山C遺跡は、この西側の高い部分にあたり、フェアウェイの削平された区域までは広がっていない可能性が強くなった。今回の第2段階では、削平されている可能性の高い区域を調査した。第3段階において、高い部分が残されている区域を調査し、第2段階の調査結果と比較し、遺跡の範囲を確定していくこととした。

#### 【2-61～62区】

予定地北西側の区域で、試掘調査第1段階の結果、尾根筋にあたる区域は削平されておらず、ローム層も良好に残されていることが明らかとなっていた。ただし、縄文時代以降の表土層の形成は悪く、遺構・遺物は発見されていない。

遺構・遺物の有無を確認するため、さらに2ヶ所の調査区を設定した。いずれにおいても遺構・遺物は発見されず、遺跡が存在し保存されている可能性は低いと考えられる。このため、これ以上の調査は実施しないこととした。

#### (4) 第3段階

試掘調査第2段階までの調査結果によって、本来の地形が残されている可能性が高いと判断された区域に、集中的に調査区を設定し調査した。62ヶ所の調査区を設定して調査を開始したが、調査状況に合わせて、適宜変更を加えている。12ヶ所については2×10mの大きさとし、表土と薄い盛土を重機で除去した上で、平面精査を実施し、地層の違いがどのように広がるかを把握した。48ヶ所は2×2mの大きさとし、重機で掘削した後、地層

断面を削り出し、地層の堆積状況を把握するとともに、平面精査を実施し、地層の違いがどのように広がるかを把握した。なお、平面精査を行う関係で、5ヶ所については、2×2mの調査区を2区分連結して、2m×4mの調査区として調査した。したがって、2×2mの調査区が38ヶ所、2×4mの調査区が5ヶ所となる。

また、周知の遺跡である青葉山C遺跡の範囲内と、北側に隣接する区域では、おのおの1ヶ所ずつ、2×2mの調査区を設定し、当初より手掘りによって調査した(3-61区・3-62区)。

場所によって様相が異なるため、図21に示したA～C地区、および青葉山C遺跡とその周辺にあたる地区に分けて記載する。

#### ①A地区(図22)

A地区では、大きく東側(3-01～16区)と、西側(3-17～24区)に区分することができる。

A地区の東側は、2-31区で本来の地形が残存していることが確認され、遺構の可能性のある落ち込みが検出されていたことから、その広がりや遺跡の有無を確認するため、調査を行った。2×10mの調査区を4ヶ所(3-01～04区)、2×2mの調査区を10ヶ所(3-05～10区、3-13～16区)、2×4mの調査区を1ヶ所(3-11・12区)を、2-31区の周辺に配置した。調査の結果、2-31区周辺の、3-01～16区では、ほとんどの範囲で本来の地形が残存していることが確認された。ゴルフ場造成による改変は、ほとんど受けていない。ただし3-01区では、南側は削平を受けており、もとは南側に尾根が東西に延びていたことが判明した。そのため、3-01～16区周辺の、本来の地形が残存している区域は、北側へ向かって下っていく緩い斜面であることが明らかとなった。

2-31区で検出されていた落ち込みと、埋土が類似する落ち込みが3-02区と3-13区で検出されたが、いずれも新しい時期の攪乱と判断された。そのため、2-31区で検出された落ち込みも、新しい時期の攪乱と考えられる。

以上の調査結果から、A地区東側は、本来の地形が良好に残されているものの、北向き斜面であった。遺構・遺物は発見されず、遺跡の存在は確認されなかった。

A地区の西側は、南側にある沢に向かい、本来の地形が残存している可能性があったため、調査を実施した。2×2mの調査区を8ヶ所(3-17～24区)設けて調査した。

調査の結果、全ての調査区が、削平を受けているか、あるいは沢部分を大きく埋めたものであった。そのため、緩い平坦な地形はそもそも存在せず、比較的急な傾斜で起伏が存在した場所を、ゴルフ場造成で平坦にならしたものであることが判明した。

以上の調査結果から、A地区西側は、遺跡が存在するような平坦地は広がっていないことが確認された。

#### ②B地区(図23)

B地区では、0-35区、2-37区、2-39区、2-40区において、本来の地形が残存していることが確認されていた。また0-35区と2-40区では、風倒木痕も発見されていた。そのため、この区域一帯が、東側へ向かって下る、緩い傾斜の平坦面が広がっている可能性が考えられたため、調査を実施した。0-35区と2-37区の周囲に、2×10mの調査区をそれぞれ4ヶ所、計8ヶ所設けた(3-25～32区)。また、これらの周囲に、2×4mの調査区を4ヶ所設け(3-33・34区、3-35・36区、3-37・38区、3-39・40区)、平面精査を行い遺構の有無を検討した。これらより西側の区域では、2×2mの調査区を、10ヶ所設けた(3-41～50区)。

調査の結果、現状の地形では想定していなかった沢が発見され、起伏がある場所をゴルフ場造成時に平坦にならしたものであることが判明した。そのため、本来の地形が残存している範囲は、ごく限定された区域に留まることが明らかとなった。

以上の調査結果から、B地区では、遺跡の存在は確認されなかった。

#### ③C地区(図24)

C地区は、試掘調査第1段階(1-36区)と第2段階の調査(2-20～23区)によって、古い時代の沢状の落ち込みが存在し、その周囲では本来の地形が残存していることが確認されていた。そのため、古い時期の沢と本来

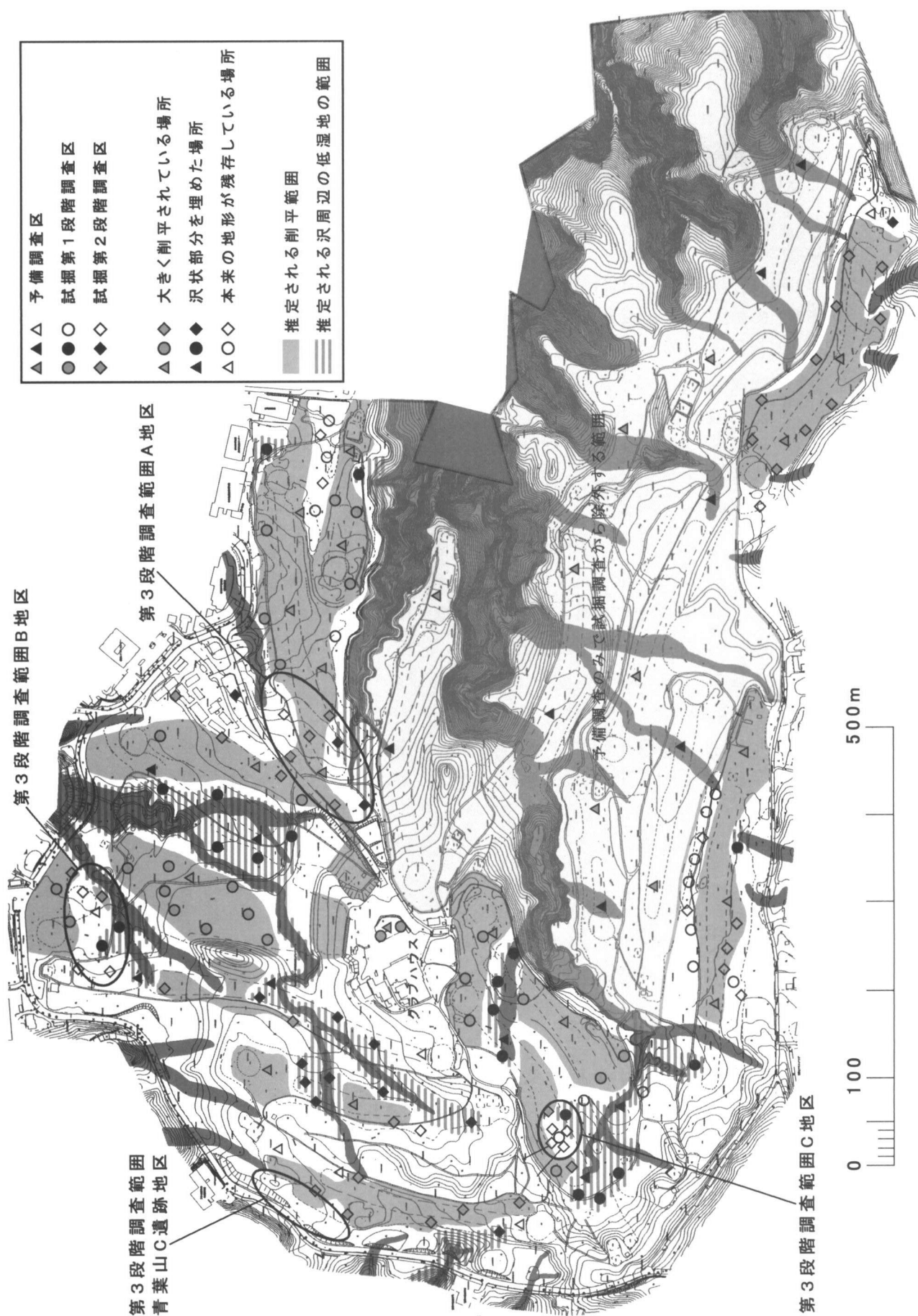


図21 青葉山新キャンパス試掘調査区配置図 (第3段階)  
Fig.21 Location of the trial trenches at Aobayama new campus predetermined area(the 3rd step)

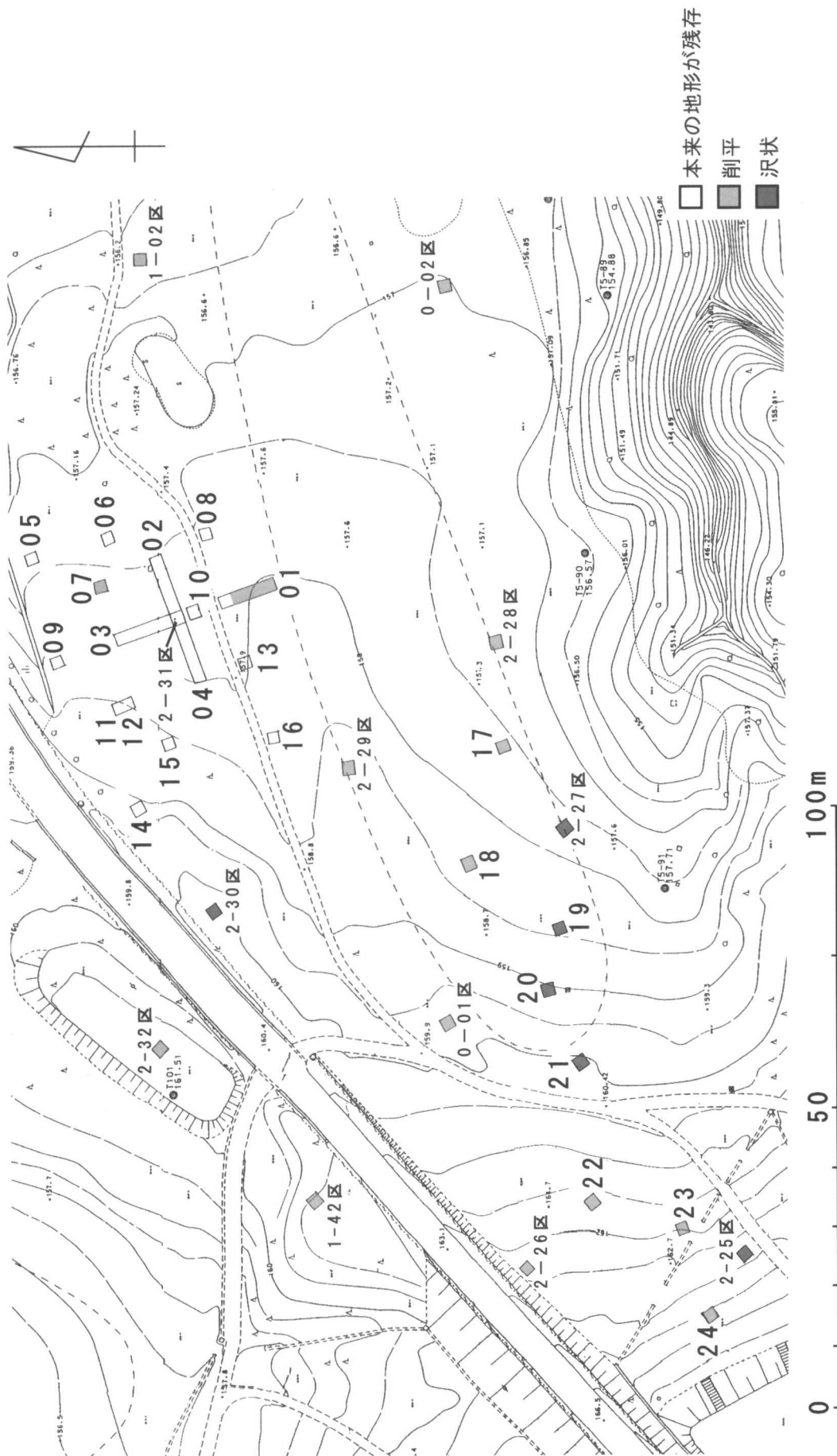


図22 青葉山新キャンパス試掘調査区配置図 (第3段階A地区)  
Fig.22 Location of the trial trenches at Aobayama new campus predetermined area (the 3rd step A area)



調査の結果、古い時期の沢状落ち込みは南東に延びるが、その周囲の本来の地形が残存している範囲は、限定された区域に留まることが明らかとなった。その周辺は、起伏がある場所をゴルフ場造成時に平坦にならしたものであることが判明した。また、古い時期の沢状落ち込みの埋土については、一部を手掘りで掘り下げたが、遺物は発見されなかった。

#### ④青葉山C遺跡地区

3-61区は、青葉山C遺跡のすぐ北側に隣接する高まりに設定した、2×2mの調査区である。3-61区の付近では、フェアウェイ部分は大きく削平されていることが、第2段階までの調査で判明していた。そのため、フェアウェイ西側に残された高まりが、本来の地形が残されている可能性があった。



47

遺跡に隣接する区域であるため、当初より手掘りによって調査を行った。薄い表土を除去すると、すぐにローム層が露出した。このローム層の最初の掘り下げの段階で、石器が出土した。石器が出土したため、以降の掘り上げ土は全て採取して、5mmのフルイがけを行い、微細遺物の採集を行った。遺物が出土した最も下位のレベルより10cm以上掘り下げた段階で、3層を掘り抜いたこととなったため、この深さで調査を終了した。調査区南東隅では、一部深掘りを行い層序を検討した。深掘り部分では、遺物は出土していない。

薄い表土のすぐ下位がローム層となっており、漸移層は確認できなかった。西側の道路に面した林が残されている部分と比較すると、調査地点は現地表面が若干低い。大きく削平はされていないが、ゴルフ場造成時に若干の削平がなされ、その際に漸移層やローム層が若干削平されたものと考えられる。ローム層は、微妙な違いによって2～6層に区分した。東に向かってわずかに傾斜しているが、ほぼ水平に近い。川崎スコリア層は、調査した深さでは確認できておらず、より下位に存在すると考えられる。青葉山地区での基本層序では、川崎スコリア層より上位のローム層は、軟質のローム層と硬質のローム層に大別される。しかし、この違いは必ずしも明確でない場合もあり、今回の調査地点では最上部の地層が削平されていることもあり、対比が難しい。調査地点の西側崖面では、現地表より約1mの深さのところで、川崎スコリア層が確認できる。調査地点は、上部が若干削平さ

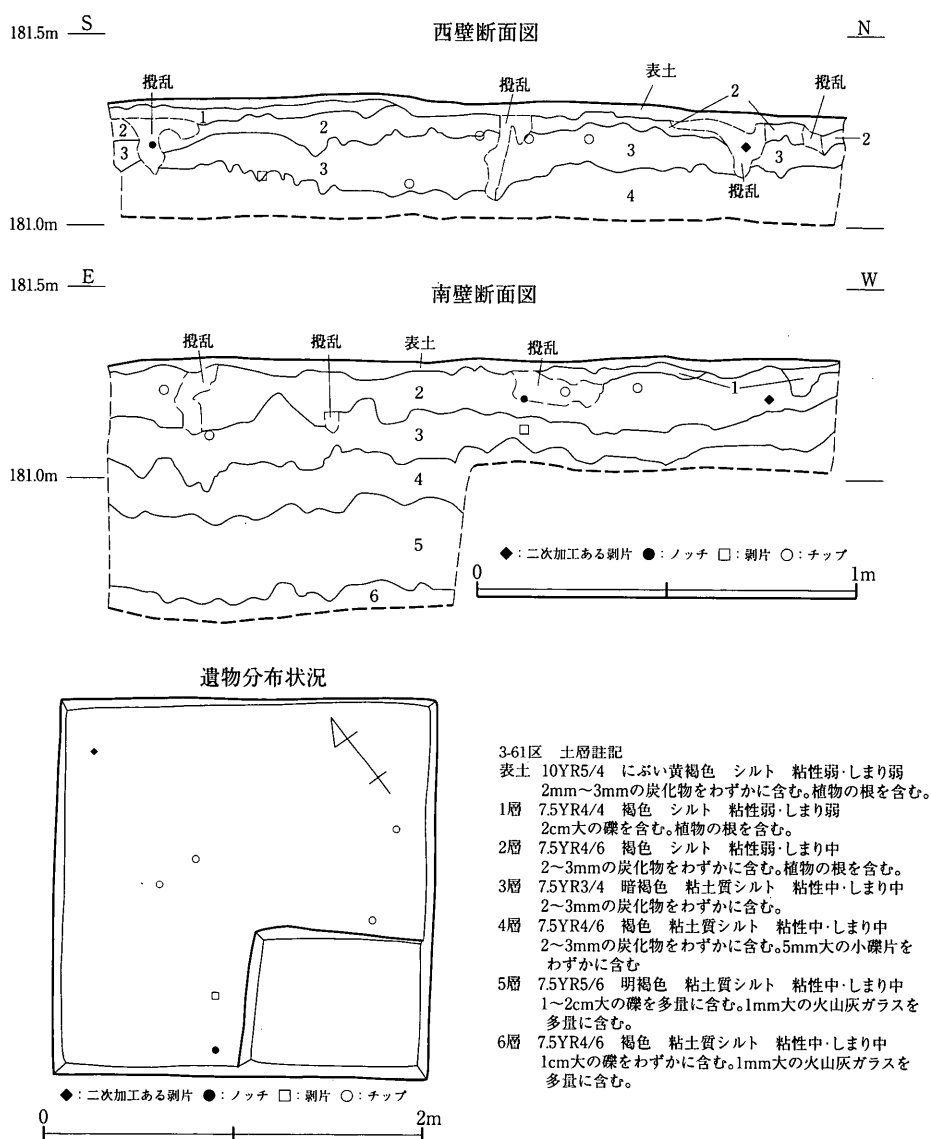


図26 青葉山新キャンパス試掘3-61区平面図・断面図  
Fig.26 Plans and sections of No.3-61 trial trench

れていると考えられるが、川崎スコリア層より上位のローム層の中でも、比較的上部に相当する可能性が考えられる。地層はほぼ水平に堆積していると考えられることから、遺跡が残されている可能性があるのは、3-61区周囲の高まりだけである。

出土した石器の内訳は、二次加工ある剥片1点、ノッチ1点、剥片・チップ11点である。チップのうち5点は、フルイによって採集されたものである。他に、碎片の可能性のあるものがフルイによって2点発見されているが、人為的なものとは確定できない。遺物は、2層から3層にかけて、最大で13.5cmの標高差をもって出土している。石器の出土層は川崎スコリア層より上位であることは間違いない。詳細な時期は不明であるが、後期旧石器時代に属する石器である。調査範囲が狭く、出土点数が少ないこともあり、特に指摘できるような平面分布での特徴は認められない。

#### 【3-62区】(図25、図版6)

3-62区は、周知の遺跡である青葉山C遺跡の範囲内に設定した、2×2mの調査区である。3-61区と同様に、フェアウエイ部分は大きく削平されていることが、第2段階までの調査で判明していた。そのため、フェアウエイ西側に残された高まりが、本来の地形が残されている可能性がある区域となるため、この高まりに調査区を設定した。

周知の遺跡の範囲内であるため、当初より手掘りによって調査を行った。表土から縄文土器の可能性のあるごく細かな破片が1点出土した。しかし保存状態が悪く、土器であると断定できない。これ以外には、遺物は出土していない。

表土の下位には、漸移層が形成されていたが、その下位は川崎スコリア層が含まれる地層であった。川崎スコリア層を含む地層より上位のローム層は、当地点では残されていないことが明らかとなった。

以上の調査所見から、3-62区は青葉山C遺跡の範囲内に含まれるが、当地点では、遺跡の残存状況は、あまり良好でないと考えられる。

## 4. 出土遺物

今回の調査で、遺物が出土したのは、第3段階に実施した3-61区の調査区だけである。

3-61区では、2層・3層から13点の石器が出土した。その内訳は、二次加工ある剥片1点、ノッチ1点、剥片・チップ11点である(図27、表9)。以下では、出土石器の特徴を記述し、石器・石材組成の検討を行う。最後に、遺跡の形成要因と石器群の時期について考察する。

1は、珪化凝灰岩製の二次加工ある剥片である。破損しているが、今回の調査で出土した石器の中で最も大きい。厚手の剥片の片側縁に両面からの二次加工が認められる。剥片腹面側への二次加工の後、背面側に面的な二次加工が施される。折れ面には、黒い付着物が認められる。2は珪質頁岩製のノッチである。破損により全体の形状は不明であるが、ナイフ形石器や鋸歯縁石器の一部である可能性もある。節理によって生じた剥片を素材にして、端部に数回の二次加工を施しノッチ状の部位が作り出されている。この部分には、細かい剥離痕が認められる。3は珪化凝灰岩製の剥片で、4~11は珪質頁岩製のチップである。4~7については、いずれも打面が残存しており、4・6・7は複数の剥離面、5は1枚の平坦な剥離面である。打点やバルバースカーはないが、発達したリップが認められる。二次加工の際に生じたチップである可能性がある。8・9には腹面に、10には両面に、11には背面に被熱による破損の痕跡が認められる。12と13は破片で、12は珪質頁岩製、13は流紋石製である。

表10は石器・石材組成表である。器種は、二次加工ある剥片とノッチ、剥片、チップであり、チップの割合が最も高い。石材は、珪質頁岩が多くの割合を占める。器種と石材の関係では、最も点数の多い珪質頁岩でノッチ1点以外はすべてチップであること、今回出土した石器の中では相対的に大きい二次加工ある剥片と剥片は、珪化凝灰岩製であることが傾向として認められる。

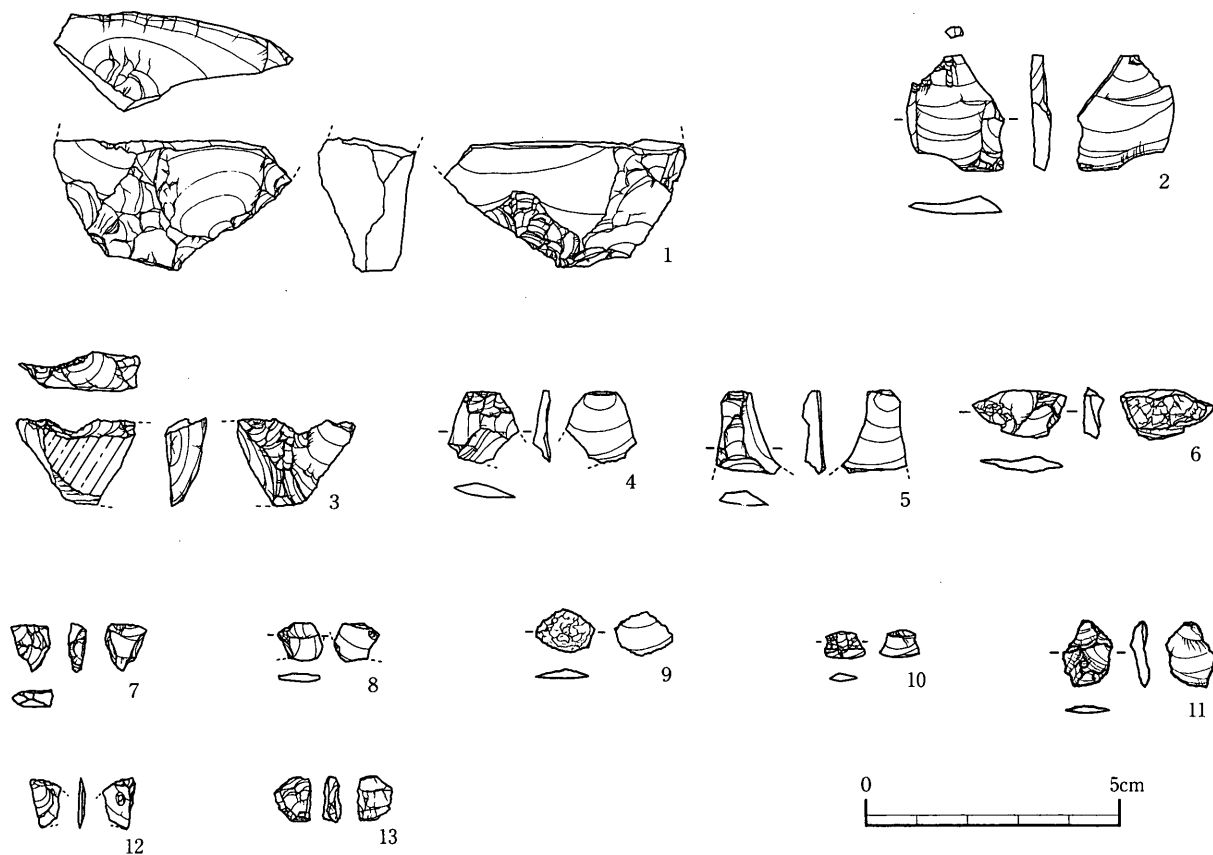


図27 青葉山新キャンパス試掘3-61区出土石器  
Fig.27 Stone tools and stone implements of No.3-61 trial trench

表9 青葉山新キャンパス試掘3-61区出土石器属性表  
Tab.9 Notes on stone tools and stone implements at No.3-61 trial trench

登録番号	器種	石材	X座標 (cm)	Y座標 (cm)	Z座標 (m)	欠損部位	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	被熱	備考	図	図版
1	二次加工ある剥片	珪化凝灰岩	171	20	181.21	破損	25.0	47.1	18.5	17.04	なし		27	6
2	ノッチ	珪質頁岩	13	84	181.21	破損	17.0	23.3	7.4	1.91	なし		27	6
3	剥片	珪化凝灰岩	42	84	181.13	打面部	21.4	18.5	3.3	1.06	なし		27	6
4	チップ	珪質頁岩	129	179	181.23	末端部	13.3	13.4	2.2	0.39	なし		27	6
5	チップ	珪質頁岩	113	73	181.23	末端部	15.5	12.1	3.4	0.42	なし	9と同一母岩	27	6
6	チップ	珪質頁岩	-	-	-	完形	12.0	9.1	1.8	0.18	なし	フルイによる回収	27	6
7	チップ	珪質頁岩	-	-	-	完形	5.0	7.4	1.5	0.07	なし	フルイによる回収	27	6
8	チップ	珪質頁岩	-	-	-	末端部	9.6	17.7	3.2	0.38	あり	フルイによる回収	27	6
9	チップ	珪質頁岩	81	167	181.11	打面部	7.1	8.5	1.3	0.04	あり	5と同一母石	27	6
10	チップ	珪質頁岩	-	-	-	打面部	9.6	6.3	1.1	0.02	あり	フルイによる回収	27	6
11	チップ	珪質頁岩	-	-	-	破損	7.9	11.3	1.7	0.12	あり	フルイによる回収	27	6
12	チップ	珪質頁岩	100	54	181.24	破損	9.1	7.5	3.0	0.20	なし	碎片	27	6
13	チップ	流紋岩	-	-	-	破損	8.3	6.6	3.0	0.17	なし	碎片、フルイによる回収	27	6

表10 青葉山新キャンパス試掘3-61区出土石器石材表  
Tab.10 Notes on stone materials at No.3-61 trial trench

	二次加工ある剥片		ノッチ		剥片		チップ		全体	
	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数
珪質頁岩			1.91	1			1.82	9	3.73	10
珪化凝灰岩	17.04	1			1.06	1			18.10	2
流紋岩							0.17	1	0.17	1
総計	17.04	1	1.91	1	1.06	1	1.99	10	22.00	13

自然面が付着した石器は認められない。母岩については5と9が同一母岩の可能性はあるが、それ以外は単独の母岩であると考えられる。被熱の痕跡がある石器については、4点確認でき、いずれも珪質頁岩製のチップであった。

以上の検討により、青葉山C遺跡では、珪質頁岩製と珪化凝灰岩製、流紋岩製の石核や剥片、ツールを持ち込み、剥片剥離、ツールの制作・補修とその廃棄が行われたと考えられる。主体となるのは珪質頁岩製の石器であるが、全体的に石器の出土数が少なく、分布も散漫であることから、これらの作業はきわめて限定的であったと考えられる。

二次加工が施された石器の廃棄の要因については、どちらも折れ面が認められることから、製作あるいは使用・補修の段階で破損したことが推測される。また、一部のチップに被熱の痕跡が認められており、これらについては、遺跡内での石器製作の後に火の使用が行われたことが推測される。したがって、青葉山C遺跡の形成要因には、石器製作と火の使用の二つの要素が主体的な働きをしていたと考えられる。

出土した石器は、出土層とテフラの関係から後期旧石器時代の所産と考えられる。詳細な時期については、指標となるツールがなく不明である。

## 5. まとめ

青葉山旧ゴルフ場の新キャンパス予定地については、遺跡の有無を確認することを目的として、4段階にわたって試掘調査を実施した。調査対象地は、ゴルフ場造成によって、本来の地形が大きく改変されていることが明らかであった。そのため、既に削平された範囲を確定し、本来の地形が保存されている可能性のある区域を限定していく方法で、試掘調査を実施してきた。最終的な調査結果を要約すると、次のようになる。

従来から周知の遺跡として登載されている青葉山C遺跡の、すぐ北側の高まりに設定した3-61区で旧石器時代の石器が発見された。この調査成果を受けて、青葉山C遺跡の範囲を、3-61区周辺の高まりを含む形に拡大する措置が、仙台市教育委員会によってなされている。

この青葉山C遺跡以外には、新たに遺跡は発見されなかった。ゴルフ場造成によって改変される以前は、自然の開析作用によって形成された、細かな起伏が多数存在していたことが判明した。現状では、比較的平坦な緩い斜面が存在するが、これらはゴルフ場造成時に平坦にならされた区域がほとんどであった。そのため、縄文時代の集落などが立地するのに適した平坦な場所は、ごく一部を除くと、もともと存在しないことが明らかとなった。

一連の試掘調査結果を受けて、新キャンパスの造成計画にあたっては、遺跡への影響を避ける措置をとることとなった。拡大後の青葉山C遺跡の範囲の内、フェアウェイによって削平されている部分を除いて、遺跡が残されている可能性のある高まりの部分については、削平範囲からは外して造成工事が実施されることとなった。



[-0.2]      [-0.1]      [0.0]      [+0.1]      [+0.2]      [+0.3]

-193.4      -193.5      -193.6

1	2	3
4	5	6
7	8	9
		10

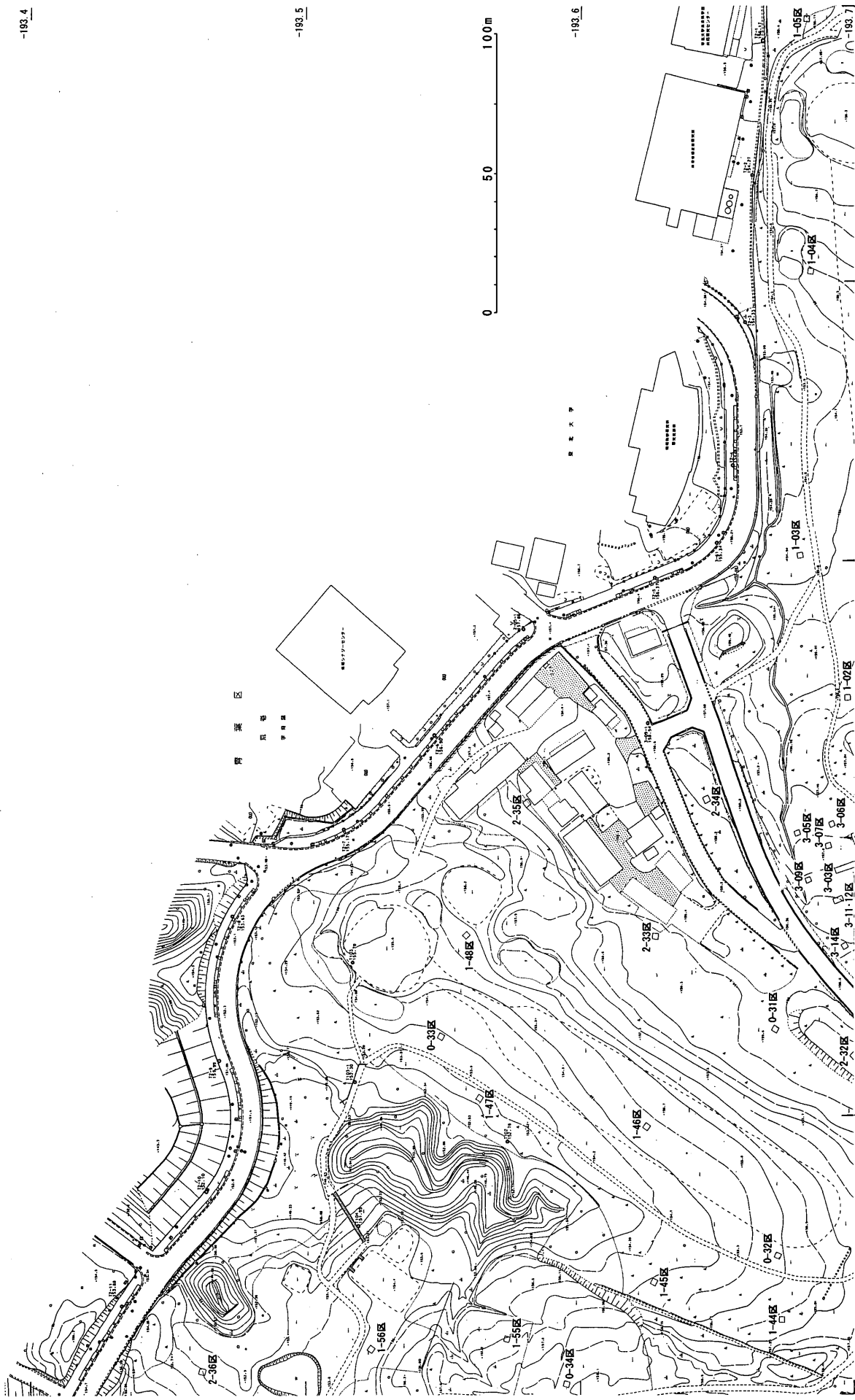


図29 青葉山新キャンパス試掘調査区位置図 (2)  
 Fig.29 Location of the trial trenches at Aobayama new campus predetermined area(2)

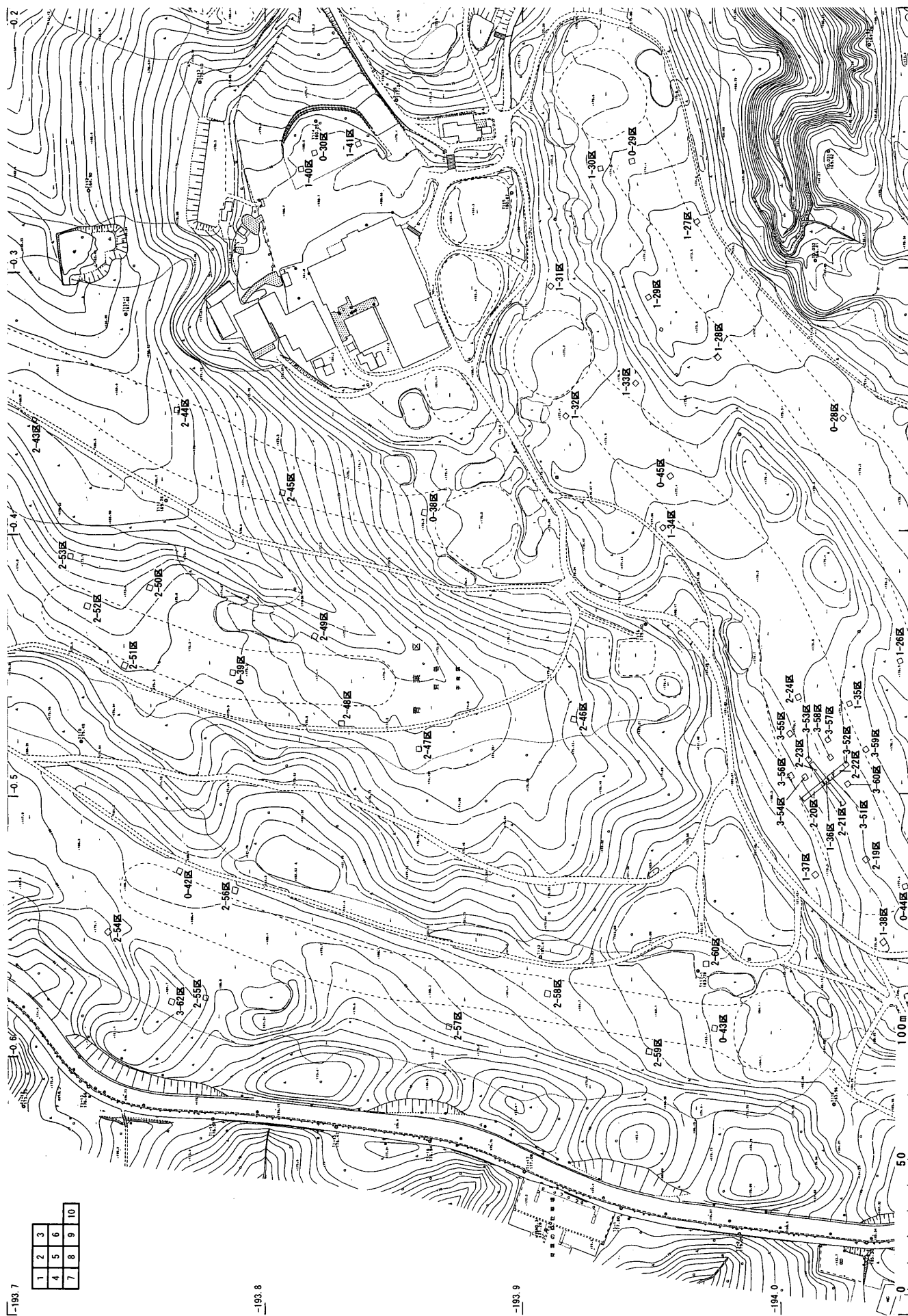


図30 青葉山新キャンパス試掘調査区位置図 (3)  
Fig.30 Location of the trial trenches at Aobayama new campus predetermined area(3)



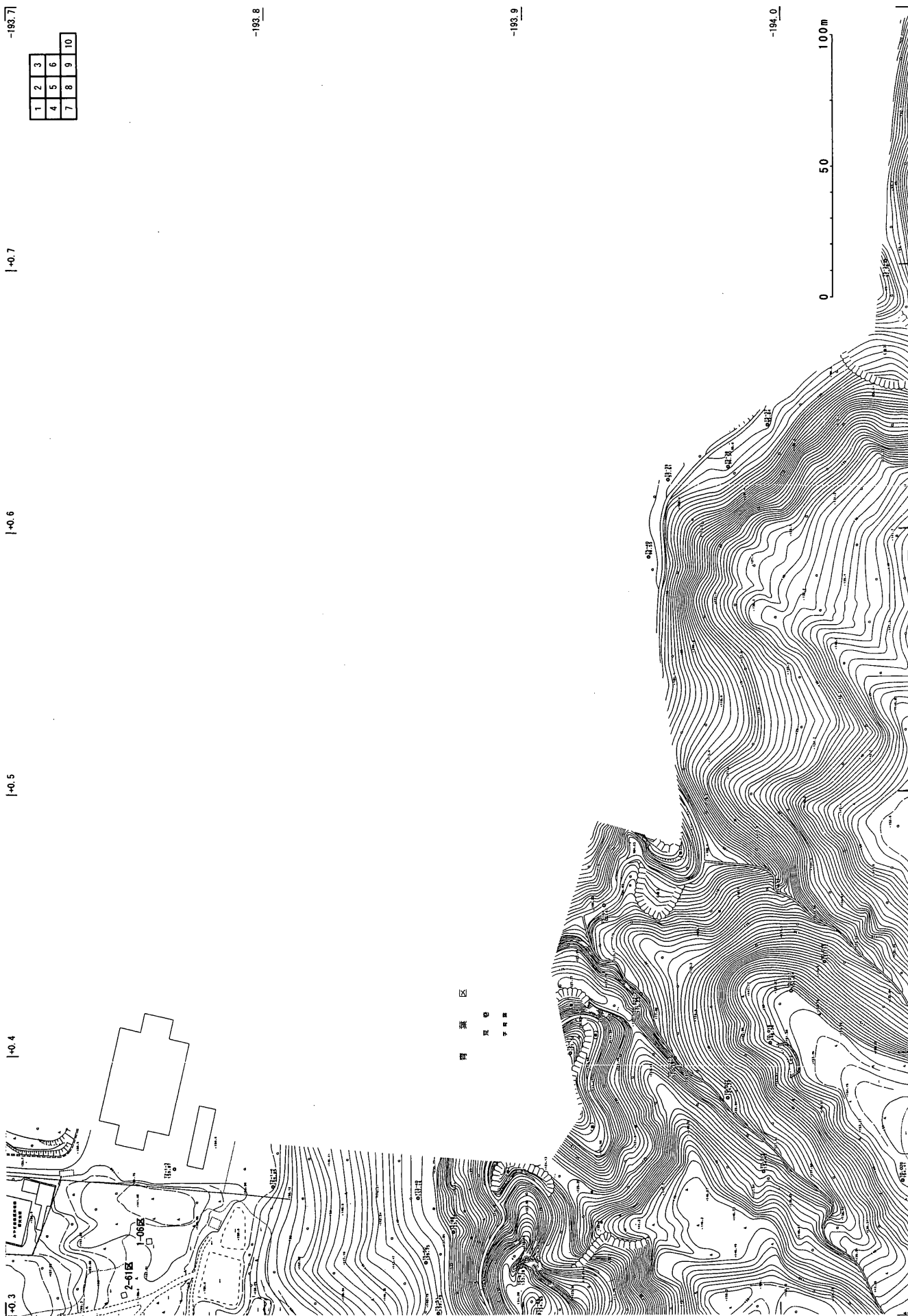
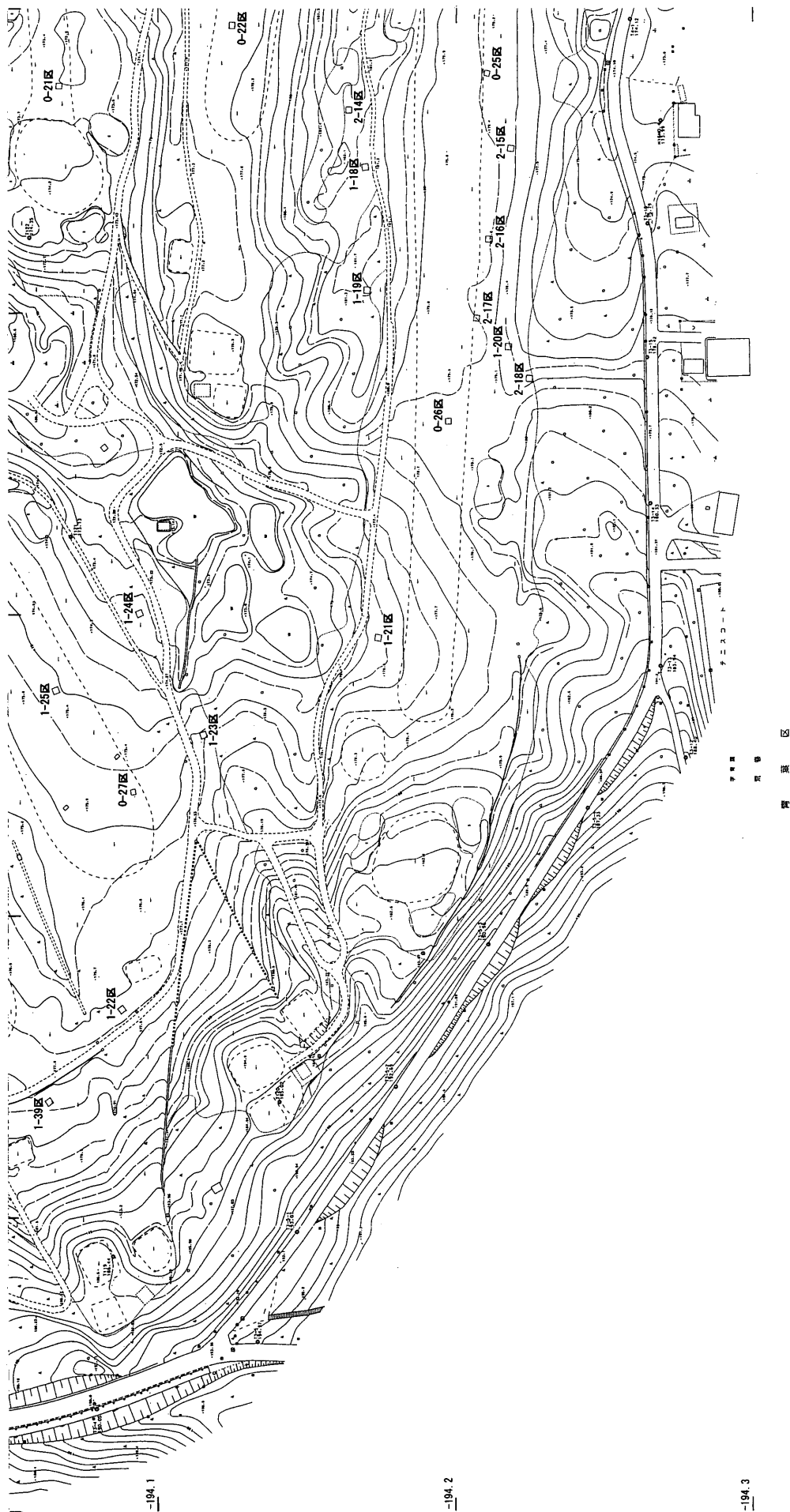


図32 青葉山新キャンパス試掘調査区位置図 (5)  
Fig.32 Location of the trial trenches at Aobayama new campus predetermined area(5)



1	2	3
4	5	6
7	8	9
		10

-194.4

-0.6

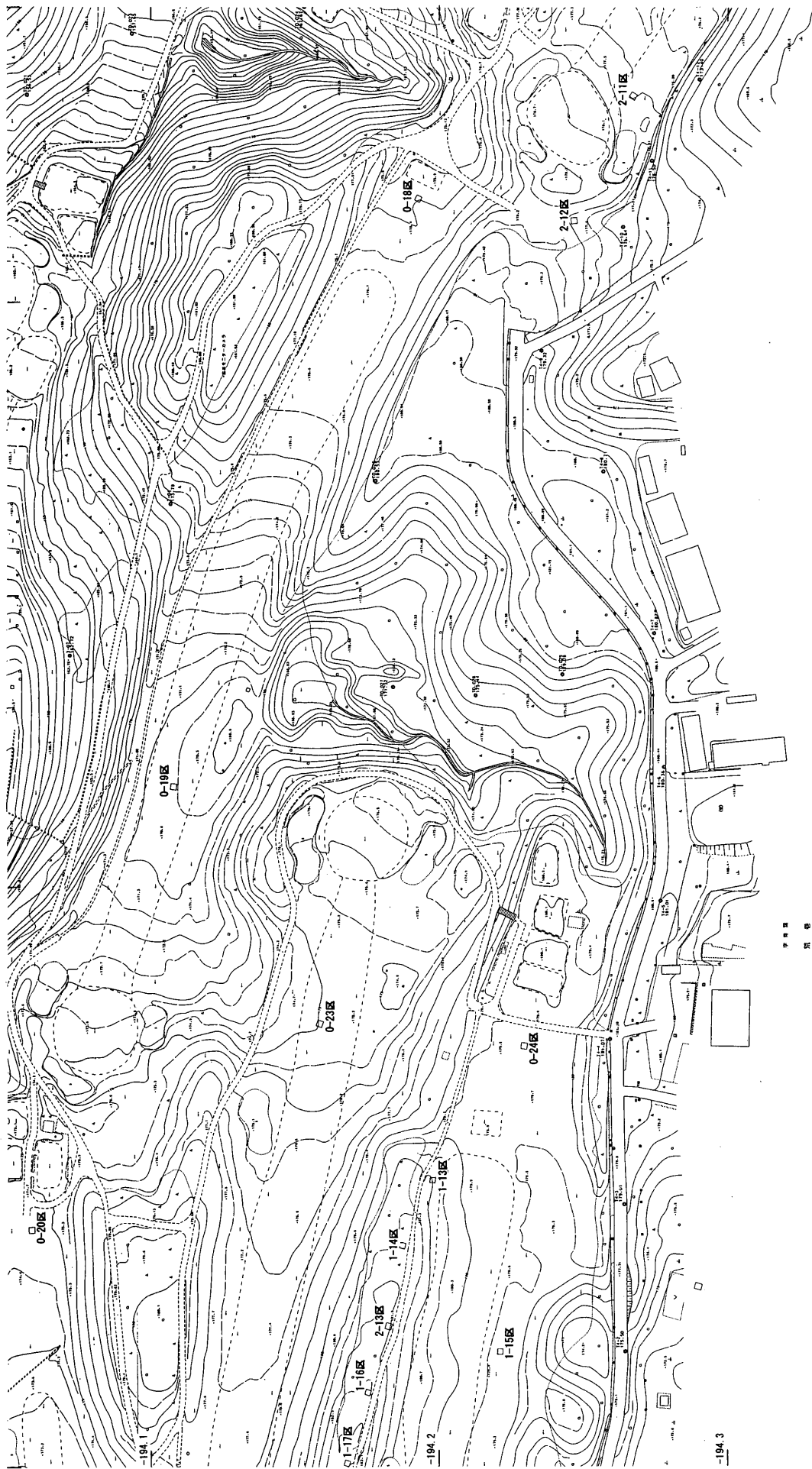
-0.5

-0.4

-0.3

-0.2

図33 青葉山新キャンパス試掘調査区位置図 (6)  
Fig.33 Location of the trial trenches at Aobayama new campus predetermined area(6)



1	2	3
4	5	6
7	8	9
10		

194.1 194.2 194.3 194.4 194.5 194.6 194.7 194.8 194.9 195.0 195.1 195.2 195.3 195.4 195.5 195.6 195.7 195.8 195.9 196.0 196.1 196.2 196.3 196.4 196.5 196.6 196.7 196.8 196.9 197.0 197.1 197.2 197.3 197.4 197.5 197.6 197.7 197.8 197.9 198.0 198.1 198.2 198.3 198.4 198.5 198.6 198.7 198.8 198.9 199.0 199.1 199.2 199.3 199.4 199.5 199.6 199.7 199.8 199.9 200.0

図34 青葉山新キャンパス試掘調査区位置図 (7)  
Fig.34 Location of the trial trenches at Aobayama new campus predetermined area(7)

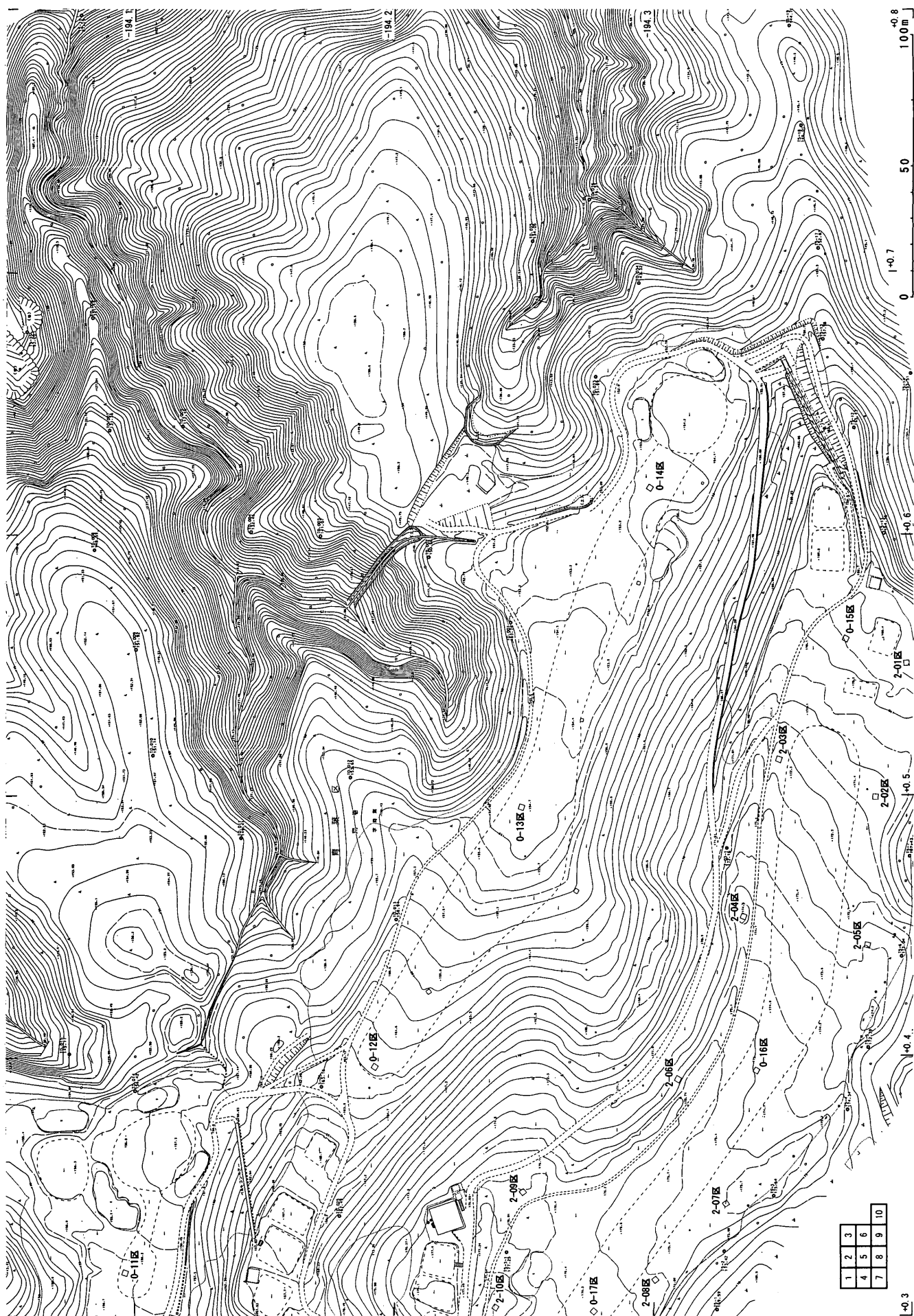


図35 青葉山新キャンパス試掘調査区位置図 (8)  
Fig.35 Location of the trial trenches at Aobayama new campus predetermined area(8)

## 〈引用・参考文献〉

- 阿刀田令造 1936 『仙台北城下絵図の研究』 斎藤報恩会博物館図書部研究報告 4
- 板垣直俊・豊島正幸・寺戸恒夫 1981 「仙台およびその周辺地域に分布する洪積世末期のスコリア層」  
『東北地理』第33巻第1号 pp.48～53
- 市川米太 1986 「青葉山遺跡B地点のTL年代」『東北大学埋蔵文化財調査年報2』 pp.127～128
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
- 江戸陶磁土器研究グループ 1992 『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ』
- 江戸陶磁土器研究グループ 1996 『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』
- 大月義徳 1987 「宮城県中南部の中期更新世示標テフラ」『東北地理』第39巻第4号 pp.268～282
- 大月義徳 1994 「(3) 山地・丘陵地の地形」『仙台市史 特別編1 自然』 pp.56～69
- 大橋康二 1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 古環境研究所 2001 「青葉山遺跡E地点の火山灰分析」『東北大学埋蔵文化財調査年報14』 pp.55～59
- 興水達司 1986 「愛島軽石層のフィッシュ・トラック年代」『東北大学埋蔵文化財調査年報2』 pp.132～133
- 佐藤 隆・荒井 格・佐藤 淳 1990 「青葉山A遺跡」『富沢遺跡第49次・東光寺遺跡第3次・青葉山A遺跡』  
仙台市文化財調査報告書第142集 pp.27～42
- 佐藤高晴 1986 「青葉山遺跡B地点の火山灰のESR年代」『東北大学埋蔵文化財調査年報2』 pp.129～131
- 佐藤 巧 1979 『近世武士住宅』
- 仙台市教育委員会 1967 『仙台北城』
- 仙台市教育委員会 1985 『仙台北城三の丸跡』仙台市文化財調査報告書第76集
- 仙台市教育委員会 1994 『仙台市青葉区文化財分布地図』
- 仙台市教育委員会 1995 『仙台市太白区文化財分布地図』
- 仙台市教育局生涯学習部文化財課 2004 『仙台北城跡整備基本構想』
- 仙台市教育局生涯学習部文化財課 2005 『仙台北城跡整備基本計画』
- 仙台市史編さん委員会編 1994 『仙台市史 特別編1 自然』仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 2006 『仙台市史 特別編7 城館』仙台市
- 高倉淳ほか編 1994 『絵図・地図で見る仙台』今野印刷
- 坪井利弘 1977 『図鑑瓦屋根』理工学社
- 坪井利弘 1979 『棧瓦屋根のデザイン』理工学社
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 『東北大学埋蔵文化財調査年報1』
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1986 『東北大学埋蔵文化財調査年報2』
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 『東北大学埋蔵文化財調査年報3』
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1992 『東北大学埋蔵文化財調査年報4・5』
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1993 『東北大学埋蔵文化財調査年報6』
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1994 『東北大学埋蔵文化財調査年報7』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 『東北大学埋蔵文化財調査年報8』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 『東北大学埋蔵文化財調査年報9』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 『東北大学埋蔵文化財調査年報10』

- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1999 『東北大学埋蔵文化財調査年報11』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1999 『東北大学埋蔵文化財調査年報12』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2000 『東北大学埋蔵文化財調査年報13』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2001 『東北大学埋蔵文化財調査年報14』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2001 『東北大学埋蔵文化財調査年報15』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2001 『東北大学埋蔵文化財調査年報16』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2002 『東北大学埋蔵文化財調査年報17』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2003 「17宮城県仙台市青葉山B 18宮城県仙台市青葉山E」  
『前・中期旧石器問題の検証』 pp.140～152 日本考古学協会
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2005 『東北大学埋蔵文化財調査年報18』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2006 『東北大学埋蔵文化財調査年報19第1分冊』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2006 『東北大学埋蔵文化財調査年報20』
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2006 「仙台市青葉山C遺跡」『平成18年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』  
pp. 1～6
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2007 『東北大学埋蔵文化財調査年報19第3分冊』
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2007 『東北大学埋蔵文化財調査年報21』
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2007 「2006年度宮城県内主要遺跡紹介 青葉山C遺跡」『宮城考古学』第9号  
p.200 宮城県考古学会
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2008 『東北大学埋蔵文化財調査年報19第4分冊』
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2008 『東北大学埋蔵文化財調査年報22』
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2009 『東北大学埋蔵文化財調査年報19第2分冊』
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2009 『東北大学埋蔵文化財調査年報23』
- 宮城県教育委員会 1998 『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第176集
- 村上 直・木村 礎・藤野 保 1988 『藩史大事典 第1巻北海道・東北編』雄山閣
- 山内清男 1929 「繊維土器について追加二」『史前学雑誌』第一巻第三号 pp.85～86 史前学会
- 吉岡一男ほか篇 2005 『絵図・地図で見る仙台 第二輯』今野印刷

REPORT  
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF  
TOHOKU UNIVERSITY  
Vol.24, March 2010

The Archaeological Research Office  
On The Campus, Tohoku University  
Katahira-cho, Aoba Ward, Sendai  
980-8577 JAPAN

Summary

On the Campus of Tohoku University, a lot of sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area. The north part of Kawauchi campus is located on the sites of samurai residences. Aobayama campus includes Initial Jomon site. In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. The Office mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on campus.

This volume carries reports of a salvage excavation at BK10 on Kawauchi campus, and a trial excavation on Aobayama new campus predetermined area, which were conducted by the Archaeological Research Office on the Campus, Tohoku University in the fiscal year 2006. This volume includes reports about results of confirmation work with constructions, and activities which were conducted by the Office such as various analyses, conservation work of artifacts, and joint research.

**BK10** (Loc.10 of samurai residences located at the site of north outer moat of Ninomaru, i.e. the secondary citadel of Sendai Castle)

This excavation was conducted prior to repair of the Laboratories for Students. This area is located on Kawauchi-Kita campus, and in Edo period, samurai residences were located here. It is a small-scale excavation, as the total excavation area is only 124.5m<sup>2</sup>.

Almost all of this excavation area had been already destroyed when or before the Tohoku University buildings were developed at the site. Archaeological features were not preserved well. A few archaeological features, such as a well, a ditch and a store alignment (low wall) were found. Contents of archaeological remains were also limited. Some porcelain, glazed ceramics, unglazed ceramics and roof tiles were found. As to the stone wall, there is a possibility that the wall was a part of a ditch along a road at the samurai residences.

**The trial excavation on Aobayama new campus predetermined area**

This area is the predetermined area of the Aobayama new campus on Aobayama hills. For the purpose of testing the existence of archaeological sites, the trial excavation program was carried out.

This area had been a golf course. So it is difficult to reconstruct the original natural geographical features. In order to estimate the present circumstances in all the predetermined area, we first carried out a preparatory excavation. After the preparatory excavation of test pits, we compared the excavation data with an aerial photograph of this area taken before the golf course was constructed. As a result, we could roughly know the change of geographical features. On the basis of this result, we conducted the trial excavations in 3 steps. The plans of trial excavation was made to reduce the possible area for new site discovery, step by step. The number of trial trenches was 222, and the total excavation area was 1,164m<sup>2</sup>.

At No.3-61 trial trench located on a small hill on the north of Aobayama C site, 13 stone tools were found, and they are dated to the Late Palaeolithic period chronologically. The assemblage consists of a retouched flake, a notch, 11 flakes and/or chips. As a result of this excavation, the area of Aobayama C site was extended. Except the Aobayama C site, any new sites were not found within the predetermined area for the new campus of Tohoku University.



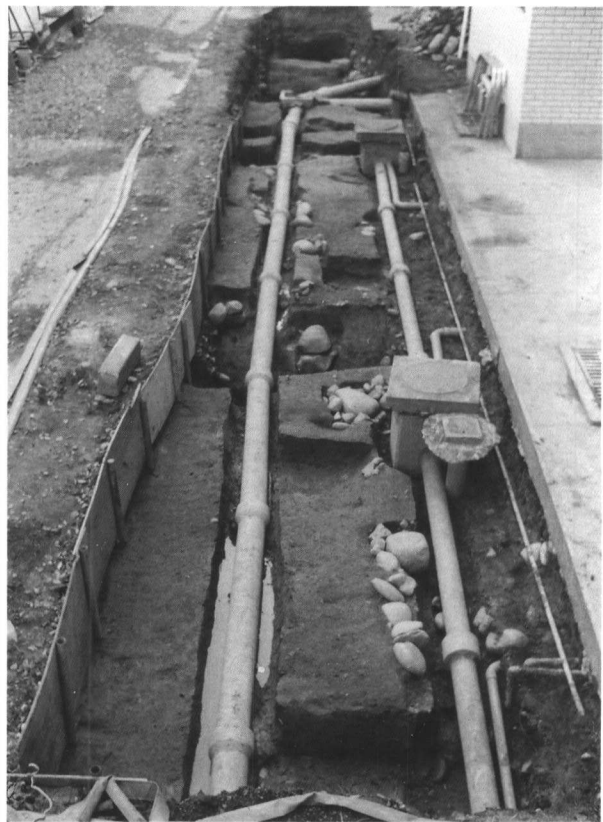
# 写 真 図 版

図版 1 ～ 4 : 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点 (BK10)  
図版 5 ～ 6 : 青葉山新キャンパス試掘調査





1. 1区全景（南から）



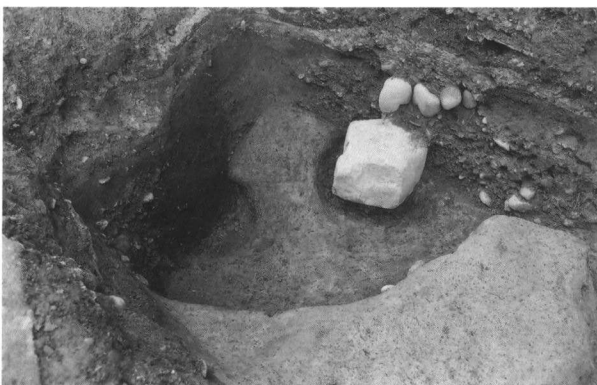
2. 1区全景（北から）



3. 1区1号溝セクション（東から）



4. 1区1号溝完掘（西から）



5. 1区2号溝完掘（北東から）



6. 1区井戸セクション（西から）

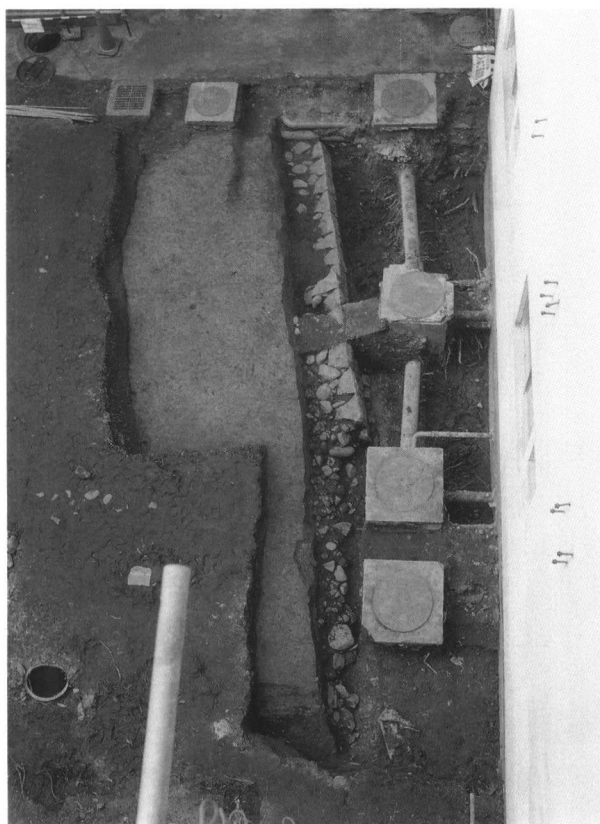
図版 1 武家屋敷地区第10地点検出遺構 (1)  
Pl.1 Features at BK10 (1)



1. 1区ビット1セクション（北から）



2. 1区ビット1完掘（北から）



3. 2区全景（南から）



4. 2区石垣全景（北から）



5. 2区石垣セクション北壁（北から）

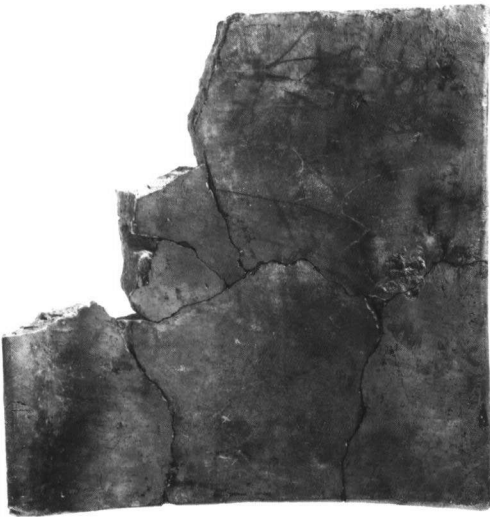


6. 2区石垣裏込め（北から）

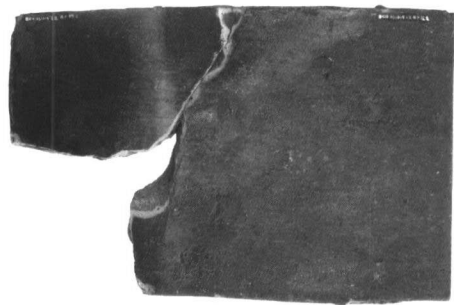
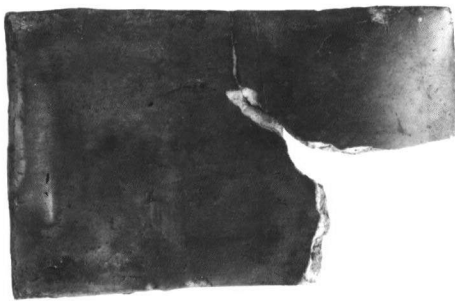
図版2 武家屋敷地区第10地点検出遺構（2）  
Pl.2 Features at BK10 (2)



T1



T2



T3



T6

T1~T3 S=1 : 4  
T6 S=4 : 5

図版3 武家屋敷地区第10地点出土遺物 (1)  
Pl.3 Various roof tiles from BK10



T4



T5



T7



CJ1

T4·5·7 S=1:4  
CJ1 S=1:3

图版4 武家屋敷地区第10地点出土遺物 (2)  
Pl.4 Various roof tiles and porcelain from BK10



1. 3-61区遠景（東から）



2. 3-61区全景（東から）



3. 3-61区全景（南東から）



4. 3-61区遺物出土状況（南から）



5. 3-61区 No. 1・6 出土状況（東から）



6. 3-61区 No. 5 出土状況（南から）



7. 3-61区 No. 5 インプリント（西から）



8. 3-61区最終状況（北から）

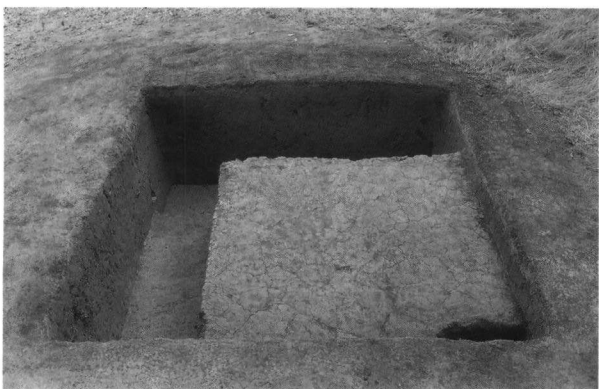
図版5 青葉山新キャンパス試掘調査状況  
Pl.5 Views of trial excavation at the Aobayama new campus predetermined area



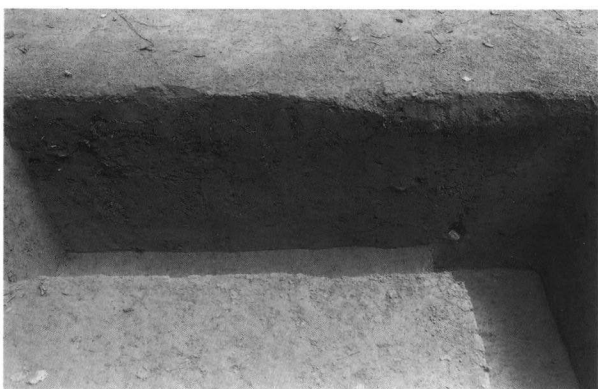
1. 3-61区南壁セクション（北から）



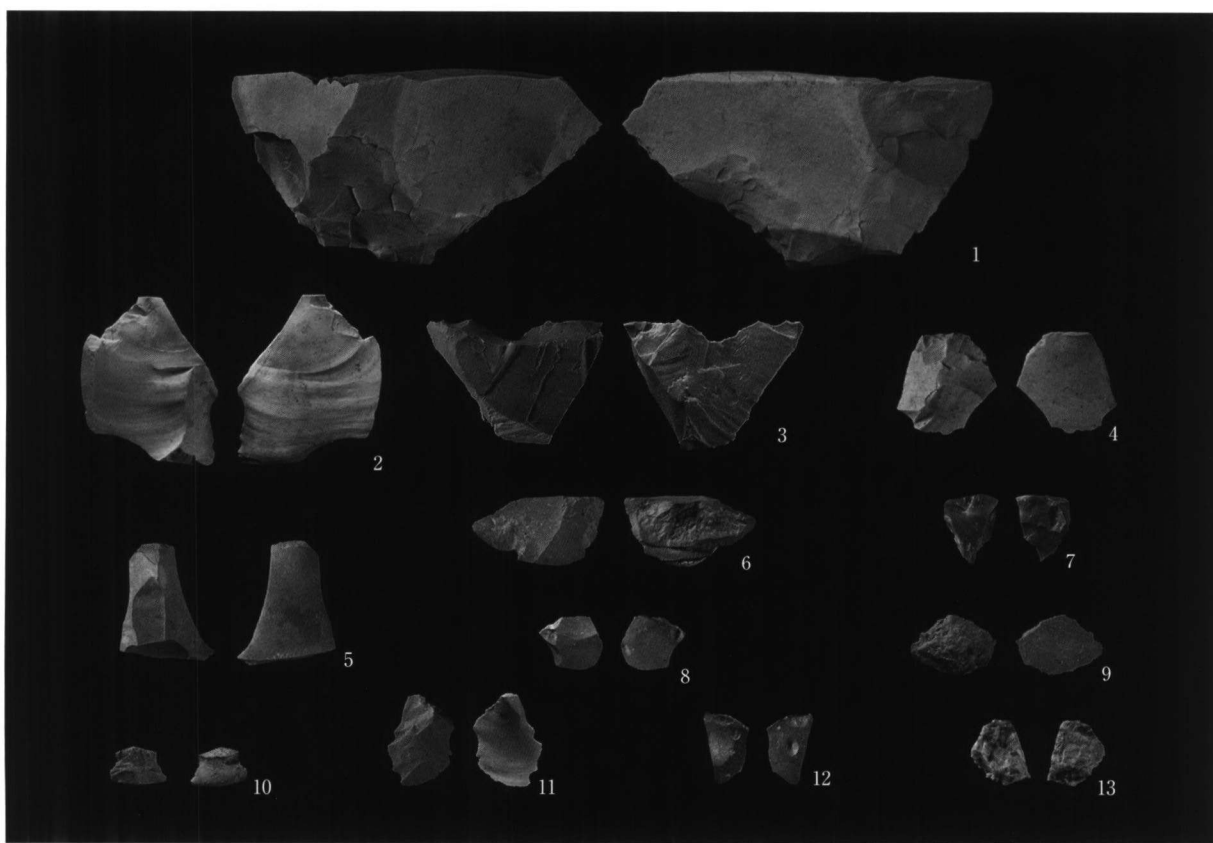
2. 3-61区西壁セクション（東から）



3. 3-62区最終状況（北から）



4. 3-62区東壁セクション（西から）



S= 1 : 1

図版6 青葉山新キャンパス試掘調査状況・出土遺物  
Pl.6 Views of trial excavation at the Aobayama new campus predetermined area and the artifacts

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	とうほくだいがくまいぞうぶんかざいちょうさねんぼう							
書名	東北大学埋蔵文化財調査年報							
副書名								
巻次	24							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	阿子島香・藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮（2008年度まで）・菅野智則（2009年度から）							
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒980－8577 宮城県仙台市青葉区片平二丁目1－1 TEL022-217-4995							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(世界測地系)				
せんだいじょうあと 仙台城跡 (二の丸北方 武家屋敷地区)	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 あおばくかわうち 青葉区川内	04100	01033	38° 15′ 32″	140° 50′ 57″	2006.10.2 ～11.10	124.5	共通実験棟 改修工事
あおばやまいせき 青葉山C遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 あおばくあらまき 青葉区荒巻 あざあおば 字青葉	04100	01442	38° 15′ 17″	140° 49′ 38″	2006.5.9 ～9.7	932	青葉山 新キャンパス 計画
あおばやまいせき 青葉山B遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 あおばくあらまき 青葉区荒巻 あざあおば 字青葉	04100	01373	38° 15′ 33″	140° 50′ 23″	2007.1.15 ～1.26	42.1	理・薬学部 松林 環境整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
仙台城跡二の丸 北方武家屋敷地 区第10地点	城館	近世	溝、井戸、石垣、 ピット		陶磁器、土師質土器、 瓦			
青葉山C遺跡	散布地	後期旧石器 時代	なし		二次加工ある剥片、 剥片、ノッチ、チップ		遺跡範囲が修正 されている	
青葉山B遺跡	散布地	－	なし		なし		試掘調査	
要約	武家屋敷地区 第10地点		調査面積が小規模で、遺構面の保存状態も良くなく、出土遺物も僅少である。1区からは溝2条、井戸1基、ピット1基が検出され、2区からは石垣が検出された。石垣の造られた時期は確定できないが、「大堀通」の側溝となる可能性が考えられる。					
	青葉山C遺跡		青葉山C遺跡の、すぐ北側に隣接する高まりに設定した3－61区で、後期旧石器時代の石器が発見された。この調査結果を受けて、青葉山C遺跡の範囲を拡大する措置が仙台市教育委員会によってとられている。ゴルフ場造成時の削平により、遺跡が残されている可能性があるのは、3－61区周囲の高まり部分のみである。					
	青葉山B遺跡		工事によって大きく削平される3カ所について、試掘調査を実施し、遺跡の状況を確認した。1区では漸移層が残っていたが、2区・3区はすでに削平を受けていることが確認された。いずれの区でも遺構・遺物は検出されていない。					

---

---

## 東北大学埋蔵文化財調査年報24

平成22年 3 月31日

発行 東北大学埋蔵文化財調査室  
〒980-8577 仙台市青葉区片平 2 丁目 1 - 1  
TEL 022 (217) 4995

印刷 株式会社 東北プリント  
TEL 022 (263) 1166

---

---

REPORT  
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF  
TOHOKU UNIVERSITY

vol. 24

BK10 (Loc. 10 of samurai residences located at the side of north outer moat  
of Ninomaru)

Trial excavation at Aobayama new campus predetermined area

2 0 1 0

The Archaeological Research Office on the Campus  
TOHOKU University  
Sendai, JAPAN